

# 学位論文

プロトコルを用いた建築設計手法

～ プロトコロジー ～

Architectural Methodology Based on Protocols

– Protocology –

2018年12月

早稲田大学大学院 創造理工学研究科

吉村 靖孝

Yasutaka YOSHIMURA





# 目次

|                              |     |
|------------------------------|-----|
| >>第一章<プロトコロジーの定義・仮説・背景と位置づけ> | …7  |
| >定義                          | …11 |
| <プロトコル及びビヘイヴィアの定義>           |     |
| <極限で似るプロトコルとビヘイヴィア>          |     |
| <外部的かつ長期的で強い規制力としてのプロトコル>    |     |
| >仮説                          | …17 |
| <ビヘイヴィアを喚起するプロトコル>           |     |
| <主体性の回復を支える>                 |     |
| >背景と位置づけ                     | …25 |
| <プログラム論の登場>                  |     |
| <シチュアシオニストの再解釈>              |     |
| <プロトコルを適用する3つの領域>            |     |
| >>第二章<規制力の4側面を用いた実践的研究>      | …37 |
| >解説                          |     |
| >「法」を卓越させた実践的研究              | …43 |
| <法が生み出す風景>                   |     |
| <旗竿敷地に建つコモンズとしての屋上菜園>        |     |
| <著作権を開いて参加を促す>               |     |
| >「規範」を卓越させた実践的研究             | …53 |
| <海への眺望という規範を遵守>              |     |
| <場所の記憶を喚起する>                 |     |
| <設計行為の民主化>                   |     |
| >「市場」を卓越させた実践的研究             | …63 |
| <海外でつくり大幅なコストダウンを実現する>       |     |
| <既製品を組み合わせてつくる建築>            |     |
| <新しいビジネスが生む新しい住宅>            |     |
| >「環境」を卓越させた実践的研究             | …71 |
| <インフラのない場所で生き残るための建築>        |     |
| <窓のない環境でサーカディアンリズムをつくる>      |     |

|                         |      |
|-------------------------|------|
| >>第三章<プロトコロジーの実践事例>     | …79  |
| >半動産建築                  | …82  |
| 【フクマスベース】               |      |
| 【ベイサイドマリーナホテル】          |      |
| 【エクスコンテナプロジェクト】         |      |
| 【EDV01】                 |      |
| 【WHEREEVERGREEN TAIPEI】 |      |
| 【鋸南の合宿所】                |      |
| 【Nowhere but Sajima】    |      |
| 【Nowhere but Hayama】    |      |
| >半情報建築                  | …118 |
| 【ハウスメイカー】               |      |
| 【メイクオルタナティブ展】           |      |
| 【ミラーエラー】                |      |
| 【Re:public展】            |      |
| 【レッドライトヨコハマ】            |      |
| 【TBWA/HAKUHODO】         |      |
| 【亀や龍宮殿】                 |      |
| >半都市建築                  | …142 |
| 【窓の家】                   |      |
| 【中川政七商店新社屋】             |      |
| 【中川中川政七商店旧社屋増築棟】        |      |
| 【サイエンナガヤ】               |      |
| >>第四章<プロトコロジーを用いた新たな計画> | …170 |
| 【羽田空港E滑走路高層化計画】         |      |
| >>第五章<まとめと展望>           | …200 |
| <プロトコル空間としての環世界>        |      |
| <建築の民主化の実験場としての日本>      |      |
| >>参考文献一覧                | …212 |
| >>業績一覧                  | …214 |
| >>謝辞                    | …229 |



.....

プロトコルを用いた建築設計手法

～ プロトコロジー ～

Architectural Methodology Based on Protocols

– Protocology –

.....

>>博士論文概要

プロトコルとは、複数の主体が関わる案件において対象となる事項を確実に実行するため手順を定めたもので、哲学（プロトコル命題）、情報工学（通信プロトコル）、政治（外交プロトコル）などの分野で使われてきた用語である。いずれの分野でも強力かつ広範な規制力へと転じたが、筆者はこれを「市場」、「法」、「規範」、「環境」の4側面に分解し、さらに「半動産建築」、「半情報建築」、「半都市建築」の3領域と掛け合わせることで建築設計活動の拠り所としてきた。本論では、作品群の位置づけを行うと同時にプロトコルの有用性を検証・論述して総括し、プロトコロジーと名付ける。第一章ではプロトコロジーに関するこれまでの取り組みと本研究の位置づけを行い、第二章では自著ビヘイヴィアとプロトコルをベースに4側面を用いた設計手法について解説する。第三章ではプロトコロジーの実践例としてエクسコンテナをはじめとする一連の作品群について論じる。第四章は、第三章までの論点を整理し展望を述べる。









.....

>>第一章

<定義・仮説・背景と位置づけ>

.....

>定義

<プロトコル及びビヘイヴィアの定義>

プロトコルは耳慣れない言葉かもしれない。日本語にはうまく当てはまる訳語がなく、多くの場合単にカタカナでプロトコルと書かれるのみである。語源はギリシャ語のProtokollon=最初の・糊（ページ）とされており、つまり後ろに続く内容の読み方を規定するはじめの一節を指している。哲学の分野ではそれ以上分解し得ない経験的命題への還元を指す「プロトコル命題（★1）」、情報工学の分野では電子機器間で通信する際の取り決め「通信プロトコル（★2）」、政治の分野では多国間の儀礼を司る「外交プロトコル」といったように、すでにさまざまな文脈で使われており、いずれも複数の異なる法則や慣習を横断する「より上位の取り決め」を意味している。建築分野ではこれまでこの語が積極的に用いられることはなかったが、しかしだからと言って、プロトコル的な建築が存在しないという理由にはならない。たとえば超高層建築などは、プロトコルがもたらすビルディングタイプの典型的な例だろう。限られた土地に最大の床面積を獲得する摩天楼は、「市場」という現代における「超越的な原理（=プロトコル）」に最適化した空間と解釈できるからだ。もう一方のビヘイヴィアとは、人間の動作



や振る舞い、あるいは姿勢や態度といったかすかな兆候のことである(★3)。一般に更新周期が短いとされる日本の建築は、そういった静かなシグナルに丁寧に反応し空間に定着することをひとつの美德としてきた。たとえば、四畳半を標準とし、三畳台目(不審庵)、二畳半台目(如庵)、二畳(待庵)などさえ存在する茶室の極小空間にあっては、振る舞いと空間がひりひりするような緊張関係を築いている。茶室はビヘイヴィアの探求の末に築かれたビルディングタイプだと言えるだろう。

#### <極限で似るプロトコルとビヘイヴィア>

超高層建築と茶室という極端に規模の異なる例に言及したが、しかし規模の大小はプロトコルとビヘイヴィアの差の本質ではない。そのことを明らかにするため、チャールズ&レイ・イームズ(★4)のデザインした二種類の椅子「DSシリーズ(■1)」と「ラシェーズ(■2)」について以下のような比較・考察を行ってみたい。両者はともにFRP成形技術による自由曲面の椅子であるが「DSシリーズ」は、生産(プレス成形)や流通(スタッキング)といった外的要因=プロトコルが形状決定の要因となっている。DSはDining Shellの頭文字で、足の種類によってDSR(エッフェルベース)、DSW(ウッドベース)、DSX(Xベース)、DSS(スタッキングベース)と展開する。合理的な商品構成による世界的なロングセラーのダイニング用チェアであり、駅や会議室などでも利用されたほか、多くのリプロダクト品(★5)がつくられている。一方のラシェーズは、ガストン・ラシェーズの彫刻作品「フローティング・フィギュア」の裸婦の寝姿勢をぴたりと受け止めるようにデザインされたものである。寝るでも座るでもないあいまいな姿勢は私の言うビヘイヴィアの領域に属しており、座面の形状も不定型でふわふ

#### ■1

##### DSシリーズ



#### ■2

##### ラシェーズ





わとした雲のようなデザインである。その特異なデザインから美術品に近い扱いで流通する極めて珍しいプロダクトになっている。また彫刻家ラシェーズ (Lachaise) の名がフランス語の安楽椅子 (La Chaise) にかかっており、命名の方法すら「DSシリーズ」とはまるで別人であるかのようなアプローチである。両者はともに金属または木製の脚にFRP成形による座面が載る椅子で、製造・販売するブランドも同じである。しかし、サイズで言えばラシェーズ (=ビヘイヴィア) の方が数倍大きく、超高層建築 (プロトコル) と茶室 (ビヘイヴィア) の大小とは逆転している。

#### <外部のかつ長期的で強い規制力としてのプロトコル>

プロトコルとビヘイヴィアは単に対象の大小を意味するのではないと述べた。しかしながら、対象に影響を及ぼす力に注目してみると、そこには大小としか言いようのない差が見える。言うまでもなく、マスプロダクションの流通や生産は社会を巻き込む大きな力であり、姿勢やネーミングのユーモアなどは個人の内面から生まれる小さな力である。本論では、プロトコルを外部的、長期的、強力かつ大規模な規制力と定義し、内部的、短期的、脆弱かつ小規模なビヘイヴィアと対置 (■3) して整理する。またそれを建築の設計手法まで昇華し、プロトコルに学を表す接尾語の-ologyをつづけ、プロトコロジー (プロトコル学) と名付ける。

#### ★1

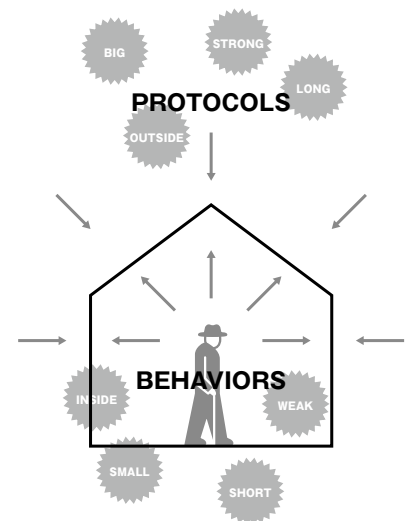
プロトコル命題：ウィーン学団の哲学者ノイラートとカルナップの概念で論理実証主義の用語。知覚や観察の結果を命題として記述したもので、他の命題を検証するための基盤となる

#### ★2

通信プロトコル：ネットワーク上でデータを通信するための手順や規約の集合のことである。最初にこの言葉が使われたのは1968年に稼働開始したARPANET (アーパネット) と言われる。『プロトコ

#### ■3

プロトコルとビヘイヴィア



拙著『ビヘイヴィアとプロトコル』より





ル：脱中心化以後のコントロールはいかに作動するのか』アレクサンダー・R. ギャロウェイ著に詳しい

### ★3

建築家の塚本由晴はビヘイビア及びビヘイビオロロジーという言葉を用い、「人間の振る舞い」、「自然の振る舞い」、「建物の振る舞い」という三つの次元、あるいは私がプロトコルと呼ぶ経済や法を統合しようと試みている。本論は、プロトコルから、つまり塚本とは逆のアプローチでビヘイヴィアに迫るものである

### ★4

チャールズ・イームズ (Charles Ormond Eames, Jr 1907- 1978) とレイ・イームズ (Ray Eames, Bernice Alexandra Ray Kaiser Eames (1912- 1988)) はアメリカ人のデザイナー・建築家・映像作家である。合板やプラスチックなど新しい工業部材を積極的に使い20世紀の工業デザインに大きな影響を与えた

### ★5

リプロダクト品：意匠権の期限が切れた製品を、オリジナルデザインを元に復刻した製品。ジェネリック製品と表現されることもある

.....

## > 仮説

### <ビヘイヴィアを喚起するプロトコル>

建築に作用する外部的、長期的、強力かつ大規模な規制力であるプロトコルを、どのように扱えば設計手法へと昇華できるだろう。日本建築の繊細さと良く呼応するビヘイヴィアよりも、プロトコルの方が設計に有効だと言えるのだろうか。それを考える前提として確認したいのは以下の2点である。まず、あらゆる建築は常にプロトコルとビヘイヴィアのせめぎ合いを経て建ち上がるのであって、プロトコルとビヘイヴィアのいずれかを取捨選択すれば良いわけではないこと。また両者を「社会的な制約」と「個人的な趣向」と要約すれば、いかにも社会に向き合う側に正義があるように聞こえるが、そのような政治的な正しさを語るのが目的ではない



ことである。ビヘイヴィア建築には魅力がある。日常生活の機微に素直に反応し、小さな幸せを受け止めるような建築は、簡単には否定できない。しかしその機微を建築が先回りして事細かにトレースするようになったとき、はたしてそれが人間に幸福をもたらすのか、私は疑問を覚える。その時人間は、建築に飼い慣らされて自由を失っているのではないか。むしろビヘイヴィア派が語る個人の根源的な喜びや生の解放のために、プロトコルがもたらすズレを利用することができるのではないか。言い換えれば、ビヘイヴィアの喚起のためにこそ、プロトコルが活用されなければならないのではないか。これこそが、本論の掲げる仮説である。

#### <主体性の回復を支える建築>

2016年の秋にハワイ大学で行ったワークショップの期間中に撮った一枚の写真がここにある(■4)。空調の効いた



#### ■4

ハワイ大学の中庭でゼミを行うグループ／撮影：吉村靖孝

スタジオに籠もっているあいだ、ふと見下ろした中庭でゼミを行うグループを撮影したものだ。ハワイの良好な屋外環境を最大限活かしていかにも心地よさそうな時間を過ごす集団だが、ではその屋外環境の快適さを計測し再現し得るかと考



えてみると、すぐにそれが不可能だと気づかされる。奥の数人は木陰で木漏れ日を楽しみ、手前の数人は逆に太陽の光を燦々と浴びており、つまり数値による環境性能の計測は意味をなさないのである。むしろ、彼らの表情を生き活きと輝かせているのは、彼らが自分達の意志によって教室を抜け出したという事実だ。このグループのように、利用者が主体性を発揮できる建築や都市をどのようにすれば計画できるだろうか。この問いは、真に民主的な建築とは何かと問うことにもつながるだろう。計画者の側からすれば、無計画を計画するという禅問答のような課題であり、けして到達できないディレンマでさえあが、しかし、そのディレンマを回避するためにプロトコルを経由するという方法がプロトコロジーの主題である。私は、利用者の行動を直接的に扱うビヘイヴィアの建築は、むしろ利用者の主体性を蝕むと考える。ハワイの恵まれた青空の下にあっても学生の大半は空調で外部と切り離された教室に隠れているのが現実であり、もしもハワイ大学の校舎がビヘイヴィアに最適化され、十分に心地よだけでなく、十分に創造的な空間まであらかじめ提供していたとしたら、利用者はもはやそこから逃れる意志を持ち得ないと思うのだ。利用者は単に空間の消費者であれば良いわけではない。そういった空間はサステイナブルでないばかりか、すでに死んでいるとさえ言えるだろう。ビヘイヴィアにとって不利・不便な条件こそが、実は主体性を育む孵化器である。空間への参加を促し、あわよくばその生産者になることを求める建築こそが、真に民主的な建築の姿なのではないだろうか。

#### <プロトコルを適用する3つの領域>

プロトコルの実例として超高層建築を挙げたが、実のところ私は、単なる超高層建築では改めてプロトコロジーと呼ぶに



は値しないと考えている。帰納的にプロトコルが導き出されるだけでなく、演繹的に使える法則にまで育てなければプロトコロジーは無益だろう。そのためにここで「半動産建築」「半都市建築」「半情報建築」という3つの領域を召喚したい。これらは「半」という接頭語が表すとおり、それぞれ建築と〇〇の中間的な領域を表している。「半動産建築」は不動産（建築）と動産（車や家具）のあいだ、「半都市建築」は都市と建築のあいだ、「半情報建築」は情報空間と実空間のあいだである。たとえば、MVRDVによる「PIG CITY (2000)」（■5）という超高層養豚場の計画は、口



#### ■5

PIG CITY / MVRDV (2000)

<http://mvrdiv.nl> より

蹄疫の蔓延を避けるため一頭あたりの飼育スペースを拡張したうえで縦に積んで超高層化している。一次産業、二次産業、三次産業を重ね合わせ、日本風に言うところの六次産業を導く、まさしくプロトコル（外部的・長期的・強靱・大規模）的な計画だと言えるが、同時に単体の建築が畜産という都市機能の一部をオランダ全土から完全に吸い上げる「半都市建築」でもあるのだ。4つのプロトコルと3つの「半〇〇建築」を掛け合わせるこのアプローチをプロトコロジーと定義する。





.....

>背景と位置づけ

<プログラム論の登場>

シカゴ派の代表的建築家ルイス・サリヴァンはかつて「形態は機能に従う (Form Follows Function) (★6)」と述べ機能主義の建築を先導した。専制的な社会状況に阿る建築に異議を唱え民主化を果たしたはずの機能主義は、1972年のブルーイット・アイゴー団地 (設計: ミノルヤマサキ) の爆破 (■6) をもって、一方的に終焉を宣言されることになる (★7)。そこから先は、機能とは無関係な形態が踊るポストモダンの時代であり、ロバート・ヴェンチューリに倣えば「Less is Bore (少ないほど退屈)」の時代 (★8) であった。しかし90年代になると、ポストモダン建築の表層的なデザイン操作から軌道修正した上で、バーナード・チュミ (★9) やレム・コールハース (★10) らがプログラム論を展開した。彼らが繰り返し強調したのは、機能と形態は無関係であるという点で、それはすなわち機能主義批判



■6

ブルーイットアイゴー団地の爆破

Wikipedia より



であった。加速度的に進む都市化の副産物として、固定的だったファンクションは流動的なプログラムへと変成し、形態と機能の蜜月は過去のものとなったのだと言う。チュミは『建築と断絶（1994）』（■7）で「形態と機能の断絶こそが現実的な建築や都市のありようである」とさえ述べている。そして彼は「ピラミッド（観念上の形態）」と「迷宮（蝕知される現実の空間）」というふたつの概念を掲出し、それらが機能と形態のミスマッチを生み出す根源的な相違だと捉えた。チュミは、『建築と断絶』に先立つ1983年には、パリのラヴィレット公園（■8）に、グリッド上に散在する真っ赤なフォリーをスーパーインポーズする提案で



国際設計競技に勝利した。謂わば、観念（ピラミッド）を実現したのである。しかしこの建築の評価は燦々たるものであった。たとえば、『建築の断絶』の訳者である山形浩生（★11）は、歯に衣着せぬ物言いで以下のように記している。「実際の空間に移し変える段階で、チュミは観念屋ならではの倒錯ぶりを披露する。（中略）「形態と機能は無関係」という議論も、結局は機能を真剣に考えない口実となって、奇矯な形態の乱雑な配置を正当化しているだけではないのか。」。現実社会の諸問題から距離を取るだけで

## ■7

『建築と断絶』



## ■8

ラヴィレット公園計画案

<http://tschumi.com> より



は、「迷宮」の豊かさは遠ざかるばかりだ。

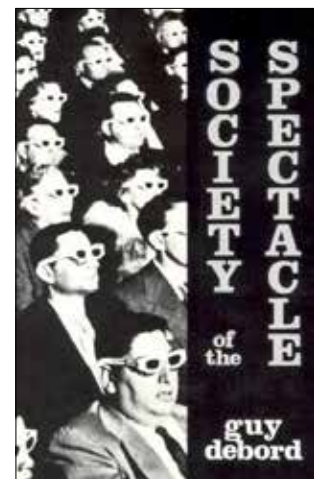
＜シチュアシオニストの再解釈＞

チュミは自他共にシチュアシオニスト（★12）の影響を認める建築家である。シチュアシオニスト達は、その名の通り「状況の構築」にこだわり、転用（デトゥルヌマン *détournement*）や漂流（デリーヴ *dérive*）など具体的な手法で都市の再解釈・再構築を試みており、ポストモダンの思想家達が実践の意義を認めないのとは一線を画していた。たしかにその言説はチュミの一面を代弁しているように映る。シチュアシオニストの思想家・活動家・映像作家であったギー・ドゥボールが著した「スペクタクルの社会（1967年）」（■9）はマスメディアの発達と共に単なる鑑賞者に墮した人間を鼓舞する内容で、5月革命を予言したと言われる。ドゥボールの目指した主体性の回復の意義は今も錆び付いておらず、むしろインターネットが社会的基盤として実装された現代においてこそ再考されるべき課題だと言えるだろう。そしてそれは、プロトコロジーの目指す地平にも連なる。私の言う「プロトコル」はシチュアシオニストを経由してチュミの言う「ピラミッド」に近く、「ビヘイヴィア」は「迷宮」に近いと読むことも可能だが、しかし、プロトコロジーはプログラム論の単なる焼き直しではない。粘り強く現実社会との接点を探ることを諦めてしまったプログラム論の観念への撤退は、ポストモダニストによる表層の記号論的操作と大きな差がないと私には映る。一方、プロトコル（=最初のページ）のあとに続くページは社会、あるいは共同体そのものである。プロトコルを社会から分離することは不可能なのである。

★6

■9

『スペクタクルの社会』





ルイス・ヘンリー・サリヴァン (Louis Henry Sullivan, 1856-1924) はシカゴ派の代表的な建築家。1896年に出版された Lippincott's Magazine の "The Tall Office Building Artistically Considered" という記事の中で「form ever follow function」というフレーズが使われた

#### ★7

ブルーイト・アイゴーはアメリカ合衆国ミズーリ州セントルイスにあった住宅団地である。日系人建築家ミノル・ヤマサキの設計で1956年に竣工し、1972年に爆破解体された。アフリカ系アメリカ人パイロットのウェンデル・O・ブルーイト (Wendell O. Pruitt)、元下院議員のウィリアム・L・アイゴー (William L. Igoe) の二人のセントルイス出身者の名前から取られ、当初は黒人用のブルーイト、白人用のアイゴーと分断されたふたつの団地として計画された。建築理論家であり造園家のチャールズ・ジェンクスは『ポスト・モダニズムの建築言語』の冒頭、この団地の爆破を持ってモダニズムの終焉を宣言した

#### ★8

ロバート・ヴェンチュリー (Robert Venturi, 1925-) の著作『建築の多様性と対立性 (1966)』の中で使われた。ミース・ファン・デル・ローエの「less is more」を皮肉ったレトリックであり、Simplicity (単純性) を盲信して結果的に単にSimpleness (単純さ) を獲得したに過ぎない、ミースのフォロワーに批判を向けた

#### ★9

バーナード・チュミ (Bernard Tschumi, 1944-) はスイス生まれの建築家・都市計画家・建築理論家であり、コロンビア大学建築・都市計画・保全大学院校長。実作のほか、『ジョイスの庭 (1972)』『マンハッタン・トランスクリプト (1978)』といったドローイングで知られる。ザハ・ハディドなどと同様アンビルドの建築家と見なされていたが、現在は『アクロポリス美術館 (2009)』ほか、多くの公共建築を手がける

#### ★10

レム・コールハース (Rem Koolhaas, 1944-) はロッテルダム生まれの建築家・都市計画家。「マンハッタニズム」、「ビッグネス」、「ジャンク・スペース」、「ジェネリック・シティ」などのキーワードをあげ、ハーバードの学生と共に『the Guide to Shopping (2002)』を著すなど、急速にグローバル化する資本主義社会の流れに身を任せると態度表明する稀有な建築家である

#### ★11

山形浩生 (Hiroo Yamagata, 1964-) は日本の評論家、翻訳家。野村総合研究所研究員。ポストモダン、ニューアカ、文化左翼的な言説





を徹底的に批判する新世代の書き手。『新教養主義宣言（1999）』を含む多数の著書のほかに、翻訳を多く手がけ、後述するレッシングのものだけでも『CODE-インターネットの合法・違法・プライバシー（1999）』、『コモンズ The Future of Ideas ネット上の所有権強化は技術革新を殺す（2002）』、『フリー・カルチャー Free Culture-いかに巨大メディアが法をつかって創造性や文化をコントロールするか（2004）』、『Code(version2.0)（2007）』、『Remix: ハイブリッド経済で栄える文化と商業のあり方（2010）』などを訳している。自身もプロジェクト杉田玄白を主催するなど、レッシング同様、コピーレフト運動の一翼を担う

## ★12

シチュアシオニスト・インターナショナル(SI)とは前衛芸術家、知識人、政治理論家らによって形成された社会革命的国際組織であり、1957年に結成され1972年の解散した。建築家としてはコンスタントが参画し、ノマディズム、遊戯的生活、迷宮の創出という三つの原理を祝福する『ニューバビロン（1963）』という計画を残している。都市の上空を浮遊する軽量鉄骨による大架橋のデザインは、70年代のアーキグラムやスーパースタジオ、90年代のチュミ、コールハース、MVRDVなどに脈々と影響を与え続けている







.....

>>第二章

<規制力の4側面を用いた実践的研究>

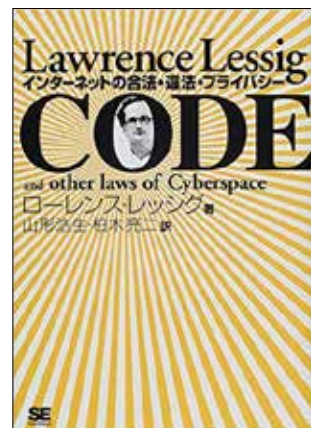
.....

>解説

<レッシグの論点を実空間にフィードバックする>

アメリカの憲法学者ローレンス・レッシグ (★1) は、1999年に『CODE-インターネットの合法・違法・プライバシー』 (■1) を書き、当時主流だった「サイバー空間の自由を維持するためには政府の関与を排除しなければならない」という議論をまっこうから否定して一躍脚光を浴びた。サイバー空間において自由の広狭・内容を規定するのは「コード」であり、どのようなコードを採用するかによって私たちの自由は守られもするし、危険にさらされもする。その避けがたく強力な影響力を制御するためには、むしろ政治や別の規制力が介入しなければならないというのがレッシグの主張だ。ビヘイヴィアを喚起する (=自由を獲得する) ためにこそプロトコルが必要だという本論の仮説は、レッシグの主張の実空間への転写を目論むものである。インターネットが自由を謳歌する空間だと信じられていたのと同様に、我々は、実空間の自由、すなわちビヘイヴィアの自由が奪われているとはなかなか気づくことができない。レッシグはコードのアナロジーとしてアーキテクチャ=建築を用いているが、実空間ではたしかに建築がビヘイヴィアを制限してしまう事態が往々にして起こる。たとえば、東急井の頭線線

■1  
『CODE』





渋谷駅前にはゴツゴツとした石を仕上げにした広場がある（■2）。広場と言ってもこれでは誰も入ることができない。たむろする若者やホームレスを排除するためのランドスケープが都会の真ん中に鎮座する姿は、ひとたび気づいてしまえば実に異様なものである。ほかにもたとえば、ファストフード店の堅い椅子や効き過ぎた空調は、滞在時間の短縮を促すものであり、逆にカジノの屋内にしかけられる明転暗転を繰り返す天空を模した天井（■3）などは時間の感覚を奪

## ■2

東急井の頭線渋谷駅前



## ■3

ヴェネチアン・ホテルの人工天空

<http://venetian.com> より

い滞在時間の延長を促すものである。これらはわかり易い制限だからまだ良いが、多くの場合、規制力は潜在化しており、われわれは気づかないうちに行動の自由を制限されている。ビヘイヴィアを制限されているのだ。

### <規制力の4側面>

ビヘイヴィアの制限を解除し、利用者が自分の意志で空間に関与できるようにするためにプロトコルを利用するというのが本論の主旨である。単に偶発性にまかせたり、別のビヘイヴィアを作動させるのではなく、プロトコル、すなわち社会的な制約に照準を合わせることで、機能と形態の無根拠な癒着をさけることができ、しかも強引な断絶で倒錯と

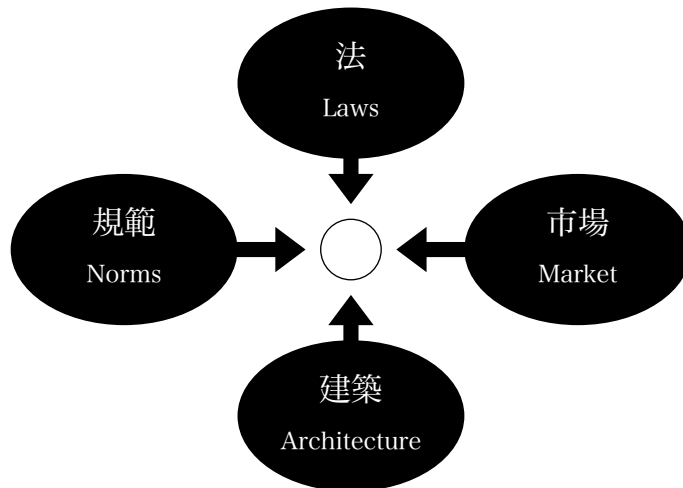




の誹りを受ける必要もなくなるのだ。そしてそのプロトコルとはすなわち規制力のことであり、レッシングに倣えば、法 (Law) 、規範 (Norm) 、市場 (Market) 、アーキテクチャ (Architecture) という4側面 (■4) に分解可能とい

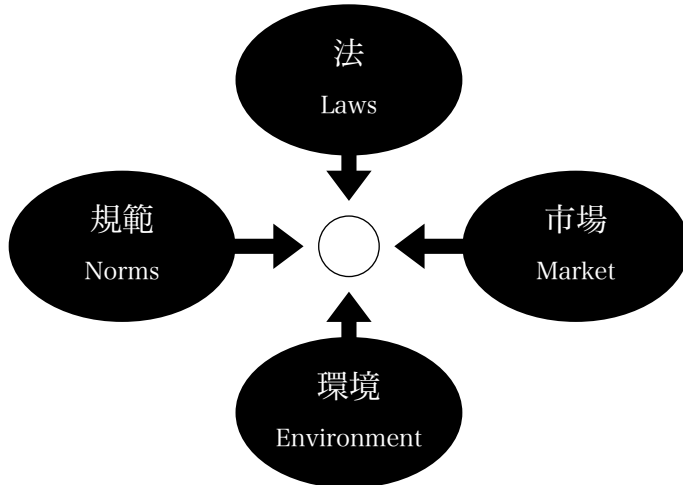
#### ■4

シカゴ学派による規制力の4側面



うことになる。たとえば、シートベルトの着用率を上げるためには、「法」なら罰則を設けるし、「規範」なら教育やキャンペーンで共通認識を育むし、「市場」なら保険料を操作できるし、そして「アーキテクチャ」なら未着用ではエンジンが起動しないなど物理的な規制力を発揮する。我々はこれら4つの1つまたは2つ以上を組み合わせた規制力の磁場の中を生きており、当然ながら我々がつくる建築もまた同様の制限を受ける。建築は建築基準法ほか法律の制限を受け、地域の慣習など多くの規範に関わり、予算の制限に翻弄され、重力をはじめとする物理的な制限を抜け出すことはできない。建築の受ける制限が「アーキテクチャ」というのはトートロジーのようで紛らわしいので、私はこれを「環境 (Environment)」と呼び替えて使用している。つまり建築のプロトコルの構成要素は「法」、「規範」、「市場」、「環境」である (■5)。これらの要素それぞれをパラメーターとし、まるでイコライザーのツマミを上下するよ





うに重要度を評価してつくるのが建築である。なかでも特にプロトコル的な建築は、どの規制力に依拠するか意識的に選択し、その影響をほかの規制力よりも圧倒的に卓越させることでできた建築のことである。

以下のチャプターでは、筆者の実践的研究の成果としてまとめる作品群を中心に、プロトコロジーの射程について理論的補強を行う。

### ★1

ローレンス・レッシング (Lawrence Lessig, 1961-) はアメリカの法学者で専門は憲法学及びサイバー法学。ハーバード大学法学部教授。

「クリエイティブ・コモンズ」を設立するなどフリーカルチャーの立役者であると同時に、「Change Congress」では政治腐敗を追求する。2015年には民主党6人目の候補として大統領選に出馬表明。クラウドファンディングで資金を募り100万ドルを集めたが、その後撤退した。

.....

> 「法」を卓越させた実践的研究

<法が生み出す建築>



2006年に上梓した拙著『超合法建築図鑑』（■6）は建築関連の法規が建物のデザインや風景に与える影響を観察し、特にその影響が顕著な事例を収集して一冊の書籍にまとめたものである。設計時にクリティカルに作用したであろう法規制をすでに建っている建物から逆さに類推して、写真を撮影し、トレースして線画にしたうえで、支配的に顕れた法規の特徴を書き込んである（■7）。ここで取り上げられた



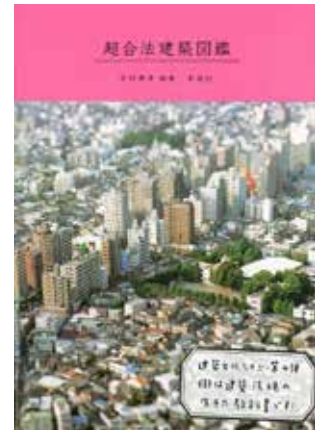
77の建物は特に「法」を卓越させることによって生まれた「法プロトコル建築」と言えるだろう。一方で、採取された建物は東京またはその近郊で採集されたという事実がある。東京に特に「法プロトコル建築」が顕著なのは、土地の値段という市場プロトコルによるところが大きい。土地の値段が高い場所では建物の床面積を可能な限り最大化するという内側からの圧力がかかり、それを外側から押さえ込む法の制限、高さ制限や面積の制限がきれいに浮かび上がるのだ。このようにプロトコルは組み合わせで作動することも多い。

<旗竿敷地に建つcommonsとしての屋上菜園>

法をプロトコルとした建築の実践例としては、『サイエンナ

■6

『超合法建築図鑑』吉村靖孝著



■7

雪崩ビル

超合法建築図鑑より

■8

『明日のメトロポリス』ヒュー・フェリス

拙著『ビヘイヴィアとプロトコル』より





ガヤ』がある。2016年に東京都内で竣工した集合住宅である。旗竿敷地の奥に建つため、東京都安全条例の規制で共用部のある集合住宅、すなわち共同住宅は建てるできない。そこで、敷地内通路に対して各戸が直接出入口を持つ長屋形式を採用することにした。コスト的に木造以外の選択肢はなく、上下に重なる重層長屋にするとスラブを伝わる音の影響が懸念されるため、縦割りの長屋とした。するとその副産物として各戸から屋上へのアクセスができる。そこで面積に算定されない屋上を利用して共用部をつくることにした。また斜線制限や出入口の確保を勘案すると南向きの階段状の屋上ができるため、これを段々畑に見立て、土を入れて菜園を提供することにした（■8）。つまり、法の制約に



#### ■8

サイエンナガヤ（吉村靖孝）の屋上

従順につくられた形状を見て、後から用途が導かれたことになる。ここでの設計は、言うなれば「Function Follows Form」であった。さらに言うならば、ここでは、形状そのものも住人が自らの手で変更できる。菜園は風景のDIYを可能にする手立てでもあるのだ。

<著作権を開いて参加を促す>

また、法が建築に及ぼす影響は、いつも建築基準法経由とは





限らない。たとえば、著作権法もまた創作の端緒になり得るのではないかと考え、2013年に青山のオリエギャラリーでCCハウス展（個展）を開催した（■9）。建築の



■9

CCハウス

ランドスケーププロダクツによる改装案

著作権は1900年の著作権法施行時に「本法ハ建築物ニ適用セズ」という条文で保護対象から除外されていた。その後1907年の改正時には保護対象になるのだが、しかし建築は著作権で保護しにくいという認識は現在まで通底している。たとえば、ノグチ・ルーム事件と言われる判例がある。1950年に谷口吉郎（★2）とイサム・ノグチ（★3）の協働で竣工した慶應義塾大学の萬來舎（■10）の



■10

慶應義塾大学萬來舎

<http://arc-c.keio.ac.jp> より

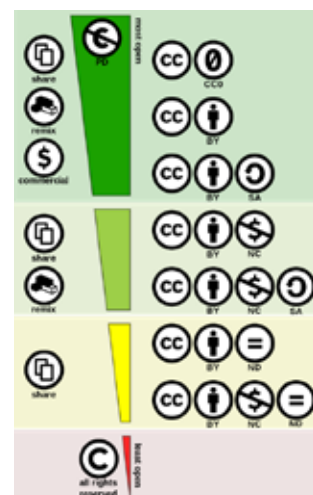


解体移築計画が具体化した2003年、「保存を要望する会」やイサム・ノグチ財団を中心に反対運動が起き、東京地裁に工事中止の仮処分を申請する事態にまで発展した。ここでは「著作者人格権」で保護される「同一性保持権」の侵害が建築物に対しても適用可能であるかが争点となったが、しかし結局は、申請自体の却下という結末をみる。日本の著作権法では「著作者人格権」は死後にこの権利を譲渡できないと規定されていること、また「建築物」には実用性が求められ、一定の範囲で著作権を制限し「増改築」を認めるという例外規定の存在などを総合的に判断し、「移築によって作品の同一性は失われる」という原告側の主張に一定の理解を示したものの、イサム・ノグチ財団が「著作者人格権」を有するとは認められないとの判断が下ったのである。このように、建築の著作権は極めて弱い保護状況にある。しかしこの弱さこそが建築意匠の多様性と継続性を育む重要な条件であったように、私には見える。ところで、先のローレンス・レッシングは、著作権についても積極的に発言しており、自身もクリエイティブ・コモンズ運動を主導している。クリエイティブ・コモンズは、著作者の権利保護が行き過ぎると次代のクリエイティビティの障害になると警鐘をならし、著作権の放棄（パブリックドメイン）と保護のあいだに本来あり得たグラデュエショナルな権利運用（■11）を可能にするライセンスの整備を行う団体である。彼らの考えるコモンズ（★4）的な弱い著作権運用の姿は、実は建築の著作権運用に重なるところがあるのではないだろうか。そう考えた私は、CCハウス展でその仮説を展開したのである。展示では小さな住宅を設計し、実施図まで製作して、改変可能と明記した上ですべての図面を公開した。誰でも設計に参加可能になることでこの家はいずれ常軌を逸した斬新な家に化けるかもしれないし、あるいは逆に民家のような思慮

## ■ 11

グラデュエショナルな権利に対応

<http://creativecommons.org> より





深さを手に入れるかもしれない。1000年かけて徐々に形成されるような質を、1000人の共同作業でわずかな期間に獲得できるかもしれない。いずれの方向に進むにしても、それが法プロトコルの操作によって可能になる建築の姿である。

## ★2

谷口吉郎 (Yoshiro Taniguchi 1904-) は日本の建築家。東京工業大学教授。日本芸術院会員、博物館明治村館長をつとめた。代表作に、慶應義塾幼稚舎 (1937)、秩父セメント第2工場 (1956)、東京国立近代美術館 (1969) など。ホテルオークラ東京 (1962) が解体される際には国内外で保存運動が起きた

## ★3

イサム・ノグチ (Isamu Noguchi、日本名：野口 勇、1904- 1988) はロサンゼルス生まれの日系アメリカ人。彫刻家、画家、造園家、インテリア・デザイナー。父は慶應義塾大学教授の野口米次郎。ブランクーションや北大路魯山人に師事。晩年はサイトスペシフィックな作品に傾倒。1988年に札幌市のモエレ沼公園の計画に着手するが同年他界。同公園は16年後に竣工した。イサム・ノグチと新萬來舎については下記サイトに詳しい

<http://www.art-c.keio.ac.jp/old-website/archive/noguchi/about/3.html>

## ★4

ローレンス・レッシングは『CODE』の3年後『コモンズ』を書いた。行き過ぎた著作権保護を改め、物理層、コード層、コンテンツ層、三つの層でそれぞれ共有地 (=コモンズ) をつくって、新しい創造を作るための余裕 (=リダンダンシィ) を維持しなければならないと言う。そして『コモンズ』をつくるためには「法」を再構成しなければならないという主張は『CODE』から一貫している

.....

> 「規範」を卓越させた実践的研究

<海への眺望を重視する規範を遵守>

東日本大震災からまだ日も浅い頃、海と陸の際に残された間



口8m奥行き3m、わずか24平米の土地に週末住居を建てたいというクライアントが現れ驚いた。あまりにも海岸線に近く、高波や津波の影響を避けるため一階はピロティにする必要がある。土地が狭いため住空間を相応に確保すれば自ずと3階建てのそそり立つ壁のような建物となり、道を挟んで陸側に建つ隣家からの海への眺望を遮ってしまう。湘南の沿岸地域では、海への眺望が尊重されており、これを軽視するわけにはいかない。日本の眺望権というのは弱い権利であり、特に法的な拘束力はないにもかかわらず、この場所ではその重要さが十分に共有され、土地の値段にも影響を与える程なのだ。湘南エリアにおける海への眺望は、典型的な「規範プロトコル」であると言えるだろう。この規範の影響を考慮した結果、海側だけでなく山側にも大きな窓を開ける『窓の家（2013年）』（■12）が誕生した。2枚の



## ■12

窓の家（吉村靖孝）

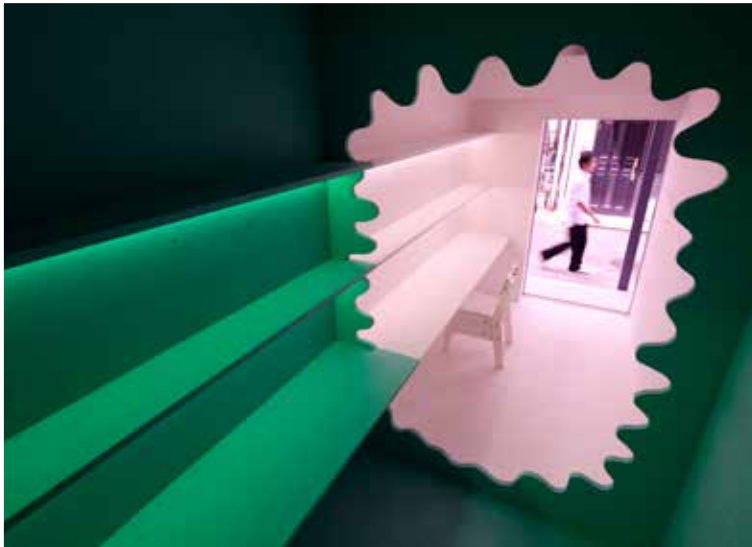
ガラス越しではあるが、限られた利用時以外はロールスクリーンを開け放てば、向かいの家からの海への眺望を維持できる。また同時に、小さな家の中で、右を向けば海の家、左を向けば山の家というようなダイナミックな眺望の展開が起こる家になった。





<場所の記憶を喚起する>

眺望の尊重は誰にも共有しやすい規範であるが、別のプロジェクトでは、規範の在処が見えにくいケースに直面した。より正確に言うならば、規範に抗う必要を感じたのだ。横浜の黄金町は、黒澤明の映画『天国と地獄』の舞台にもなった戦後の青線エリアで大岡川スラムと呼ばれたバラックや風俗店が建ち並び、麻葉密売の温床となるなど非合法的な営みが継続していたと言われる。しかし2000年代になって、「バイバイ作戦」と呼ばれた集中摘発があり、同時にマンション開発がはじまって街の記憶を容赦なく消し去りはじめた。一方でBankArt桜荘、黄金町バザールなどアートを活用したまちづくり(★5)があり、その一環として依頼されたインスタレーションが『レッドライト・ヨコハマ(2011年)』(■13)であった。強引なマンション



■13

レッドライト・横浜 (吉村靖孝)

開発の影でこっそりこの街の記憶が生き延びる方法はないものかと考え、補色残像効果を利用した記憶のフラッシュバックという案を思いついた。白い部屋の奥に緑の部屋を設け、緑の部屋に30秒ほど留まると、振り返った白い部屋は妖しいピンクのネオンサインを灯したように赤く染まるのである。この街の規範は、暗い記憶を消し去る方向に傾いてい



たかもしれないが、忘却を迫るような建築をつくってはならないと思った。知る権利をどうやって守るかが課題であった。

#### <設計行為の民主化>

規範はさまざまなところに潜在している。たとえば、住宅の買い方にもある種の規範がある。大きな住宅メーカーで買えば安心といった共通認識は典型的な規範であろう。建築家に依頼して住宅を建てようというのは、そういった規範を破る、主体的な行動だと捉えることができるだろう。しかしその一方で、それが本当の意味で自由を手に入れる行為なのか、それとも単に別の規範に取り込んでいるだけなのか、ふと疑問に思えることもある。建築家に頼めば独創的な家に住めるという規範は、住人に規範を脱したという自覚を植え付けるだけに、たちが悪いとさえ言えるのではないか。本当の意味で自由になるなら、自分の家は自分で設計することだ。『ホール・アース・カタログ』(★6)のようなサヴァイバルツールを携えて、自分でつくってしまえばいいのだ。もしそういった自由に建築家が関与する部分があるとすればそれは、家として最低限成立し得る殻の提供ではないか。インテリアなどは、それこそ現代版ホールアースカタログ：インターネットで何でも買ってしまうのだから。そう考えて、エンドユーザーの設計支援アプリ『ハウスメイカー』(★7、■14)を開発した。iPadの画面上で、家のサイズや床の高さや形状、窓の位置やサイズ、外壁の色や種類を選ぶことができ、簡易な構造計算と積算を行う。指先で自分の家を設計し、注文する。そんなアプリである。平面方向に910mm、断面方向に1200mmの、鳥かごのような小さなグリッドで全体を構成し、フレームだけの未完製品を買ってもパネルや窓を自作しやすいようにデザインした。





## ■ 14

ハウスメイカー（吉村靖孝）の操作画面

ユーザーが関与できる領域を増やしながらも、専門性を高めすぎたり、入力と出力の間をブラックボックス化したりしないよう細心の注意を払った。

### ★5

2008年に開催された横浜トリエンナーレをきっかけに、荒廃していた街をアートで再生するという目標をかかげたNPO団体「黄金町エリアマネジメントセンター」が発足した。「黄金町バザール」は、同団体が主催するイベントである。使いにくい場所を使いこなす人種＝アーティストが、ここでもまちづくりの起点となった

### ★6

アメリカの作家であり編集者のステュアート・ブランドが1968年に創刊した雑誌で、ヒッピー達が目指した「意識の拡大」や「新しいコミュニン」を支えるツールが一覧になっている。ブランドは1966年にNASAに対して地球の写真の公開請求をしており、『ホール・アース・カタログ』の表紙は漆黒の宇宙に浮かぶ青い地球となった。近年は故スティーブ・ジョブスが「Stay Hungry, Stay Foolish」というフレーズを引用して再び有名になった

<http://www.wholeearth.com/index.php>

### ★7

『ハウスメイカー』は吉村靖孝が、ドミニク・チェン、松山真也とともに開発した設計支援アプリ。無印良品の家を展開するNCN株式会社が主催した「Make House展（2014）」で発表された



.....

> 「市場」を卓越させた実践的研究

<海外でつくり大幅なコストダウンを実現する>

日本は、すでにたくさんの建材をアジアから輸入している。しかし、せっかく安い建材を採用しても肝心の人件費が高く、工事価格にはなかなか現れないのが現状である。そこで建築そのものを海外生産し、日本に運ぶことを考えた。輸送には海運コンテナの規格を流用する。1970年のISOコンテナ規格の標準化以降コンテナに対する投資が本格化して、コンテナ船とコンテナ港が巨大化し、それが海上輸送コストの激減につながり、コンテナの規格に則っている限りは輸送コストが価格を左右する大きなファクターにならなくなったからである(★8)。試行錯誤の末、完成したのが全31室のコテージ型ホテル『ベイサイドマリーナホテル(2009)』(■15)である。海運コンテナそのものでは



■15

ベイサイドマリーナ・ホテル(吉村靖孝)

なく、サイズとコーナーのロック機構のみ流用して、タイの建材を使ってタイで製造し日本の工事は最小限で済むようにした。その結果、価格は日本の1/2から1/3程度に抑制





でき、さらには、将来予定されている土地の転売時には、別の場所へとキャラバンを組んで移動し、ふたたび開業することも可能になった。謂わば「市場プロトコル」をオーバードライブさせた建築である。現在の日本では、住宅メーカーであろうと、建築家による一品生産であろうと、ローンを組んで金融機関に利益をスライドさせるのが一般的で、ひとたびローンを組んでしまえば、人生の変動を最小化するよう圧力がかかる。たとえば、会社をやめることはできず、子供は何人までと制限され、子供が家を出た後には家は空き部屋が残る。価格の選択肢を増やすことは、購入者の自由に直結するのである。

#### <既製品を組み合わせてつくる建築>

コストを下げるためのセオリーのひとつに「転用」がある。そして、主体的であるための武器として、シチュアシオニストの手法でもあった。コンテナ以外では農業用サッシを転用した『中川政七商店旧社屋増築棟（2013）』（■16）や、テント倉庫を転用した『フクマスベース



#### ■16

中川政七商店旧社屋増築棟（吉村靖孝）

（2016）』（■17）の実績がある。テント倉庫は、メンブレインを二重化すれば冷蔵倉庫が作れるほどの性能があり





## ■ 17

フクマススペース (吉村靖孝)

ながら、坪単価で15万円程度と、高騰する当時の日本の工事単価からすれば奇跡のような価格を維持している。福増幼稚園に併設される子育て支援施設『フクマススペース』では、このテント倉庫で、雨の日にも子供達が走り回ることができる場所を確保したうえで、木造でインテリアをつくった。木造の壁は縦横に蛇行する一筆書きのリボン状になっており、既製テント倉庫の隙間にはさまざまなスペースができる。ずるずるとひとつつながりの空間で、どこまでが何の部屋なのか明快な区別がつかないようにしている。それは、遊具の代わりに、子供達が自分で使い方を考えるような建築が欲しいと言った若き理事長の依頼に応えるものであった。

### <占有時間の再設定>

市場プロトコルは、モノの値段による直接的な制限とは限らない。シートベルト着用率の例で保険料の話挙げたように、経済的な負担の再分配によって発揮される規制力にはさまざまなモードがあろう。たとえばNowhere resortは、住宅を借りる期間の単位を操作して、市場の再編成を試みる。通常2年の賃貸契約とも、一泊単位の宿泊とも異なる、1週間単位のレンタルという単位の設定が、新しい住み方を喚起する。それが二拠点居住への想像力を拡張し、増え



続ける放棄別荘や空き家の問題をソフトランディングさせる  
と期待したのである。Nowhere resortは2006年に小さな  
マンションの一室からはじまり、のちに、『Nowher but  
Hayama (2008)』、『Nowhere but Sajima (2009)』  
(■18) というふたつの住宅へと展開した。単位を操作す



## ■18

Nowhere but Sajima (吉村靖孝)

ることで、それまで手の届かなかった大きくて高い住宅に  
手が届くようになるので、自ずと用途も多様化し、ヨガ教  
室、結婚式、研修旅行などこちらが想定しなかった用途に使  
われるようになった。かつての日本では、大きい住宅は冠婚  
葬祭の舞台であったし、町屋では商売が、農家では農作業が  
行われた。核家族に最適化し多様なアクティビティの包摂が  
できなくなった現代の住宅は、歴史的に見ればむしろ例外的  
とさえ言えるだろう。市場プロトコルの操作がプログラムの  
回復につながった例である。

## ★8

今や全世界的なインフラとなったコンテナの栄光の軌跡を解き明かす  
書物としては『コンテナ物語—世界を変えたのは「箱」の発明だった  
(英: The Box)』が有名である。2013年にビル・ゲイツが推薦  
する7冊に選ばれた



.....

> 「環境」を卓越させた実践的研究

<インフラのない場所で生き残るための建築>

建築に作用する環境プロトコルの代表選手は、重力である。地球上にあるかぎり、重力はまさに何人たりとも逃れることのできない最強のアーキテクチャである。当然ながら「構造」は建築の主要な関心事でありつづけた。一例に、CIAMの重要人物であったジークフリード・ギーディオンの『空間・時間・建築』（★9）は、近代建築の理論書だが、主に構造や構法を語っており、そして、ギーディオンを乗り越えるべき対象とみなしたバーナムは『環境としての建築』（★10）で、建築の課題は構造から環境（設備）にシフトしたと煽った。しかしここでは、構造も設備も建築の物理的な環境に作用する環境プロトコルである。たとえば、設備機器によって調整された環境を維持したまま、インフラとの接続を解除できる建築を構想した『EDV01（2011）』（■19）は、環境プロトコルの成立条件をずらして、エネルギー的に自立した小さな生態系を目指すプロジェクトである。被災地に仮設住宅を供給するダイワリー



■ 19

EDV01（吉村靖孝）





スとの協働で、災害救助活動の新拠点としてデザインされた。

〈窓のない環境でサーカディアンリズムをつくる〉

自立的環境をつくるという文脈では、ほかに『TBWA/HAKUHODO (2011)』（■20）というオフィスのイン



■20

TBWA/HAKUHODO (吉村靖孝)

テリアがある。改装の対象となった空間は、かつて『ジュリアナ東京』（★11）という一世を風靡した大箱ディスコであったところで、さらにその前は倉庫であった。倉庫からディスコへの転用は、都心の際の立地のほか、天井の高い空間があり、窓がなく遮音性が良いなど、空間の特徴が上手く引き継がれたりノベーションだと言える。しかし、それをオフィスに転用するとなれば話が違う。オフィスの場合、窓のない空間でも法律上の規制はないが、クリエイティブ系の企業が長時間労働をしていれば、体内時計に深刻な影響をもたらすと考えられる。宇宙飛行士と同様、サーカディアンリズムを維持するためのデザインとして、色温度と照度を制御し24時間サイクルで変化させる照明が生まれた。いずれも、空間のフィジカルな環境そのものを規制力と捉える試み、すなわち「環境プロトコル」に焦点を当てた試みで



あった。

### ★9

ジークフリート・ギーディオン (Sigfried Giedion、1888- 1968) はチェコスロバキア出身の建築史家。ウィーン工科大学で機械工学を学び、その後ミュンヘン大学で美術史家ヴェルフリンに師事。C I A Mでは全10回の書記長を務めた。1938年にハーバード大学で行った講義をまとめたものが『空間・時間・建築』である。続いてまとめた『機械化の文化史』は、機械工学科出身という独自の出自が写し込まれている

### ★10

レイナー・バナム (Reyner Banham、1922- ) はイギリス出身の建築史家。『第一機械時代の理論とデザイン (1960)』をはじめ、ポップアートのさきがけとされる『This is Tomorrow』展 (1956) の企画などでも知られる。ブルータリズムやアーキグラムなど、近代建築の次に現れたムーブメントの語り部

### ★11

バブル景気を象徴するディスコとして知られるが、実際の開業はバブル崩壊後の1991年である。景気衰退の影響で、都心部ではなく都市のフリンジ部分であった湾岸エリアの倉庫に白羽の矢が立った。「お立ち台」や「VIP席」などの構造は今もそのまま残っている







.....

>>第三章

<プロトコロジーの実践事例>

.....

本章では、プロトコロジーの実践例としてエクسコンテナをはじめとする一連の作品群について論じる。筆者は、オランダから帰国後間もない2001年12月に自身の設計事務所を立ち上げ、以来、インテリア、建築、プロトタイプ、マスタープラン等、国の内外、規模や用途を問わず多くのプロジェクトに携わってきた。帰国直後2001年9月に参加した「30x100マテリアル」展(★1)ではすでに海運コンテナを素材にしてつくる建築を提案しており、後にそれを「エクスコンテナ」と呼んで世界各地の事例を収集し書籍にまとめた(★2)。コンテナ建築は以後現在まで設計活動の中心的なモチーフになっている。また帰国当初の日本の街並みへの違和感から生まれたのが『デ・コード』と呼んだりサーチ・プロジェクト(★3)であり、2006年にはその成果を『超合法建築図鑑』にまとめた。また『デ・コード』について調べる過程でレッシングの『CODE』を知り、それがその後の活動全般に骨格を与える出会いになった。つまり、18年前には現在の活動の基盤となる諸実践的研究の萌芽があり、以降、さまざまなベクトルで持続・発展的に取り組んで来たと言える。第二章ではプロトコルの4側面に従い整理したが、ここではより具体的に各作品の詳細を解説しつつ、3つの領域、「半動産建築」、「半都市建築」、「半情報建築」でまとめ論じる。





★1

30代建築家30人会議につづき、30代建築家54組による展覧会が企画された。実行委員に曾我部昌史（みかんどみ）や手塚貴晴（手塚建築研究所）など。（なお、このとき吉村は29歳であった。）

★2

『エクスコンテナ』（2008年）は世界各国からコンテナを使用した建築の事例を収集した書籍。グラフィック社から刊行された

★3

建築家故・小嶋一浩氏が東京理科大に研究室を構えていた時代に非常勤講師を務め、同時に卒論指導を依頼された。その際にテーマとしたのが、2003年度の

『デ・コード』—法規を用いた都市と建築の解析—（執筆者：磯田和明、福田久典、南俊充、坂本奈緒子）と、2004年度の『デ・コード／エン・コード』—法規によって可能なデザインの整理・分析—（執筆者：齋木崇、松田晃美矢、唐木研介）である。街並みから法規を読み込むためのツールを作成し、『超合法建築図鑑』の下地をつくった



.....

>半動産建築

【フクマスベース／福増幼稚園新館】(2016)

市場 × 半動産建築

(レディメイドによるコスト低減 × 仮設性)

\* W A D A 賞 (2016)

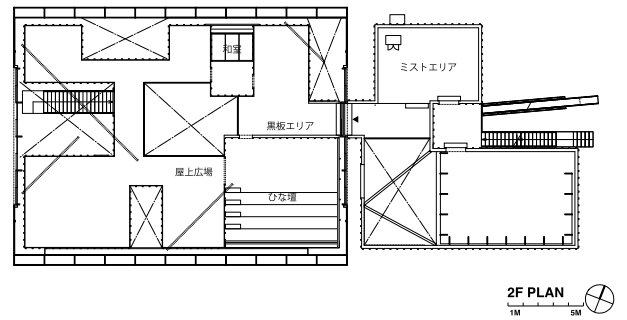
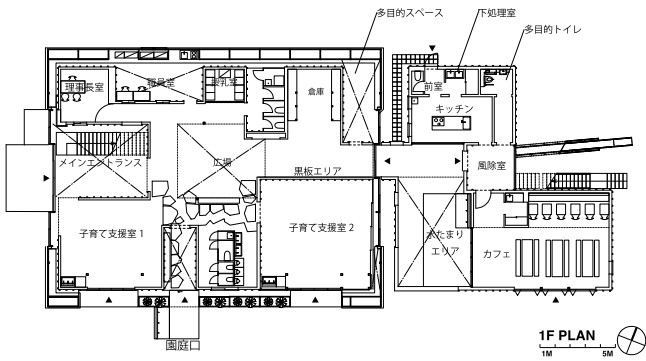
\* 日本建築学会作品選奨 (2018)

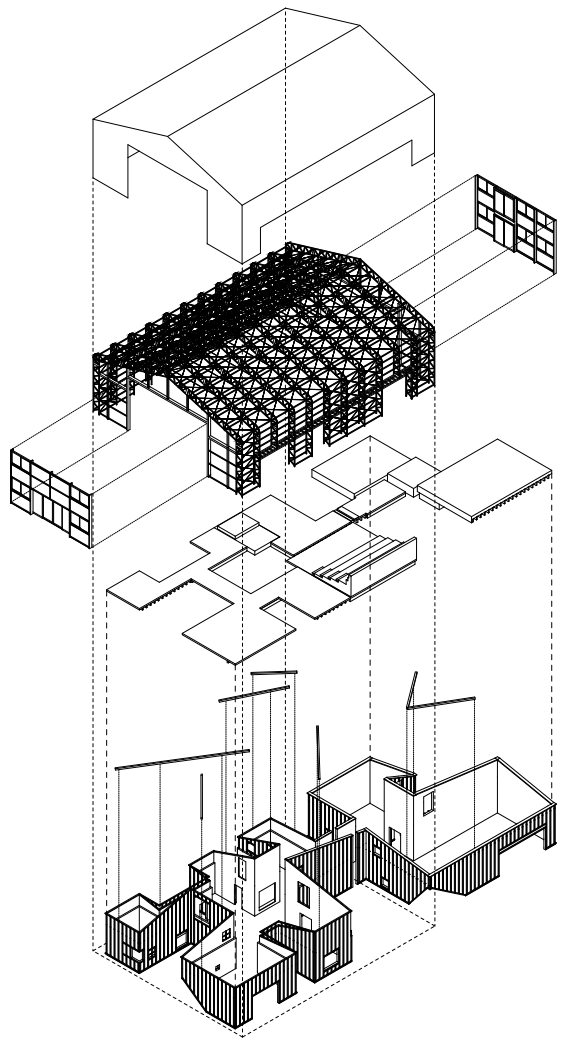
\* 日本建築設計学会大賞 (2018)

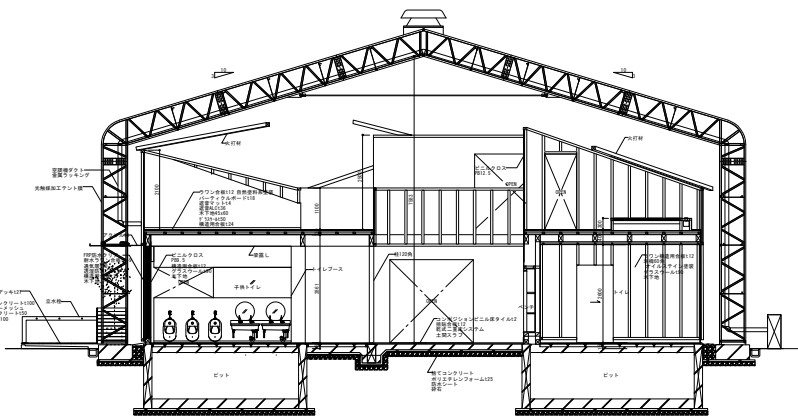
千葉県市原市にある福増幼稚園に附帯する子育て支援施設。敷地にはもともとコルゲートスレート葺きの倉庫が建っており、そのリノベーション・プロジェクトとしてスタートした。「遊具は要らない。子供が自分で使い方を考える施設に」と断言する理事長の言葉に刺激を受け、部屋で区切らず、コーナーが連続するインテリアが誕生した。しかし設計の途中で、実は倉庫の図面が残っていないことが判明し、ほかにも敷地境界に近すぎて防火構造の壁への大規模な改装を要するなど複数の要因から解体を決め、代わりに既製品のテント倉庫を導入することにした。まったくゼロからデザインをやり直さなかったのは、設計過程で起こった事の顛末を目に見えるかたちで定着することが、利用者である子供達の想像力を喚起すると考えたからである。他にもたとえば、二階の壁の上空に斜めにかかる木材を「火打ち」と呼んでいるが、それは薄い壁の変形を抑える構造部材である。壁厚を確保して強度を上げることができないが、それでは思考の過程が視覚化されない。あえて補強部材を露出し、思考過程の定着を試みたのである。斜めの火打ちを高さに変化する壁に固定するには、すべての接点で3次的に異なる角度となってしまうため、自由角度の金属ジョイントを開発し、その後商品化された。



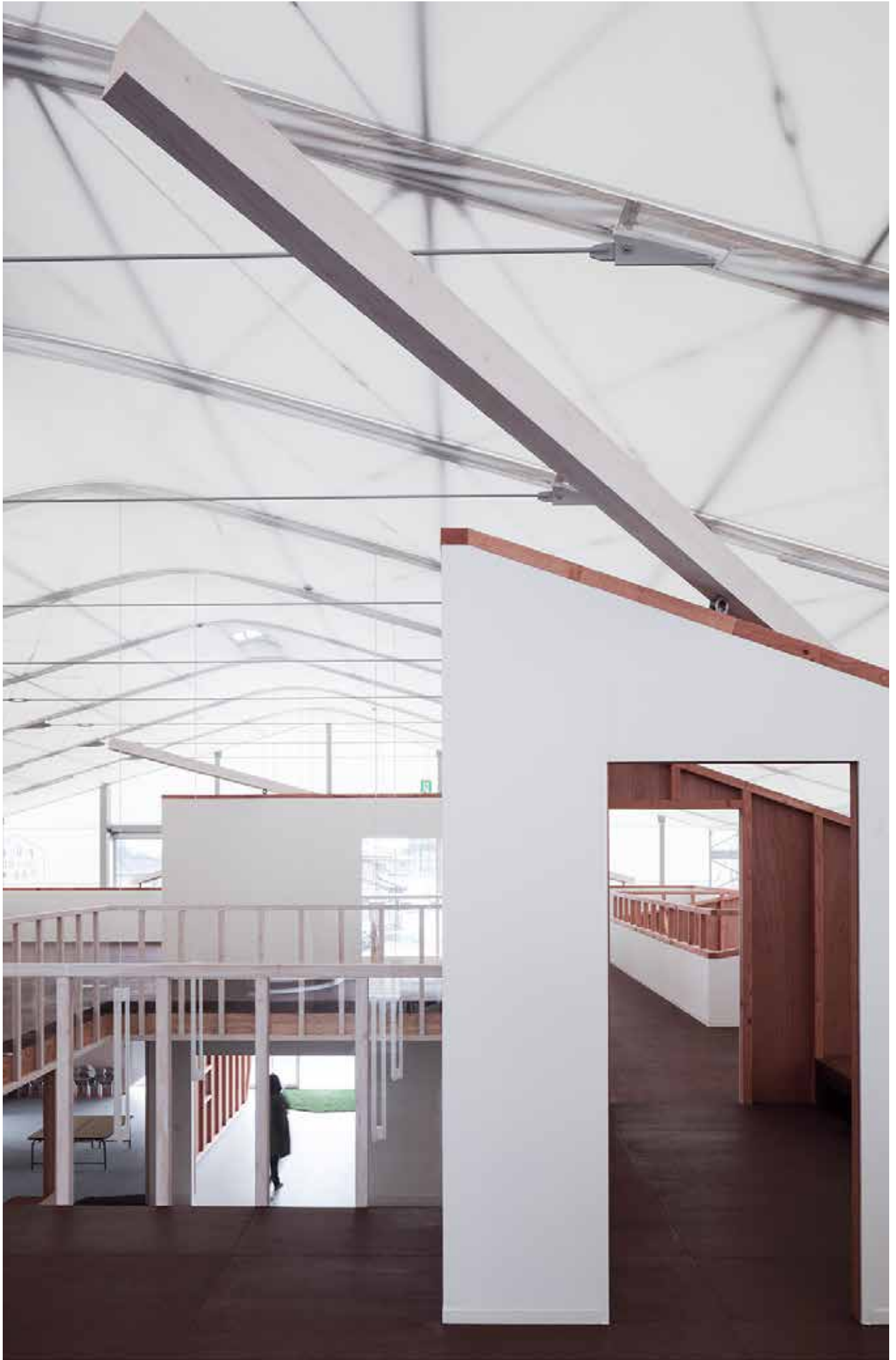














【ベイサイドマリーナ・ホテル】(2009)

市場 × 半動産建築

(海外生産によるコスト低減 × コンテナ)

\* 日本建築士会連合会賞奨励賞 (2011)

\* アジアデザイン賞 (2010)

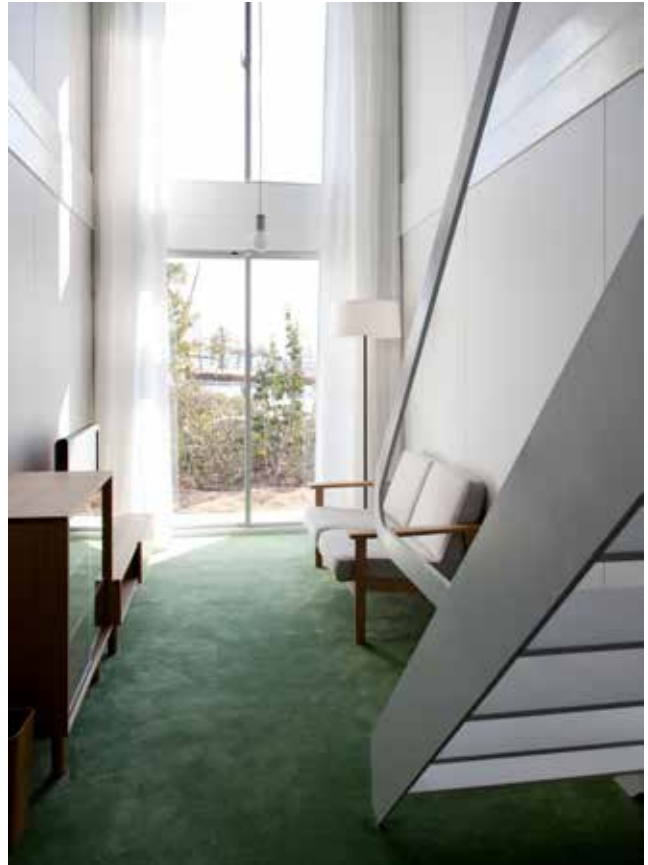
\* J C D デザインアワード銀賞 (2010)

神奈川県金沢区にあるホテル。土地取得の条件として5年間の用途拘束がありホテルは必須となるが、工業地帯の一角で需要が読めないと判断したクライアントに、イニシャル・コストを最小化しつつ、かつ、いつでも撤退できる建築の設計を依頼された。そこで、コンテナ規格を流用し移動に特化した建築を提案した。国交省から何度も通達が出ており、日本国内ではコンテナをそのまま建築に転用することはできないが、サイズとツイストロック機構のみISOコンテナ規格を流用し、それ以外は一般の建築に近い作り方をすることで遵法性を担保している。いわば、メジャーなシステムにハッキングするようにして建築をつくったのである。また海運コンテナの鉄板に拘らないことで居住性の向上にもつながった。そして、製造は国外として工事価格の低減に挑戦した。日本の関連法規は海外での製造を想定しておらず、建材の仕様、工事の資格、検査人員の確保などさまざまな課題に直面し、ひとつひとつ解決した。











## エクステンテナ・プロジェクト EX-CONTAINER PROJECT

### ずっと使える家を被災地に！

常設にできる仮設住宅  
「エクステンテナ」は、工場内外装を仕上げるプレファブ住宅です。ISO 海運コンテナ規格を流用することで、仮設並みの価格でありながら、常設並みの性能を実現しています。「エクステンテナ」なら、一度仮設住宅として安価に建設し、使用したあと、そのままの状態

あたらしい敷地に移動させ、恒久的な住宅へと転用できます。この住宅は被災された方々が段階的に生活を立てなおしていくための重要な基盤となります。



EX-CONTAINER PROJECT BY YASUTAKA YOSHIMURA ARCHITECTS

PAGE 1



## 【エクスコンテナプロジェクト】(2011)

市場 × 半動産建築

(工場生産による職人確保 × コンテナ)

2011年3月11日14時46分、牡鹿半島東南沖を震源とする地震があり、津波や原発事故と輻輳して東日本に甚大な被害をもたらした。法律では20日以内に建設されることになっているはずの仮設住宅がいつこうに完成しないと聞き、コンテナ建築による仮設住宅を提案した。工場で生産するので東北での職人不足に影響されず、仮設だけでなく本設に転用可能で、モジュール化により増設もできる。試作品をつくり東北キャラバンに出向いたが、本格的な採用には至らなかった。ところで、コンテナの主要な規格のひとつである20フィート海運コンテナに内装を施すと、ラ・トゥーレットの修道院（ル・コルビュジエ、1960）の僧坊にほぼ等しいサイズになる。人体の寸法に基準を据えたモデュロールの最小限生活スペース、いわばビヘイヴィアの極北が、世界を駆動する物流のprotocolsであるコンテナに一致するのである。

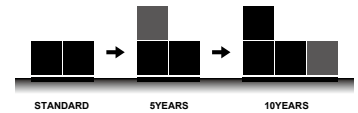
1



2



3









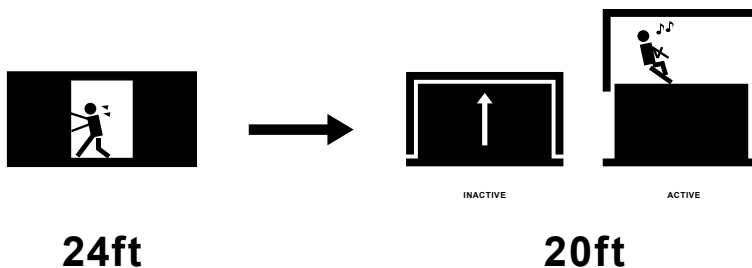
【EDV01】 (2011)

環境 × 半動産建築

(オフグリッド × コンテナ)

\* グッドデザイン賞 (2011)

震災から遡ること二ヶ月、阪神淡路大震災から16年目となる1月17日に、ダイワリースと共同開発した欣求災害救援ユニット『EDV01』を発表した。インフラが寸断された状況下で大人二名が1ヶ月救助活動に従事できるスペックとして、ソーラーパネル、燃料電池、蓄電池、バイオトイレなどを搭載した。現状の民生技術では、それらの設備機器のサイズは大きく、移動に便利な20フィート・コンテナサイズに納めようとすれば、居住のためのスペースがなくなってしまう。そこで移動時はフルに機器を充填した状態で運び、設置後、マッチ箱をスライドするようにして自動で二階建てに変形して二階に居住スペースを確保するデザインとした。アウトリガーを出して水平を検知し、二階建てになるまでは、およそ260秒である。輸送性と居住性の二兎を追う提案。











## 【WHEREEVERGREEN TAIPEI】 (2012)

法 × 半動産建築

(公園 × コンテナ)

「メタボリズムの未来都市展（森美術館）」が台北に巡回した際、そのチケットブースのデザインを依頼された。会場となった中山創意基地はもともと倉庫だった建物を改装して造られた美術館で、ブースが置かれる場所はかつて駐車場だった部分である。そこで、駐車場や空き地など、都市の更新過程で生み出される空地に運び込みインスタントに公園を出現させるコンテナ型公園「WHEREEVER GREEN（どこでも緑）」を提案した。ジャングル・ジム、ハーフパイプ、階段席、並木、キオスクの5ユニットがあり、並木ユニットは合わせ鏡を用いて3本の木が無限拡張されるデザインである。当初は5ユニットをトーテムポールのように縦に積む案であったが、最終的には3段と二つの平置きとし、会場内に分散配置した。









## 【鋸南の合宿所】(2013)

環境 × 半動産建築

(木造 × コンテナ)

千葉県のアサギで、コンテナ規格に準じ、国内での輸送に特化した木造版コンテナ建築を設計した。用途は合宿所で、畳敷きの部屋と、カプセルホテル型で小さな個室のあるものと二種類ある。『ベイサイドマリーナホテル』では、海側の海浜公園に配慮し、仮にひとつのユニットと視線が合っても隣のユニットは別の方向を向いているようにランダムな配置を目指した。一方ここでは長手に窓を開口したうえで、海側に遮るものは何もないため、窓が重ならないよう効率良く扇型の配置となった。製作は工場ではなくすべて現場であり、厳密には工業化しているとはいえ言えないが、同じモノをつづけてつくるため、工場のラインのように作業が進行した。北米の大規模住宅開発 (c.f. レヴィットタウン) などで行われた工事のスタイルを小さく反復するものとなった。









【Nowhere but Sajima】 (2009)

法 × 半動産建築

(民泊 × 短期賃貸)

視線の調整にルーバーを使うのは日本に限らず世界各地で見られる方法である。格子を構成する部材の奥行きや方向、ピッチを調整して、視線を遮ったり、逆に維持したりするのである。ここでは、建物全体を巨大なルーバーのようにつくった。細長い空間の口を強引に海の方に振り向けることで、近隣からの視線を遮りつつ、建物の中のどこにいても海を望むことができるようになった。眺望とプライバシーのバランスを自分の立ち位置で自ら設定できるようになった。

\* 日本建築学会作品選賞 (2011)

\* アジアデザイン賞銀賞 (2010)

\* JCD デザインアワード銀賞 (2010)

\* 神奈川建築コンクール優秀賞 (2010)

\* 住宅建築賞金賞 (2010)





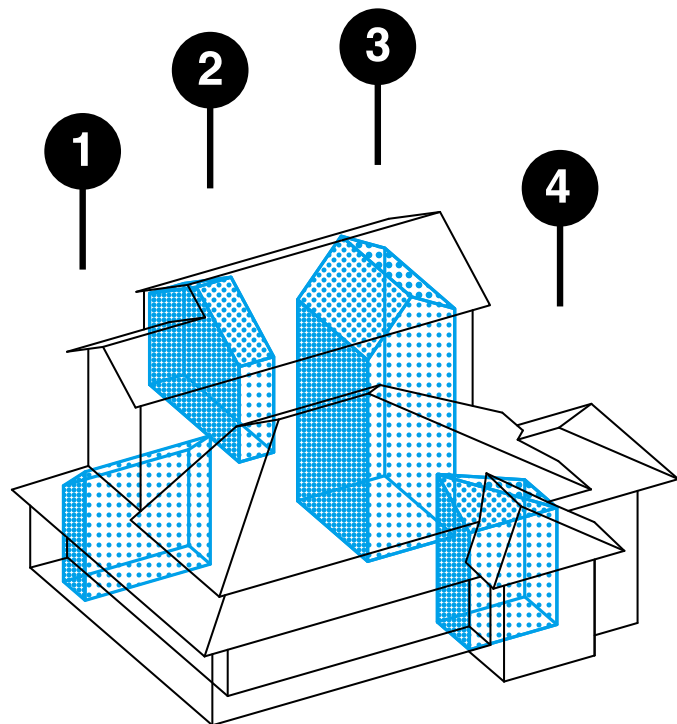




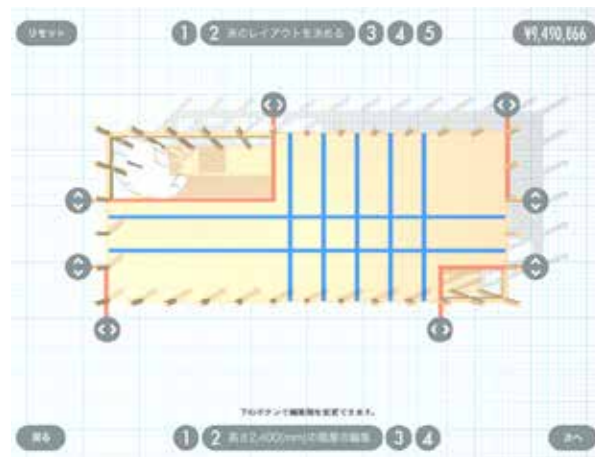
法 × 半動産建築

(空き家 × 短期賃貸)

葉山の御用邸の脇に建つ、かつては侍従が利用したといわれる民家を、民泊施設として再生することになった。平屋を二階建てするなどすでに強引な増築がされているが、二面解放の縁側など、守られていた日本家屋ならではの質はなるべく維持したい。一方で現行法に照らすと壁量が大きく不足している事実も無視できない。そこで、外観は変えず、内側に4つのコアを挿入して強度を増す計画とした。コアは合板を二重貼りし、基礎を新たに打設したうえで梁や土台に緊結している。しかし、意匠的には溶け込ませて完全に一体化させるのではなく、家型を採用するなどあえて独立性を高めた。それがもとの家の意匠を際立たせると考えたからである。



4 inner houses for seismic retrofitting



.....

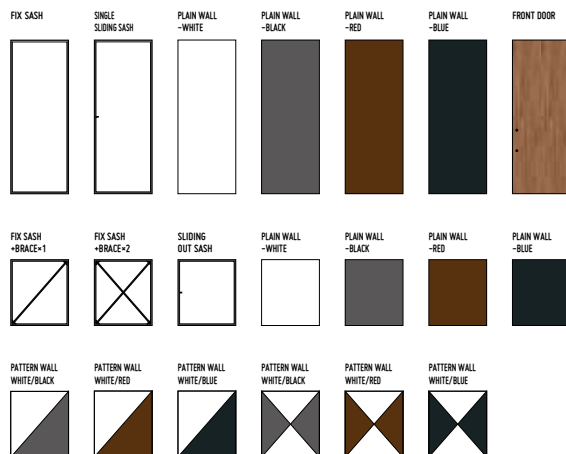
<半情報建築>

【ハウスメイカー】(2014)

規範 × 半情報建築

(住宅購入 × 設計支援アプリ)

D I Y市場の大部分は小さな棚を取り付けたり、壁紙を替えるなどささやかなものであるが、しかしそれでも十分に場所や時間への愛着を育むことができるメソッドである。知覚や理解力を開拓・開発するかたちでの主体性の拡張より、より具体的に建築との主体的な関わりを実感することができると言ってよいだろう。そしてその実感が次なる主体性を呼び寄せる手がかりとなる。もし仮に、より早い段階でこの主体的な関わりを発生させるとしたら、やはり利用者を設計プロセスに巻き込むしかない。そう考えてつくったのが『ハウスメイカー』である。iPadの画面を指先で操作し5ステップの選択項目を入力すると簡易な構造計算をし、それで見積りまで取得できる。この時点の操作を主体的と言えるとは思わないが、次なる主体的なアクションの呼び水としては十分に機能すると思うのである。







【メイク・オルタナティブ展】2016)

規範 × 半情報建築

(平面図 × レイヤリング)

「エウレカ」、「サードパーティ」、「ツバメ・アーキテクト」  
という3組の若手建築家が提案する倉庫改装案の展示デザインを担当した。展示会場となった倉庫は、提案対象の建物でもあったため、3組の提案の平面図を原寸大で床に転写することにした。それぞれ、オレンジ、イエロー、ピンクのテープで再現された平面図が重なり、その上を歩きながら鑑賞する。図面の原寸再現のアイデアは、CCハウス展でも試したものの、今回は、複数の平面図が重なることで瞬時にそれらを切り替えながら鑑賞することが可能になり、三次元化してしまっては得られない独特の効果が得られた。また、受け付けカウンターや模型の展示台は倉庫で利用されるパレットを積んでつくったため、1400平米の展示空間を埋めながらゴミがほとんど出ない展示となった。





撮影：長谷川健太



## 【ミラー・エラー】(2005)

市場 × 半情報建築

(廃棄コンテナ × 立体版間違い探し)

東京デザイナーズウィーク2005年のコンテナ展で「House Styling」という家具の通販雑誌とコラボレーションした。立体版の間違い探しで、通販で扱う家具を陳列し、左右で微妙に異なる部分を見つけ、その掲載ページを雑誌から探し出すと懸賞に応募できる。雑誌への誘導の仕掛けであり、その覆いがコンテナである。コンテナに無数の穴を開け、それが展示を見るためののぞき穴となる。穴を開けることがコンテナの無駄遣いだとの批判もあったがそうではない。他のブースのコンテナはレンタル期間を経て返品される綺麗なコンテナだが、『ミラー・エラー』ではあえて廃棄直前の傷みの激しいコンテナを探してもらっているのだ。穴を開けてもゴミの総量は変わらないのだ。内部の展示品もすべて通販雑誌の商品であるから、展示期間後は再利用され、ゴミが出ない。以後、展示計画のサブテーマとして、ゴミの最小限化が繰り返し課題になった。物理量に直結し、環境問題にもつながる「環境プロトコル」であると同時に、処分費に関わる「市場プロトコル」でもあると言えるだろう。











## 【Re:public 展】(2011)

市場 × 半情報建築

(建材レンタル × 巨大模型)

地元有志の招聘で豊田市美術館の小さなギャラリーで個展を行うことになった。『窓の家』『中川政七商店旧社屋増築等』『Nowhere but Sajima』の1/5の模型を作成したが、展示の大部分は『ベイサイドマリーナ・ホテル』の模型で、この部分は発泡スチロールの原反(0.5 x 1 x 2 m)を2段積みコンテナ客室の1/5の模型に見立てたものだ。展示期間終了後は返却され、道路等の下地材として使われる。これもゴミを出さない工夫であった。またこの原反を高さ1 mの展示台に見立て、その上には豊田市のまちづくりに関する提案書を置いた。中心市街地のトランジットモール化を含む、パブリックスペースの再活性化のアイデア集であり、その後の豊田市との関わりのきっかけとなった。







【レッドライトヨコハマ】(2010)

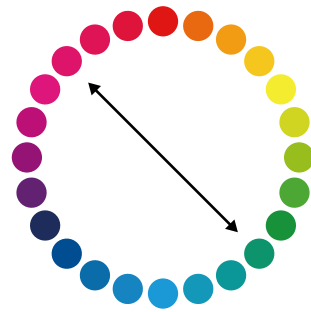
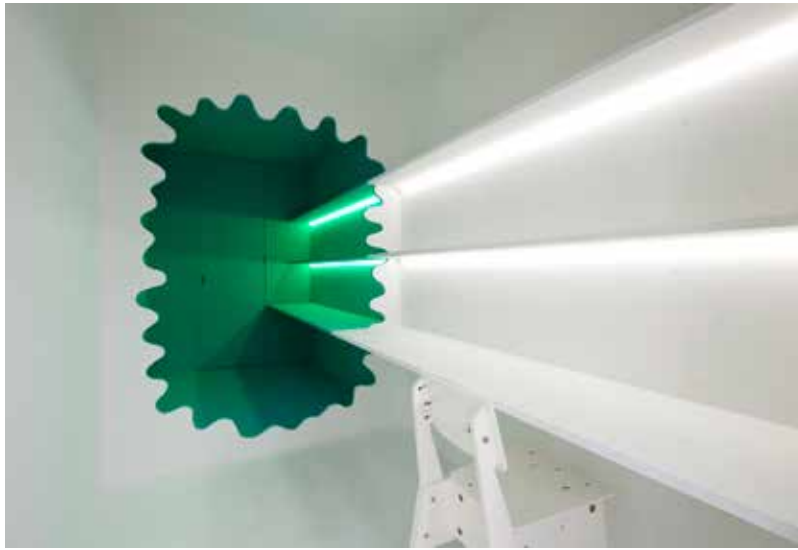
\* J C Dデザインアワード大賞 (2011)

規範 × 半情報建築

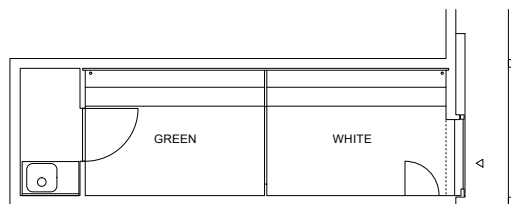
(街の記憶 × 補色残像効果)

補色残像効果とは、ある色をしばらく見つめた後、その色を視界から外すと、その補色（赤であればシアン、緑であればマゼンタ、青であればイエロー）が残像として残る現象を指す。その応用範囲は広く、たとえば手術室や手術着に緑色が採用されるのは、血の赤色の残像を除去できるからである。また、牛乳のパッケージに青色が採用されるのは、白をクリーム色に見せ、濃厚さを演出できるからである。レッドライト・ヨコハマでは、ピンクのネオンサインが輝いていたかつての黄金町の記憶を、来場者の脳内に再現する目的で採用された。

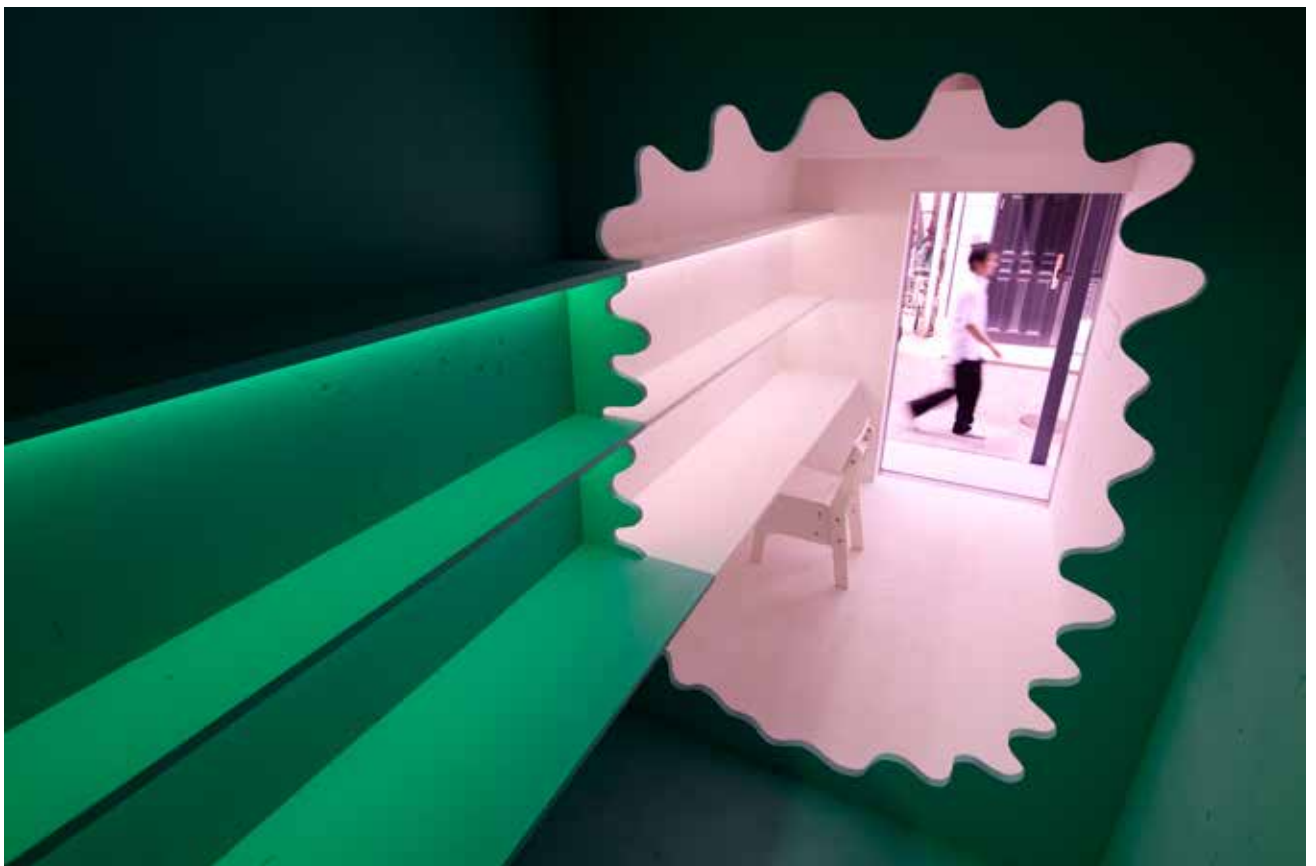
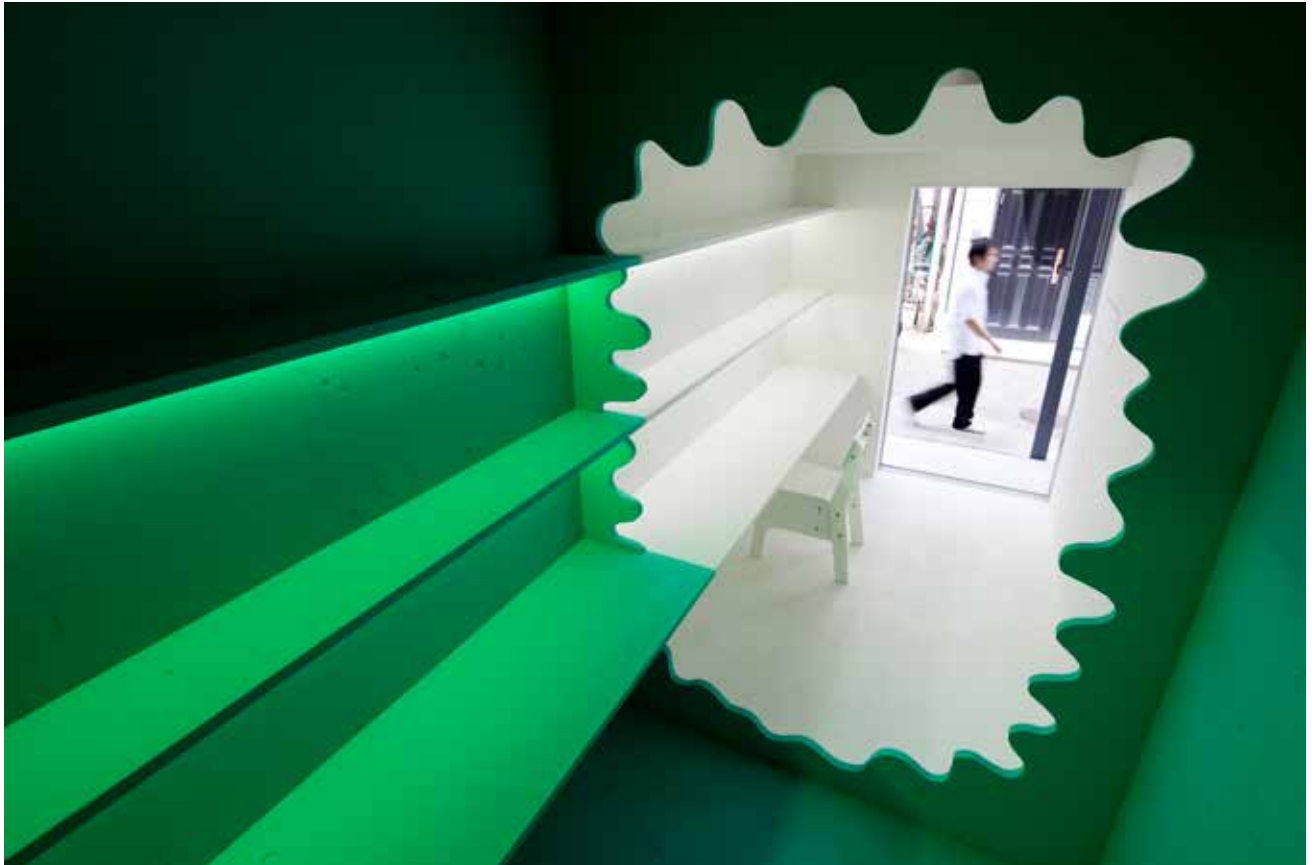




Complementary color



Red-light Yokohama  
Ground floor plan 1/50







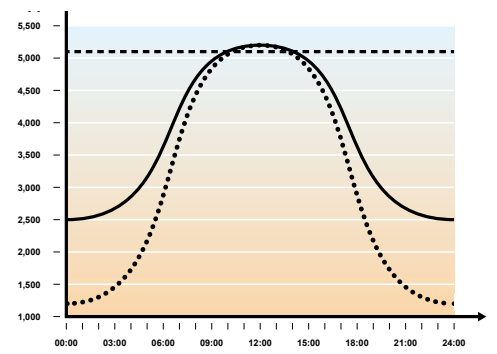
【TBWA/HAKUHODO】

法 × 半情報建築

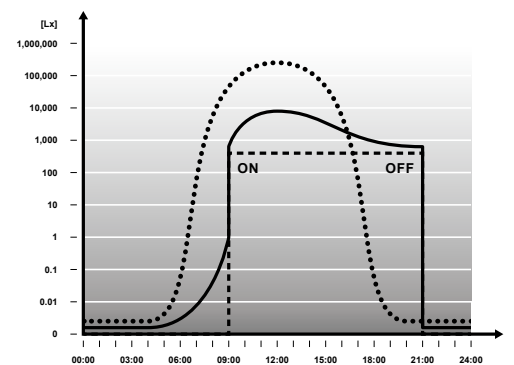
(倉庫リノベ × サーカディアンリズム)

\* 日経ニューオフィス推進賞 (2011)

窓のない元ディスコをオフィスに改装するため、照明の照度と色温度を制御し、外光の変化に合わせて24時間ゆるやかに変化するようにした。ガラスを透過する光に加わるわずかな緑色を除去するため、照明器具内の反射板はわずかにマゼンダ(ピンク)に着色してある。そうやって獲得した微妙な変化がサーカディアンリズム(体内時計)の維持に貢献する。天井が高いため、ベース照明は梁の位置に集約しメンテナンスを簡便にするよう配慮した。



COLOR TEMPERATURE - TIME GRAPH  
色温度の推移 (単位・ケルビン)



ILLUMINANCE - TIME GRAPH  
照度の推移 (単位・ルクス)

..... SUNLIGHT  
..... ARTIFICIAL LIGHTING







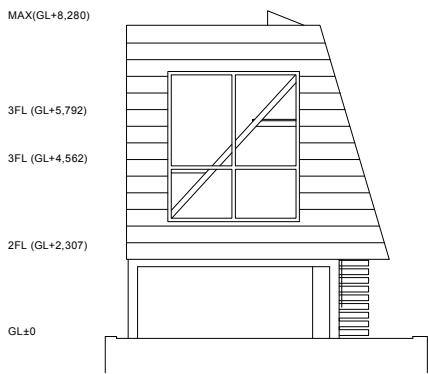
【亀や龍宮殿】(2004)

法 × 半情報建築

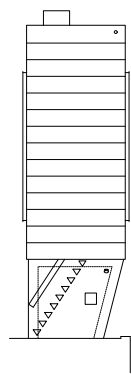
(木造リノベ × 単一建材)

\* J C D デザインアワード新人賞 (2005)

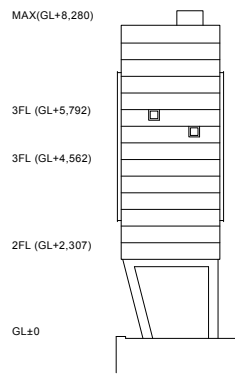
山形県鶴岡市の老舗「亀や」は、バブル期に大型化した温泉旅館である。その後団体客から個人客へとシフトした客層に対応しつつ、給仕の効率を高めるため、離れの古い木造建築をダイニングへと改装することになった。個室ではなく大広間として効率を維持しながらも、深い織り上げ天井で空間のまとまりを感じられるよう配慮した。また、床、壁、天井、椅子、テーブル、盆や箸置きまで、突板から無垢材まで厚みは様々だが、同一のエンジニアリングウッドでつくった。集団で活動するシマウマのように、強い柄を選ぶと、モノの輪郭が消える。浴衣や料理が浮かび上がるような空間になった。



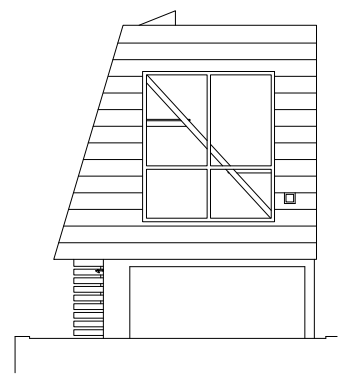
EAST ELEVATION  
SCALE 1/100



NORTH ELEVATION  
SCALE 1/100



SOUTH ELEVATION  
SCALE 1/100



WEST ELEVATION  
SCALE 1/100

.....

< 半都市建築 >

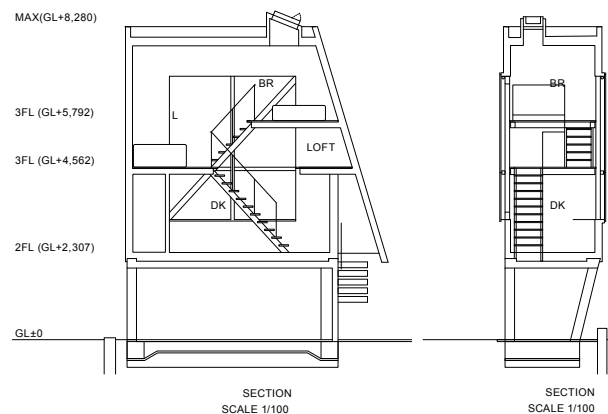
【窓の家】 (2013)

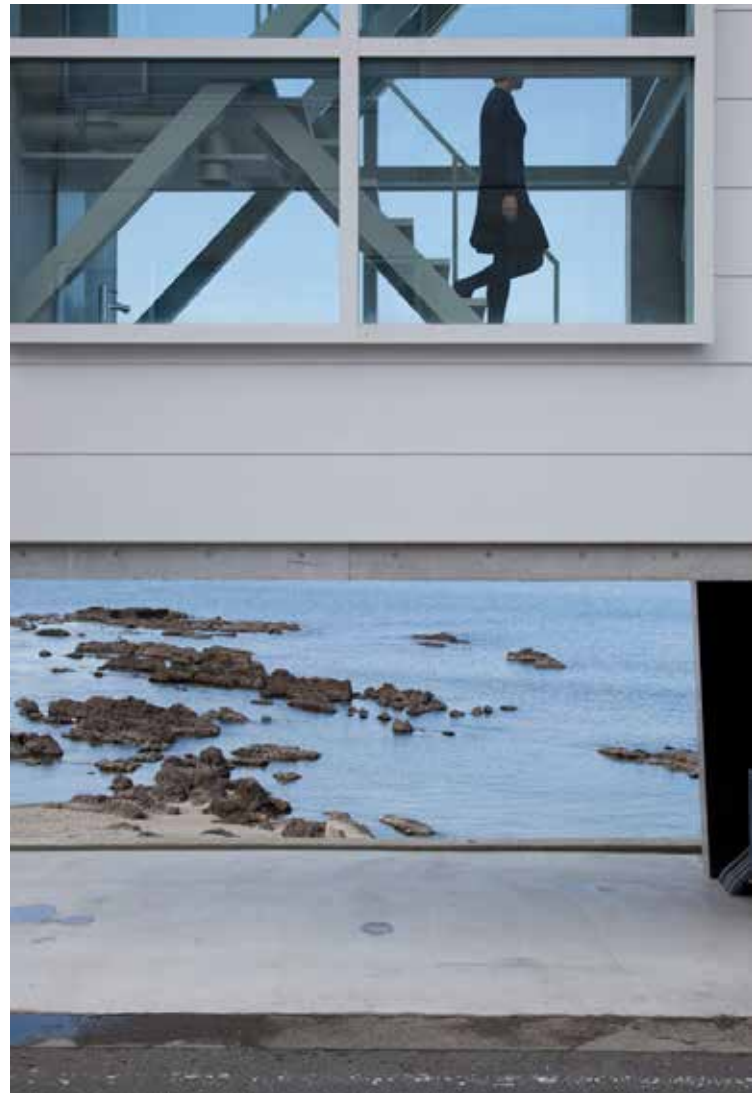
規範 × 半都市建築

(海への眺望 × フレーミング)

\* AP 賞 (2015)

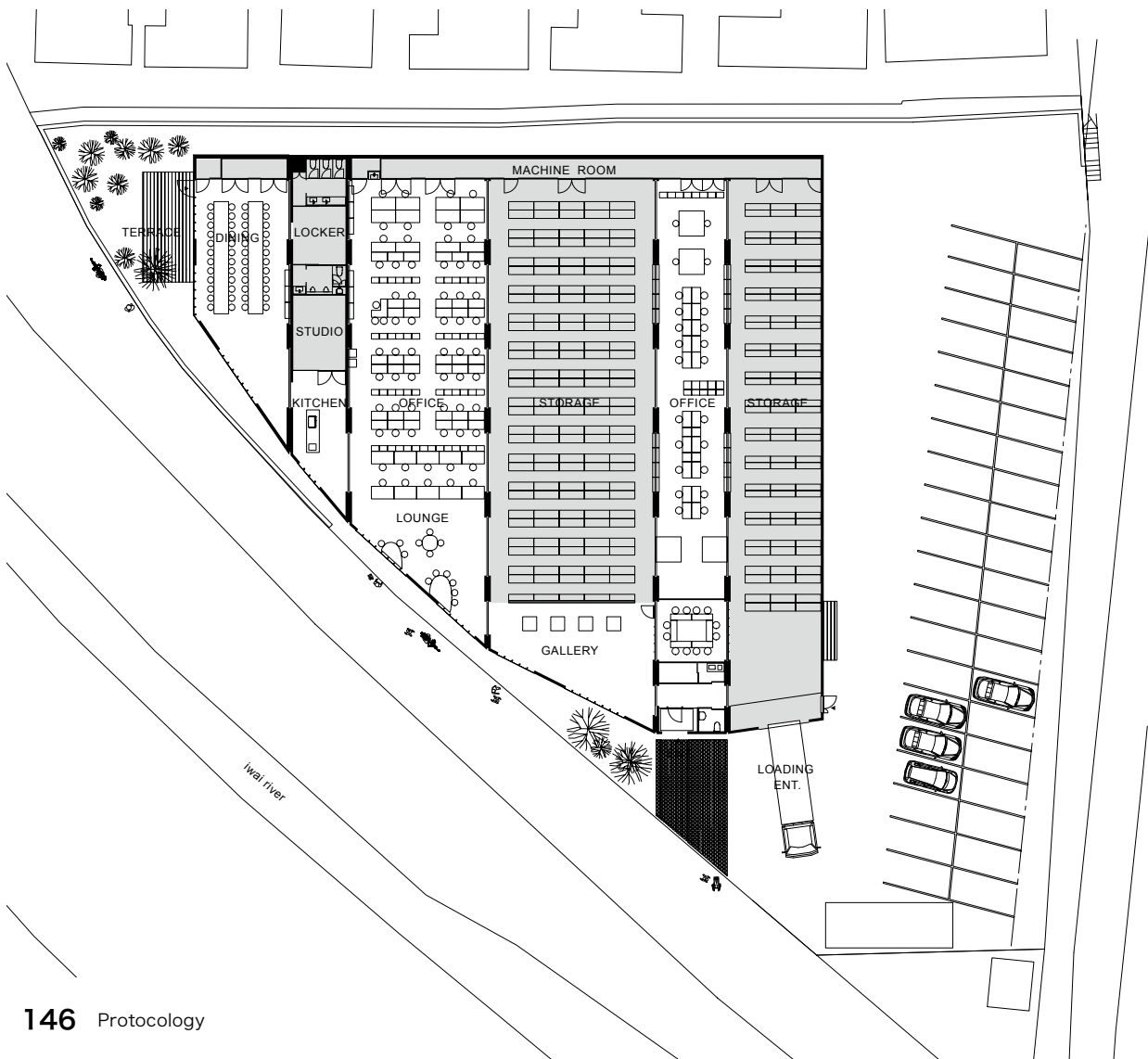
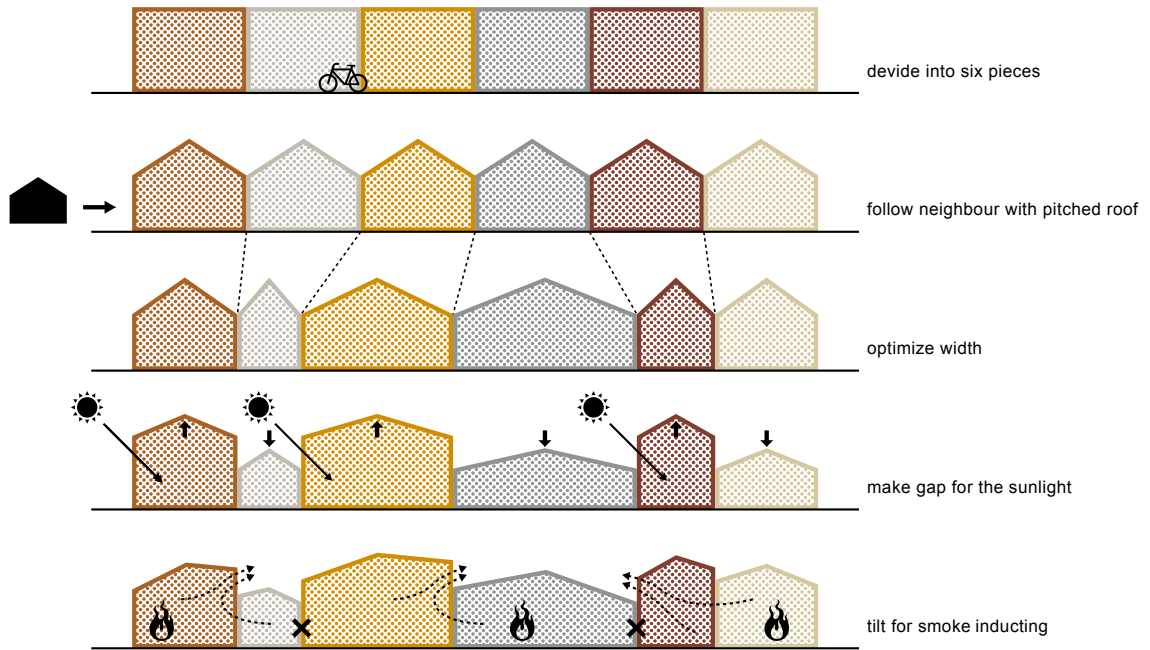
背後の住宅の眺望に配慮し、二枚の大きなガラス窓によって建物を貫通する視界を維持した計画。1階はRC造だが2階以上は木造であり、額縁になる壁の部分も窓を対角に横切るの斜材も構造として効いている。耐力壁は視線からの逃げ場を提供するが、一方、階段の角度をブレースに合わせるなどして窓の部分では視界を遮る要素を最小限に留めた。塩分の多い海辺の風を屋内に入れすぎないように、大窓は開かないが、壁で包まれた網戸付き玄関と、屋上の開口可能なトップライトとで重力換気をすると屋内にはゆるやかな上昇気流が起きる。階段で下りるビーチまで含めた一帯が居住空間と捉えられている。











【中川政七商店新社屋】（2009）

規範 × 半都市建築

（工学 × 歴史）

\* 日経ニューオフィス賞（2010）

\* 日本建築学会作品選奨（2010）

\* アジアデザイン賞メリット賞（2010）

\* グッドデザイン賞特別賞（2010）

\* JCD デザインアワード銀賞（2010）

伝統工芸と現代的なマーケティングで躍進する中川政七商店の本社屋。奈良県奈良市の市街地から南に2 kmほど下る場所が敷地で、周辺は店舗も途切れ、一本裏へ回れば住宅地や農地が広がっている。1500平米の倉庫兼事務所を、周囲の家並みから連続する6つの家型で構成し、道路一駐車場一建物という郊外の一般的な構成を反転して道路側に社内の活動が染み出してくるように配慮した。それはちょうど、本店のある奈良町の町屋のような構成でもある。各棟は必要な面積や排煙区画から高さや屋根の勾配が決められ、また景観条例の施行前の建物ではあるが、条例で定められた色彩計画の限界値を利用してコントラストをつけ、各棟の独立性を高めている。













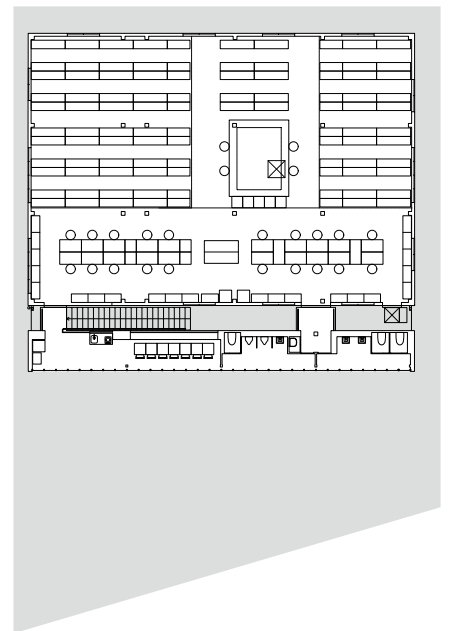


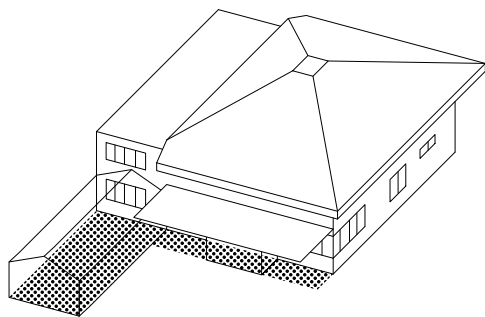
## 【中川政七商店旧社屋増築棟】（2012）

規範 × 半都市建築

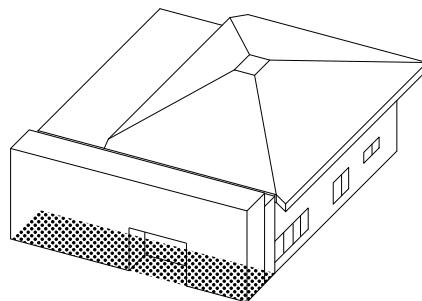
（工業団地 × 看板建築）

150%の増員に備えて設計した新社屋がすぐに足りなくなって、旧社屋を再利用することになった。利用形態の大部分が倉庫であり面積が大きく、予算を薄く広くつかえば化粧直し程度しかできない。そこで倉庫になる部分には手を加えず、新たに必要になる水回りや動線部分を北側に思い切って集約して新たに建物を建てることにした。具体的には、すでに増築されていたプレファブ倉庫を解体し、その床面積を再分配するかたちで、旧社屋の前面道路側一面を覆うような2 x 20mという薄い平面形状をした建物を増築することにした。ここでもフクマスベースと同じく図面が保存されておらず、既存の建物に触れば全体の再計算が必要になるが、そうならないようすべての要素は新棟からの片持ちとして本体とはEXP.Jで切り離した。増築部分の構造は片肘ラーメンとし、また農業用サッシの転用で道路側の透明度を極力高め、わずかながらも人の気配を感じられるファサードとした。





**BEFORE**



**AFTER**













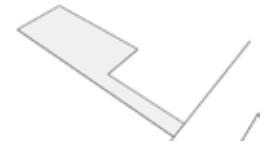
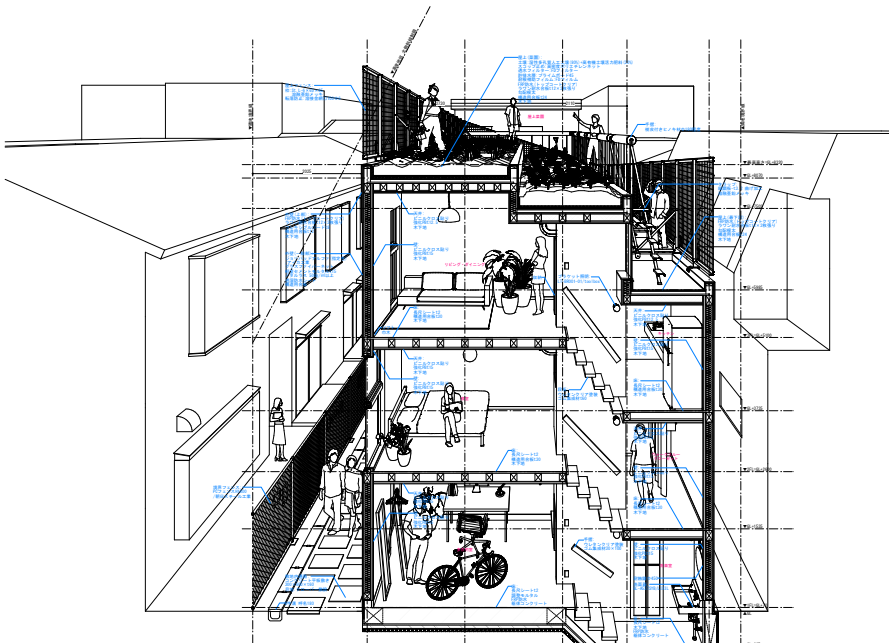


【サイエンナガヤ】(2016)

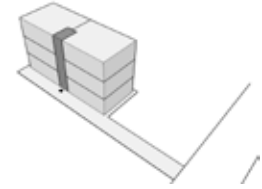
法 × 半都市建築

(旗竿敷地 × 都市緑地)

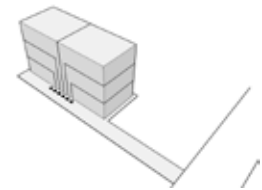
共用部を持つ共同住宅が建設できない旗竿敷地の奥で、各戸が地上と屋上にアクセスを持つ長屋形式の利点を活かし屋上菜園をつかった。日本の賃貸物件の内装はクギ一つ打てないアンタッチャブルな領域であり、そのため「つっぱり棒」、「置くだけフローリング」など内装を痛めないための方法が独自進化してきたほどである。逆に言えば、建物に手を加えたい欲望が、そういった市場を支えるほどにふつふつと滾っているのである。ここではFRPで覆われた屋上菜園が「ランドスケープのDIY」ができる場所としてその受け皿となる。利用開始後すでに、苗のやりとりなど住人同士の小さなコミュニケーションがはじまっているようである。



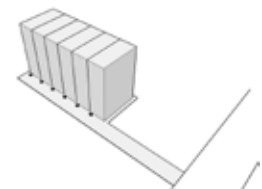
1



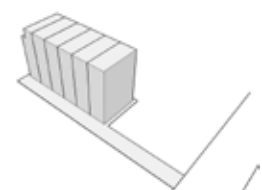
2



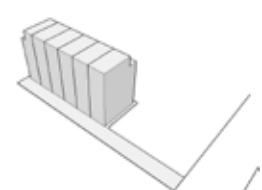
3



4



5



6



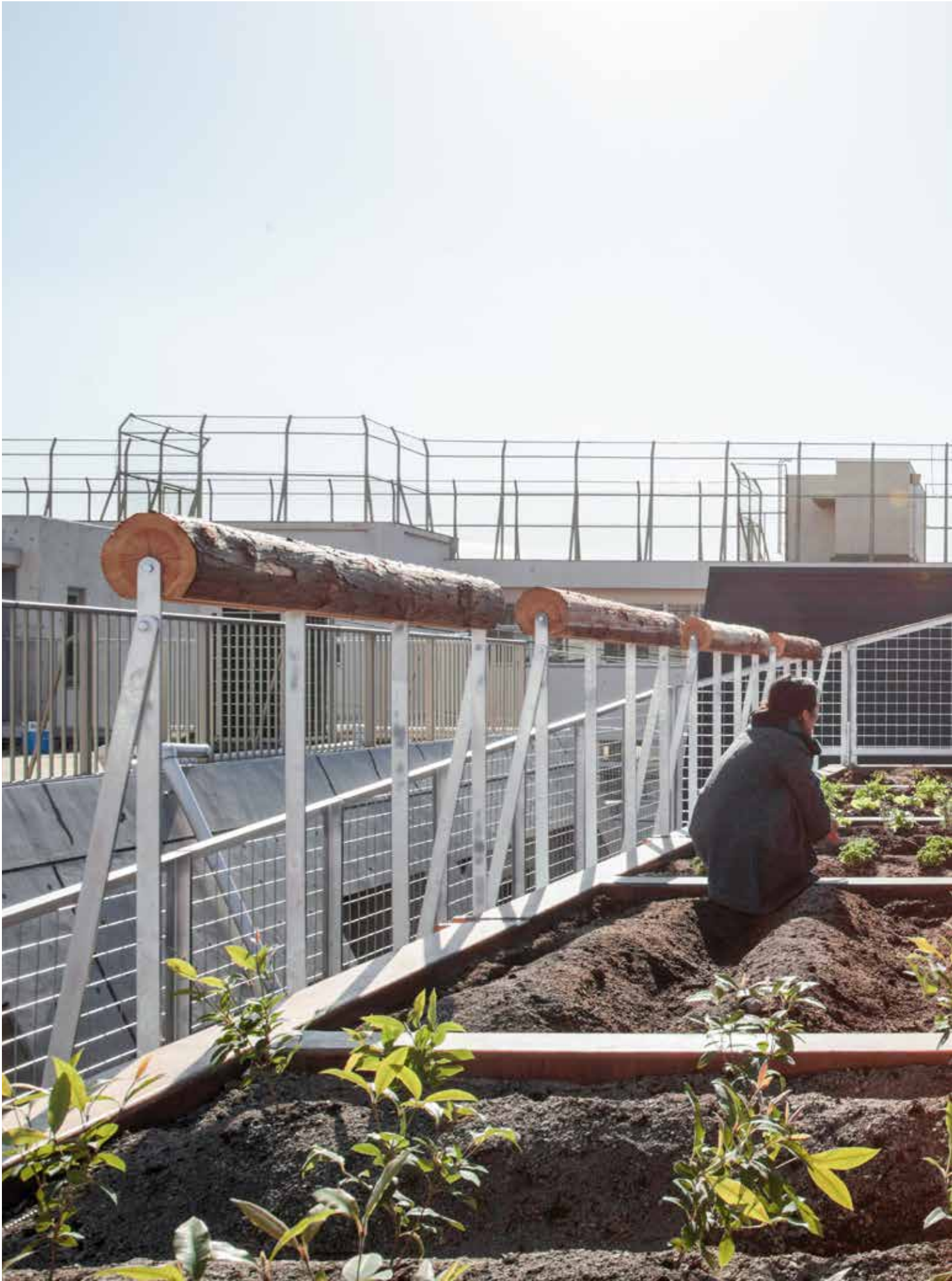
7



8















T O







■ 1

東京 23 区

平均使用容積率

136%



■ 2

マンハッタン

平均使用容積率

631-1421%

.....

>>第四章

<プロトコロジーを用いた新たな計画>

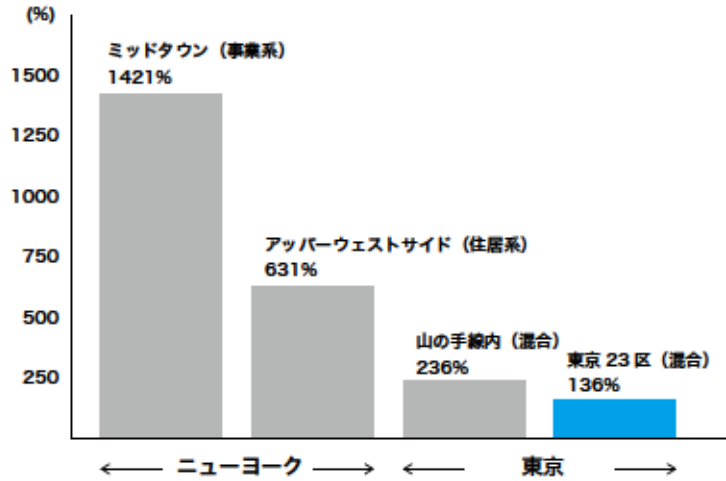
.....

**【超高層空港施設の試案】**

東京(23区)の使用容積率は136%(■1)であり、マンハッタン(ミッドタウン)の1421%(■2)に比べ圧倒的に低い。またその数値の差は、それぞれの街と実際に対峙した際の肌感覚とも近い。日本の使用容積率の低さには無論良い面もあるが、ここでは高密度化のオルタナティブを描いてみたい。親しみやすいスケールの街を残しながら全体として容積率を高めるには、鉄道ターミナルをはじめとする情報集積地で土地の高度利用を進める必要があるが、そういった地域への集積が進まない理由のひとつに航空制限表面がある。航空制限表面とは、空港の滑走路面から1/50の勾配でかかるすり鉢状の高さ制限である。たとえば、羽田国際空港から7kmの距離にある品川のビル群は、航空制限表面により高さ140mで頭打ちとなっている。ほかにもたとえば台湾の松山空港や福岡の福岡空港など、都心に近い空港はどれも、利便性を提供して開発を促す一方、自らその開発の制限にもなるというディレンマを抱えているのである。このディレンマの解消に向け、プロトコロジーを用いた**【超高層空港施設の試案】**を提案する。東京羽田国際空港を舞台に設計し、他空港へも応用可能なプロトタイプとする。

### ニューヨークと東京の使用容積率比較

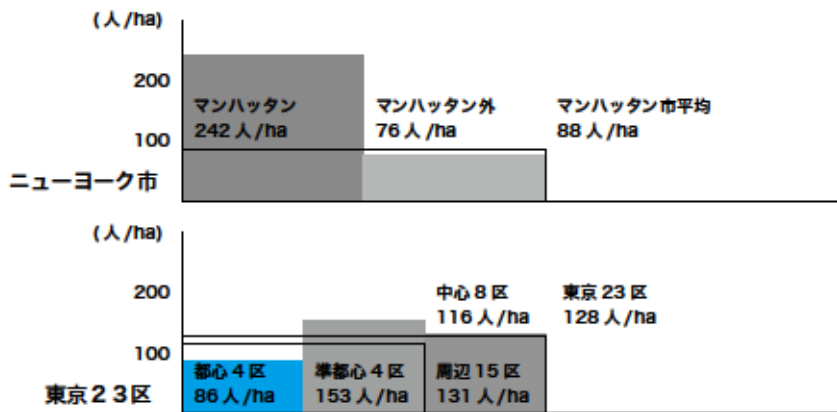
■ 3



出展：  
「都市のチカラ 超高層化が生活を豊かにする」森ビル都市再生プロジェクトチーム

### ニューヨークと東京の人口密度比較

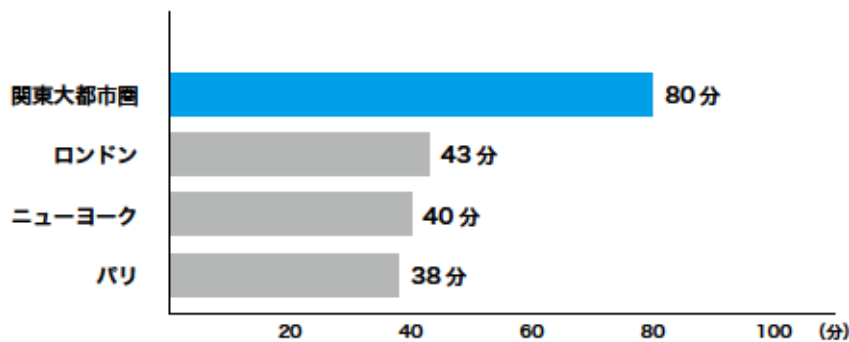
■ 4



出展：  
平成13年度国土交通白書「東京とニューヨークの人口密度比較」

### 都市別通勤時間比較

■ 5

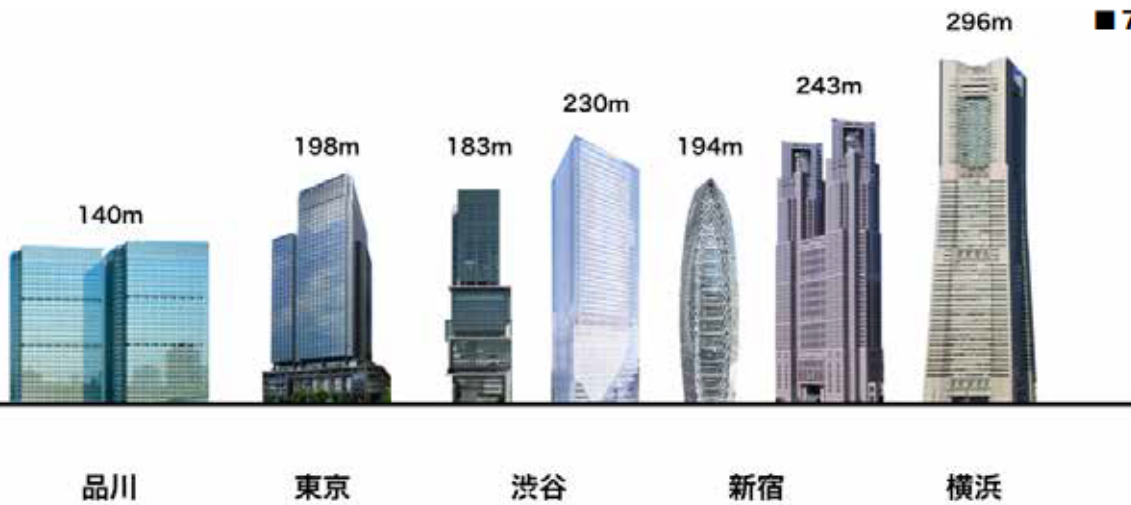
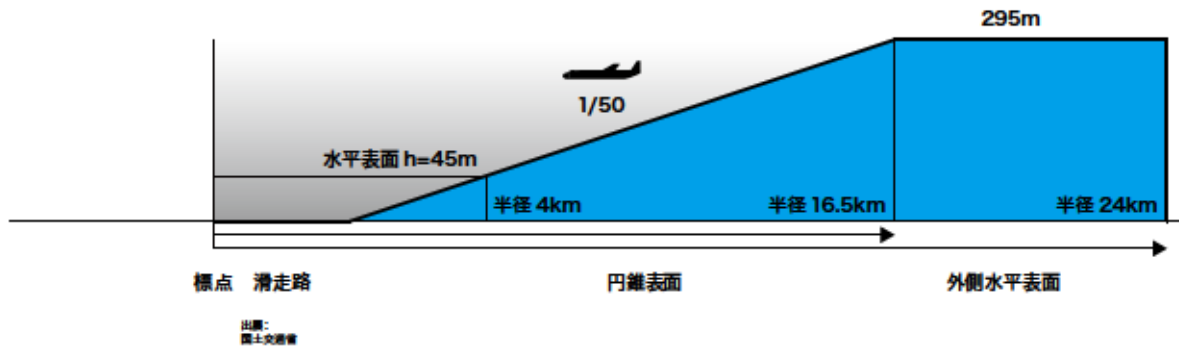


出展：  
平成18年度社会生活基本調査 平日雇用されているヒトの通勤時間(総務省)  
「暮らしやすい生活(ZZA Responsive User Environments, Ziona Strelitz)/2010年3月RegusHP」

東京の人口密度分布を見ると、ニューヨークに比べ著しく変化に乏しいことがわかる（■3、■4）。均質なスプロールは通勤時間の長さにも表れている。（■5）しかしこれまで郊外へのスプロールを支えて来た交通インフラも、今後深刻化する人口減少社会では、道路なら税収減、鉄道なら利用者数減によって維持が大きな負担となることも予想される。

### 航空制限表面概略

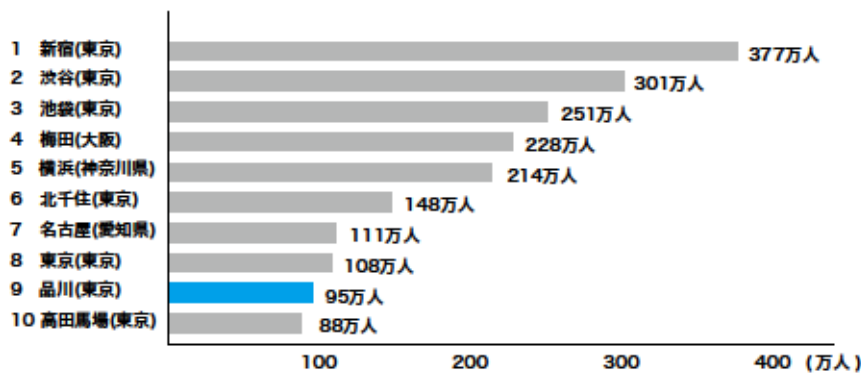
■ 6



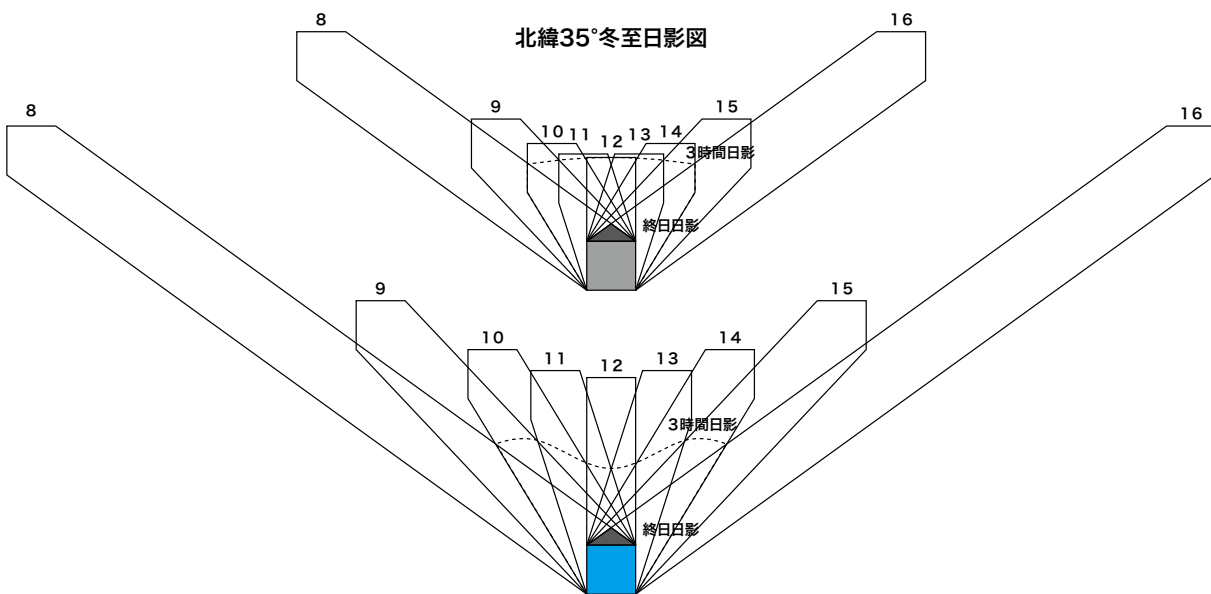
■ 7

### 主要駅 1日乗降客数比較

■ 8



そういった状況に備え都心部への人口集約が検討されるべきだが、容積率は根拠に乏しいまま低い数値に設定されており、特に、空港や新幹線など主要なネットワークの結節点となる東京・品川エリアでは、羽田の滑走路からの距離に応じて設定されるスリバチ状の高さ制限である航空制限表面（■6）が高層化を阻んでいる（■7）。鉄道利用者数を見てもそのポテンシャルが十分に活かされているとは言い難い状況である（■8）。本計画では、この制限を解除し、東京の潜在的容積率の有効活用を目指す。



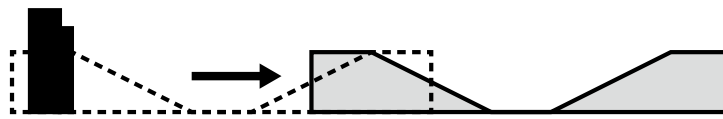


この制限の解除には、1) 空港の郊外移転（水平移動）、2) 法制度の改正（角度変更）、3) 滑走路の高層化（垂直移動）という3つの選択肢がある。このうち1) は、近年特に重要度が増している国際空港の都市近接性を損なうものであり、機体の性能に連動する2) に関しては新たな急角度離着陸機の登場待たなければならないことから、3) の可能性を探る。具体的には、現在のC滑走路に並行する海上300メートルに、セミオープンパラレル配置（距離760m以上）で3千メートル級の滑走路と新ターミナル機能を計画した。全体は、500mx400mの巨大なユニットを8個並べて構成されており、曳航により敷地での建設期間を最小化する工夫が特徴である。この新空港が実装されれば、制限区域内の高さであっても $300 + \text{距離} \times 1/50$ となり、最大値が595mまで緩和されることになる。現行滑走路からの距離7kmで高さが140m程度にとどまる品川周辺も、440m程度の超高層建築が視野に入る。

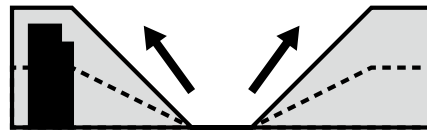
高層化にはネガティブな印象がつかまとうが、例えば影の問題を考慮してみても、動きの早い高層部の影は地上に与える影響が小さいと言える（■9）。風の影響を見ても同様で、細く高い建物は人新世の文脈のうえで都市部のタイポロジーとして今後見直される可能性がある。

## 制限解除の選択肢

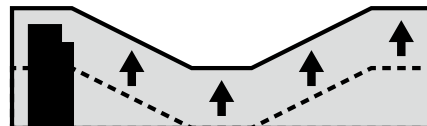
### 1 空港の郊外移転（水平移動）



### 2 法律の改正（角度変更）



### 3 滑走路の高層化（垂直移動）



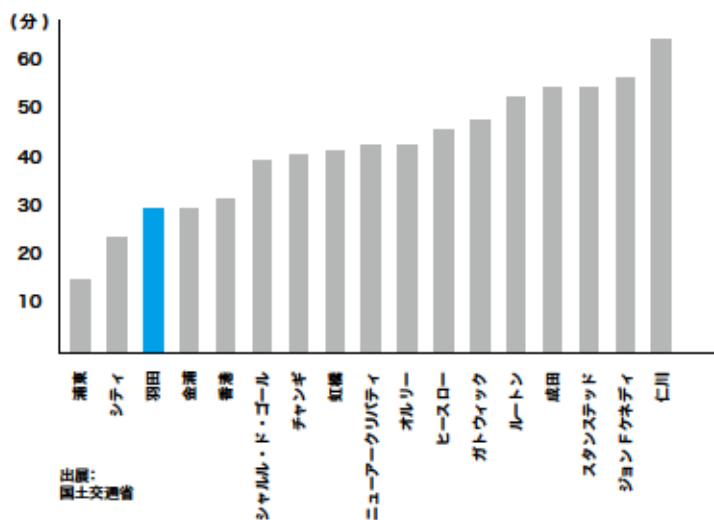
## 1 空港の郊外移転

現在、主要な国際空港は都市間競争を占う重要なキャストとなっている（図10）。東京は成田へのアクセス向上と羽田の地の利の有効活用を同時に図るべきで、実際の計画もその路線を堅持するものである。高密度高層都市はその利便性から空港を要請し、一方で騒音や高さ規制が両者を遠ざけるといふディレンマの渦中にあり、単なる郊外移転は選択肢とならない。（■10）

## 2 法律の改正

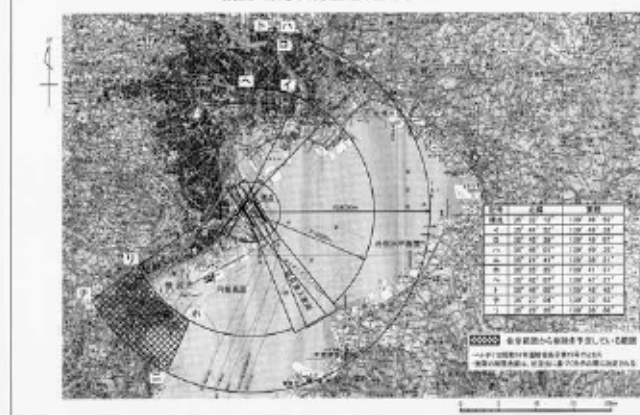
スカイツリー（634m）やみなとみらい（296m）の開発は制限表面の解除というまさに超法規的な措置で実現した（■11）。しかし、もともと飛行機の離着陸角度というフィジカルな規制力と連動した法（■12）であるため、安易に全面解除することはできない。急角度の離着陸は仮に機体がそれを許容しても、乗客の身体が許容できないだろう。

海外主要空港アクセス比較（国際空港からビジネス拠点）



■10

別図 東京国際空港制限表面図



■11

航空制限表面の解除



■ 14

羽田の高層化により制限表面が解除された  
品川周辺

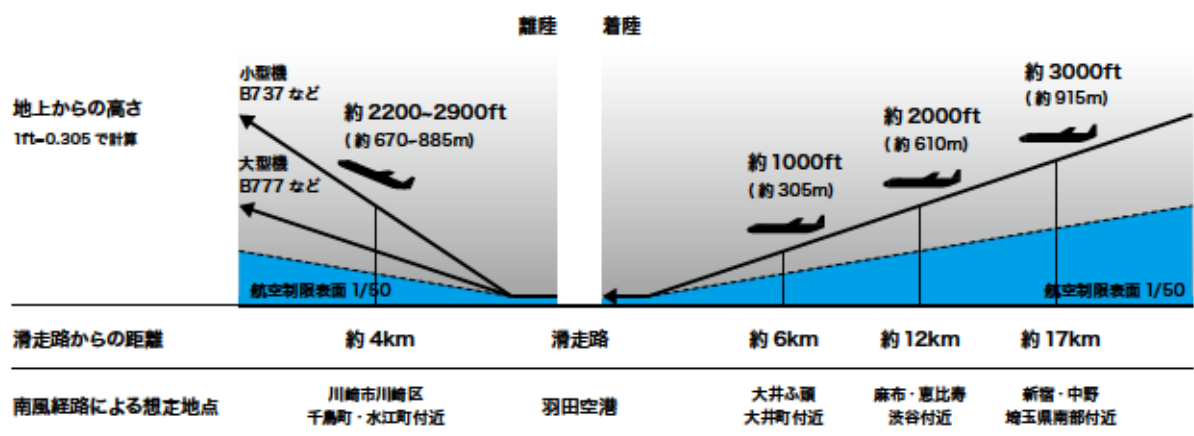


### 3 滑走路の高層化

そこで提案したいのが、滑走路の高層化である。法規制の起点となる滑走路を高層化すれば、アクセスの良さと現行の法を完全に維持したまま制限表面を上空へと持ち上げることができる（■13）。以下に、空港というビルディングタイプの『かた』として高層空港の可能性を探る。（■14）

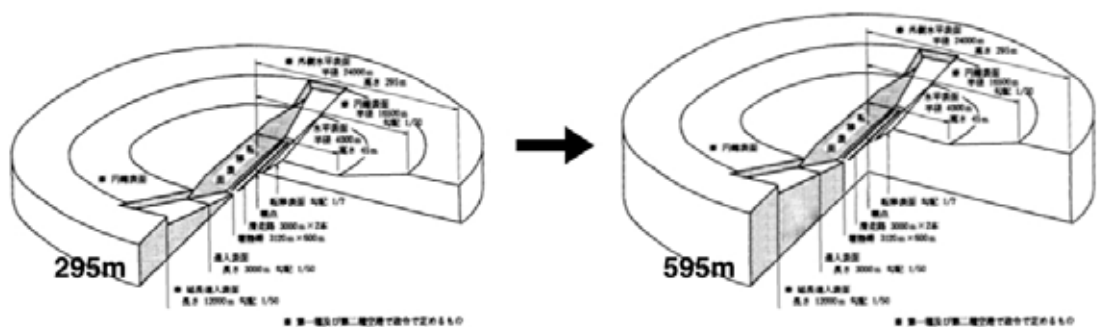
羽田空港からの（までの）離着陸角度

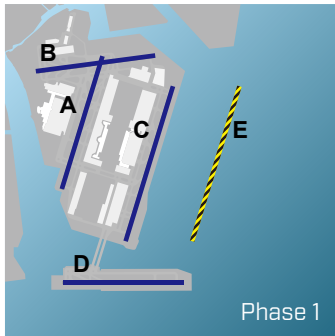
■12



出典：  
国土交通省「羽田空港のこれから」

■13





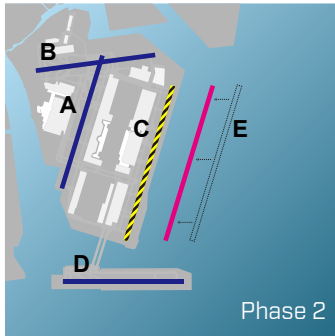
Phase 1

■ 16

運用しながら4本の滑走路を  
高層化し、新たな開発用  
地を得る

凡例

- 地上
- 海拔300m

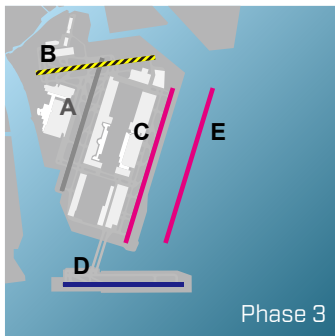


Phase 2

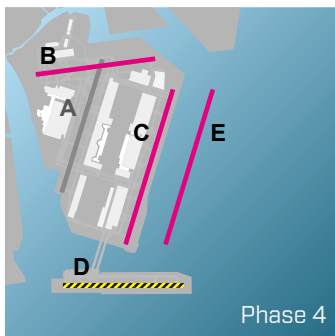
■ 15

国土交通省による検証

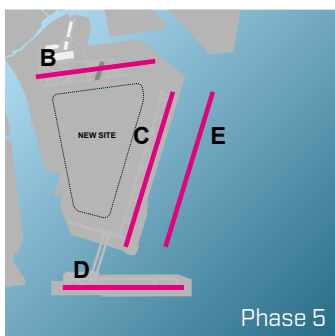
|                  | オープンパワール<br>(1,310m以上開闢)    | セミオープンパワール(700m以上開闢)       |                             |                             |                            | クローズパワール<br>(300m) |
|------------------|-----------------------------|----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|----------------------------|--------------------|
|                  | ①C滑走路に平行                    | ②A滑走路に平行                   | ③C滑走路に平行                    | ④D滑走路に平行                    | ⑤B滑走路に平行                   |                    |
| 出展：国土交通省<br>運用方法 | A:到着、C:出発<br>増設、混合          | A:到着、C:出発<br>D:出発、増設、到着    | A:到着、C:出発<br>D:出発、増設、混合     | A:出発、C:出発<br>D:到着、増設、到着     | A:到着、C:混合<br>D:出発          |                    |
| 機体時<br>運用方法      | A:混合、B:出発<br>C:出発、増設、到着     | A:混合、B:出発<br>C:到着          | A:混合、B:出発<br>C:出発、増設、到着     | B:到着、D:出発<br>増設、混合          | A:混合、C:到着<br>増設、出発         |                    |
| 効果               | 固定時間数：104回<br>(出発54回、到着50回) | 固定時間数：91回<br>(出発45回、到着46回) | 固定時間数：112回<br>(出発56回、到着56回) | 固定時間数：102回<br>(出発54回、到着48回) | 固定時間数：91回<br>(出発45回、到着46回) |                    |



Phase 3



Phase 4

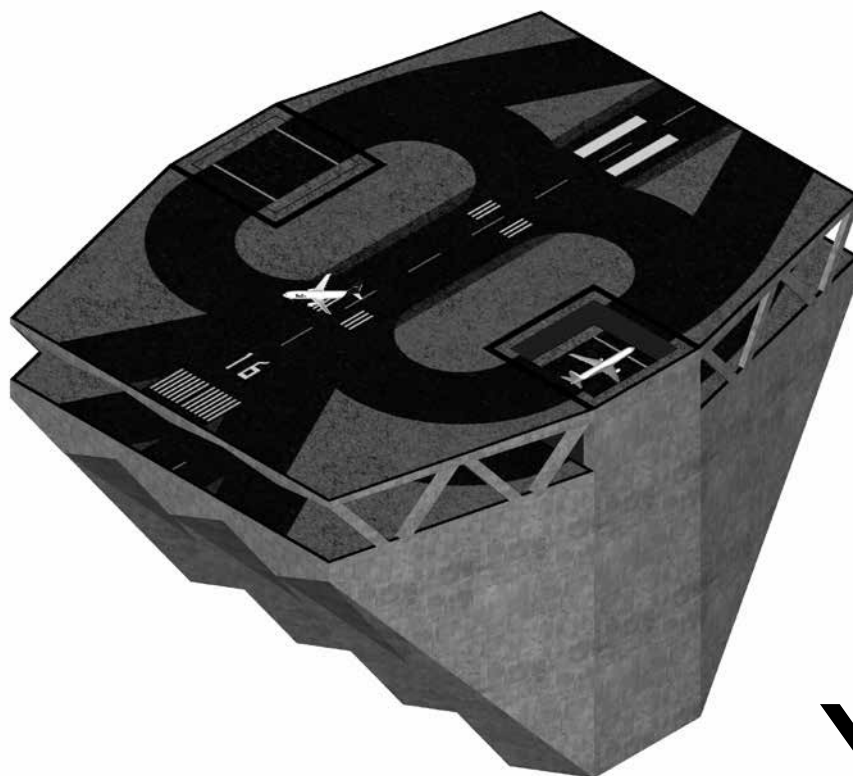


Phase 5

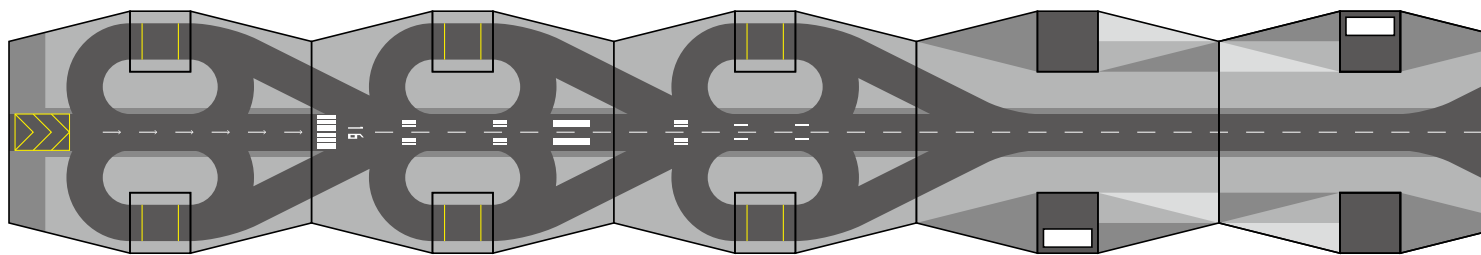
### 配置と基本構成について

新滑走路の配置に関してはすでに国土交通省による検討結果が公開（■15）されており、その内容を吟味し、C滑走路にセミオープンパラレルに構える案を採用し、完全高層化に至るプロセスを想定する（■16）。高層化はできるだけ短期間で完了が望ましく、そのため全長500m、全幅400mのユニットを8つ連結するモジュール工法による高層空港を提案する。滑走路と誘導路が上下に積層されており、ユニットサイズは、両者を結ぶ航空機用昇降機とその展開スペースから設定されている。（■17）

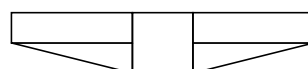
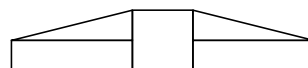
■17



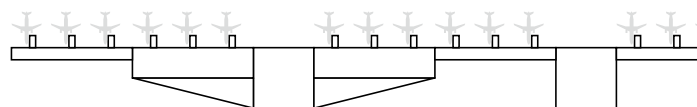
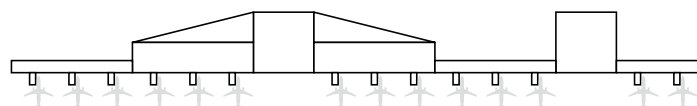
X8



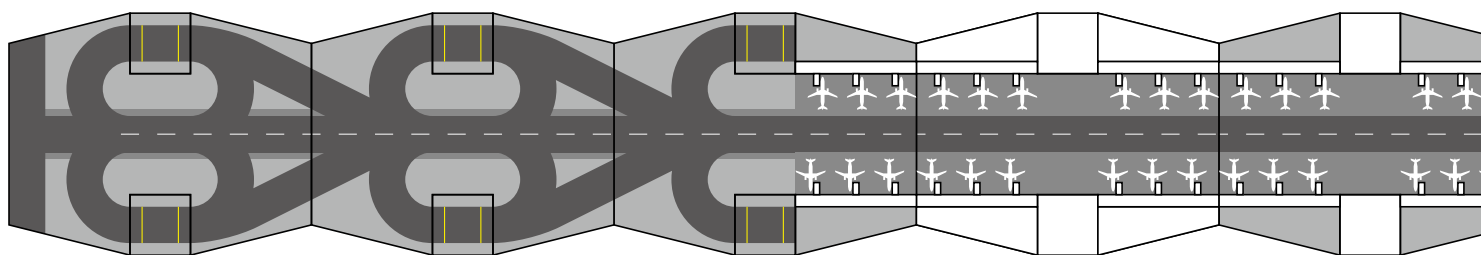
5F PLAN T.P.+300m 滑走路



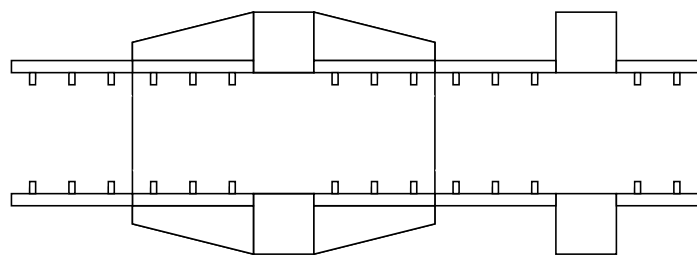
4F PLAN T.P.+270m ラウンジ+飲食



3F PLAN T.P.+260m 出国手続き

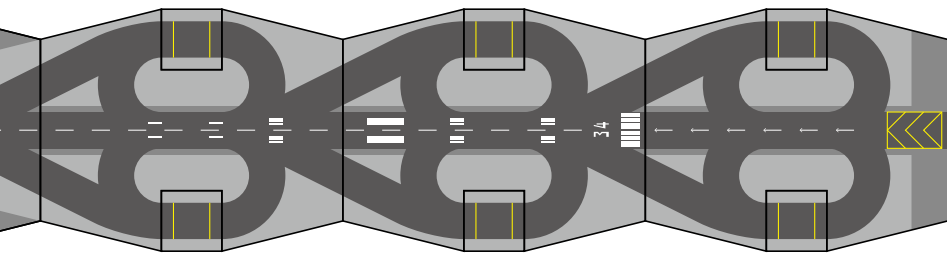


2F PLAN T.P.+250m 出発カウンター



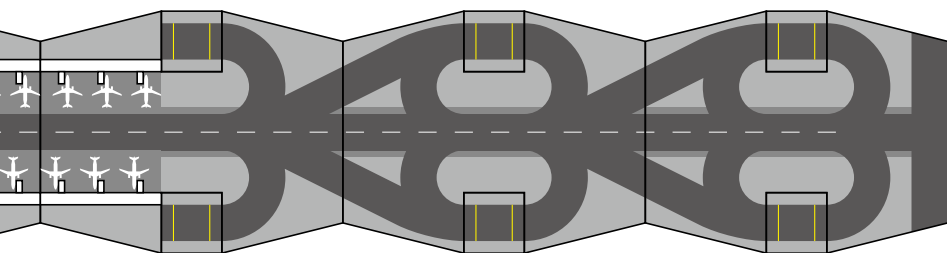
1F PLAN T.P.+240m 到着+荷物





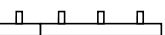
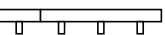
### 平面について

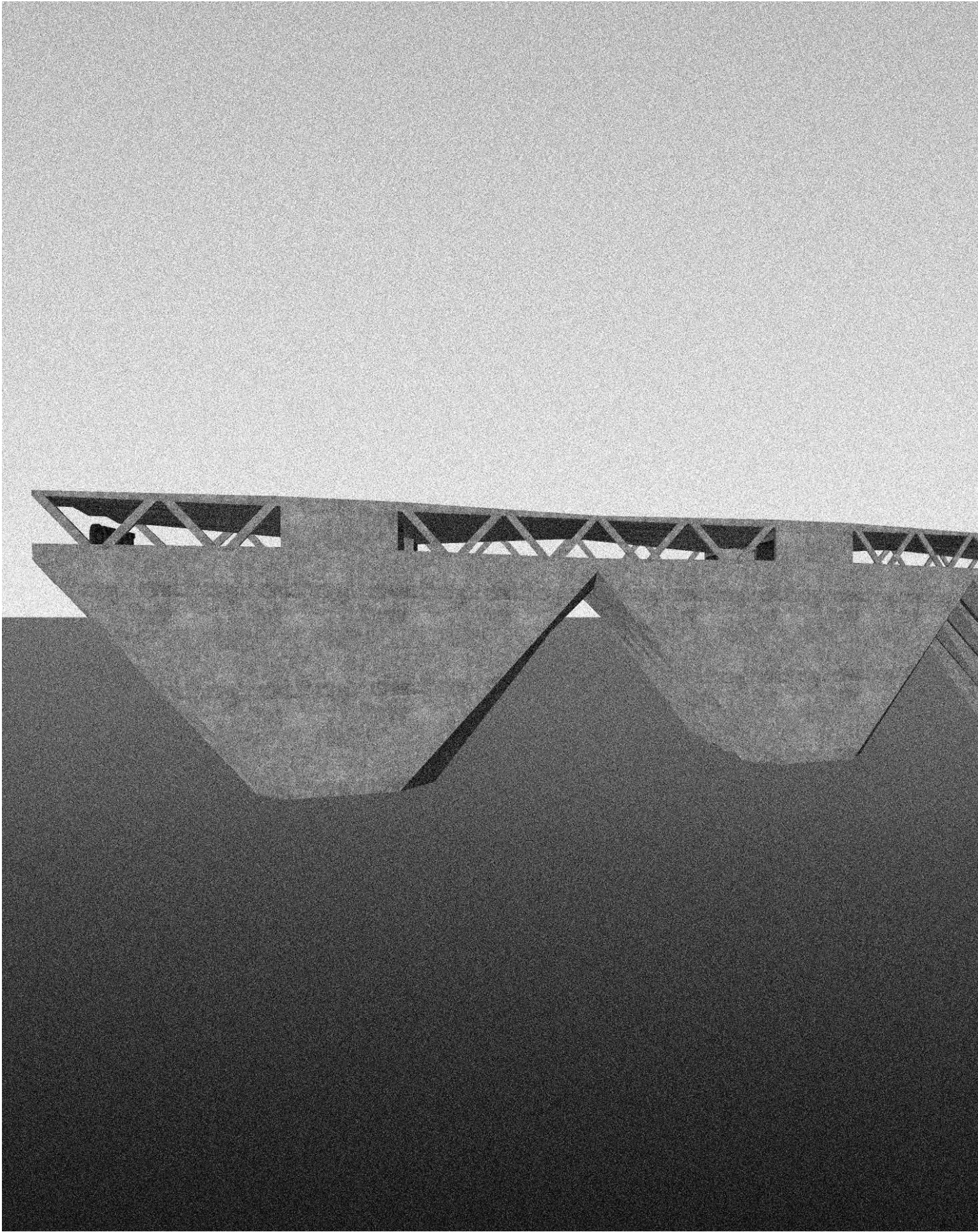
8つのユニットが並列される。離着陸の慣例に従い、風向きに応じて南北どちらからも離着陸できるよう基本的に対象形の構成とした。中央6ユニットが3000mの滑走路であり、両端の各1ユニットが待機スペースとなる。中央の2ユニットがターミナル機能と管制機能を担う。北側のユニットに国際線・国内線の2ターミナルを東西分散配置したが、南側ユニットにも増築可能である。



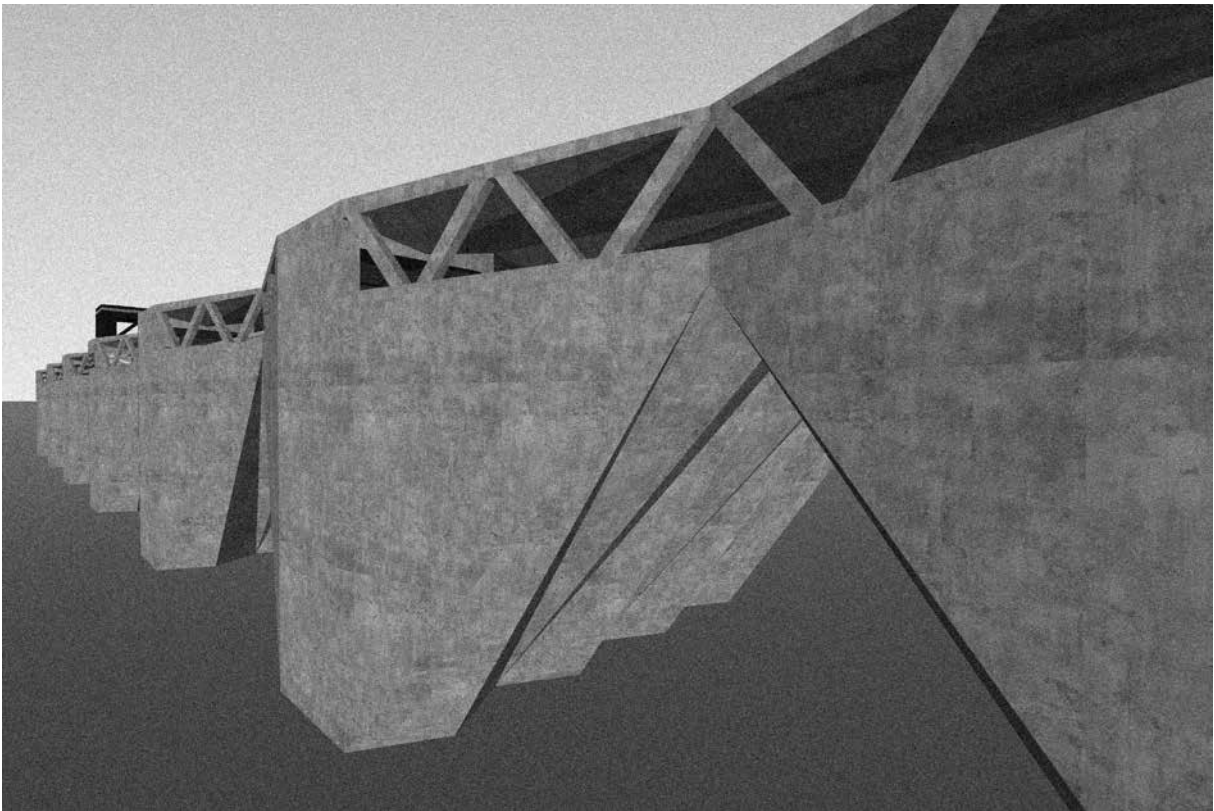
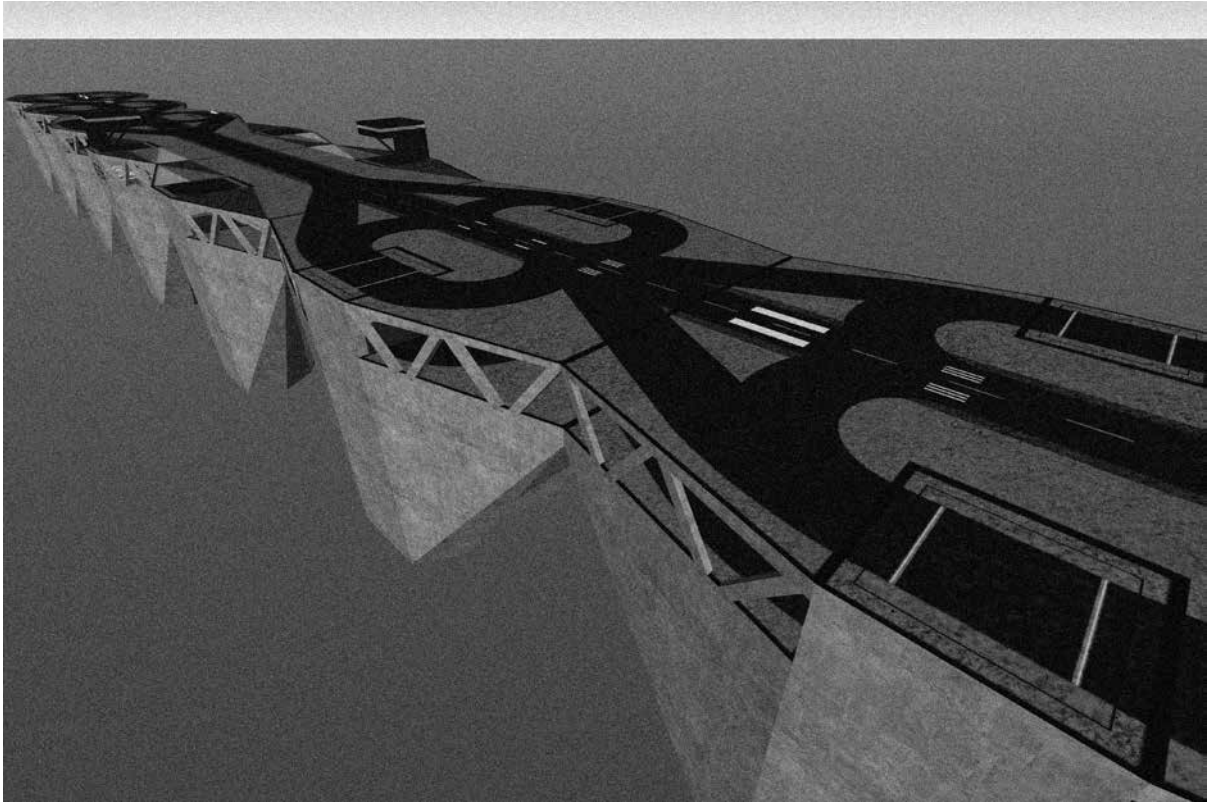
### 内部について

海面下のトンネルを通過して自動車と電車でアクセスし、エレベーターで出発、または到着のロビーへと上る。エレベーターホールのある大柱内がメインのホールとなり、そこから南北にウィングを伸ばす構成とする。搭乗口は誘導路側に一直線に並ぶ。コンパクトかつ機能的な配置を心がけた。

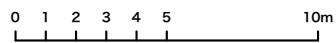
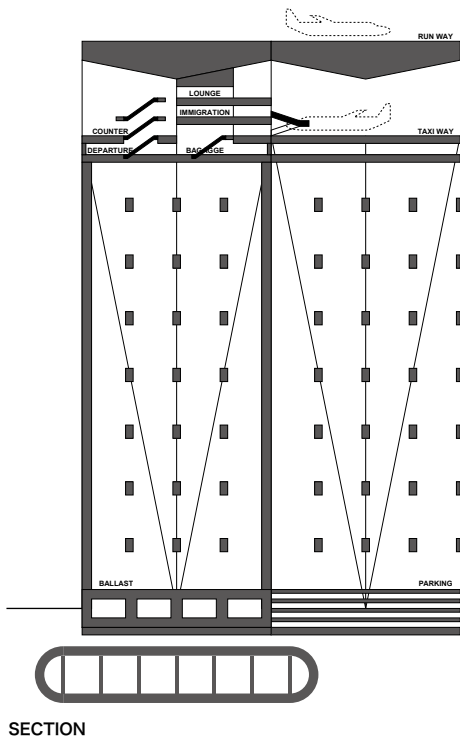
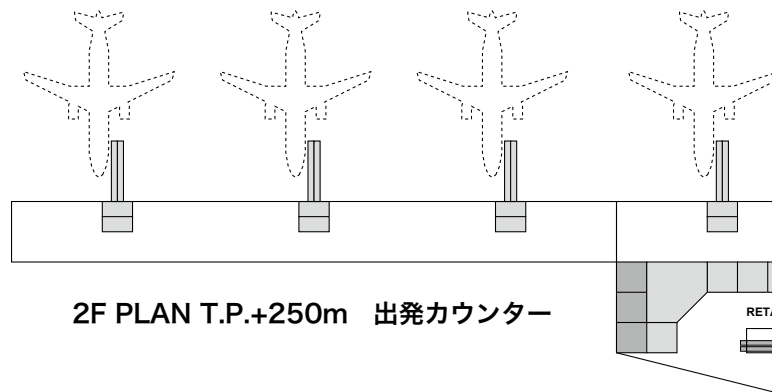
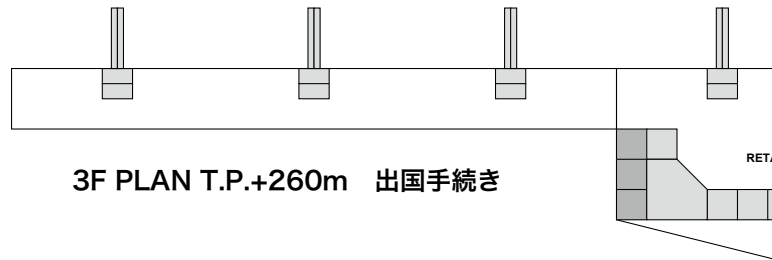
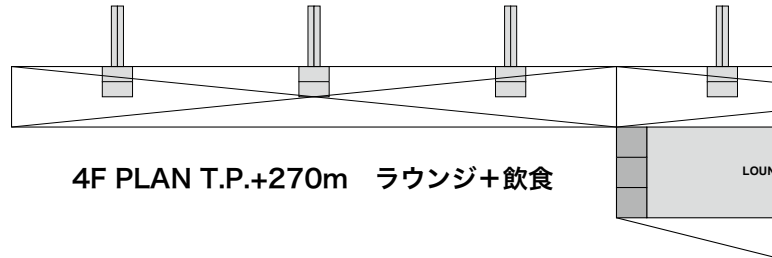


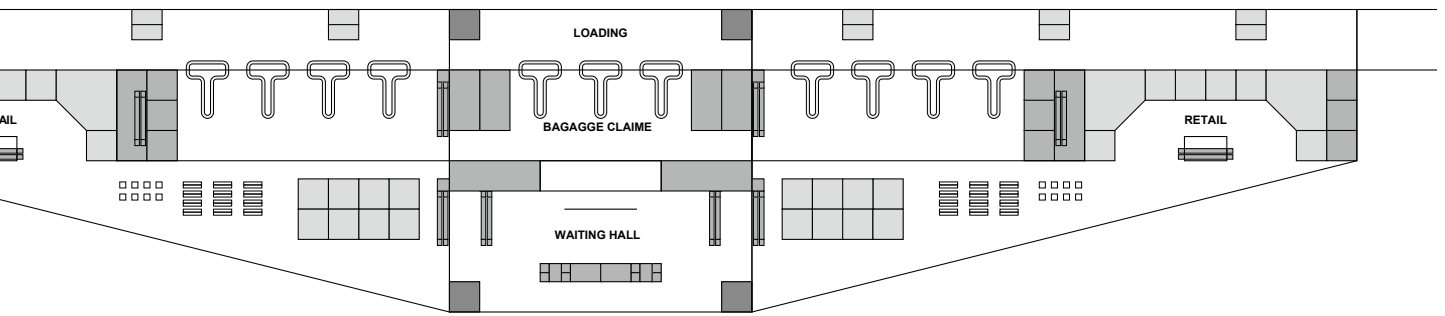
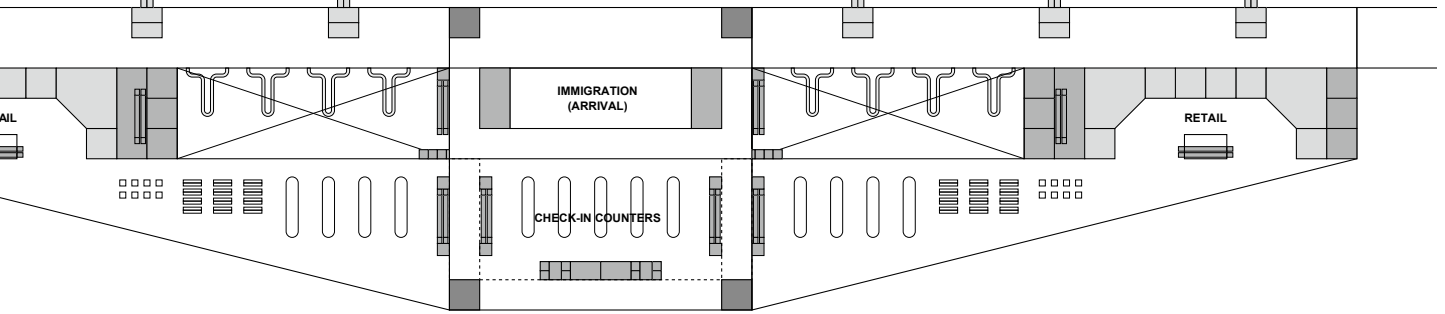
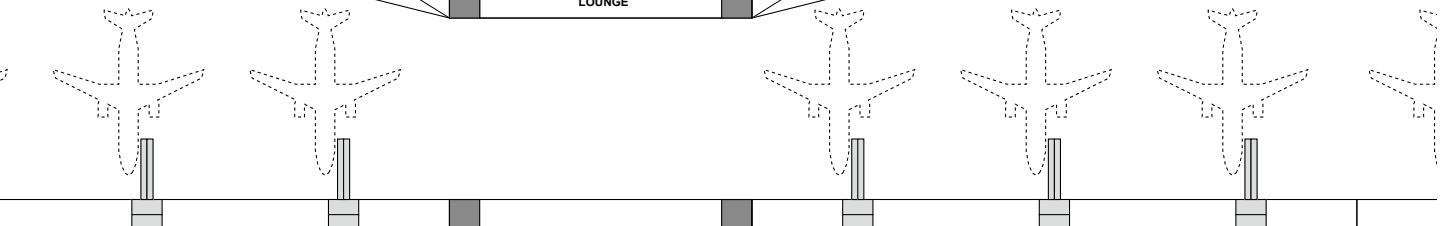
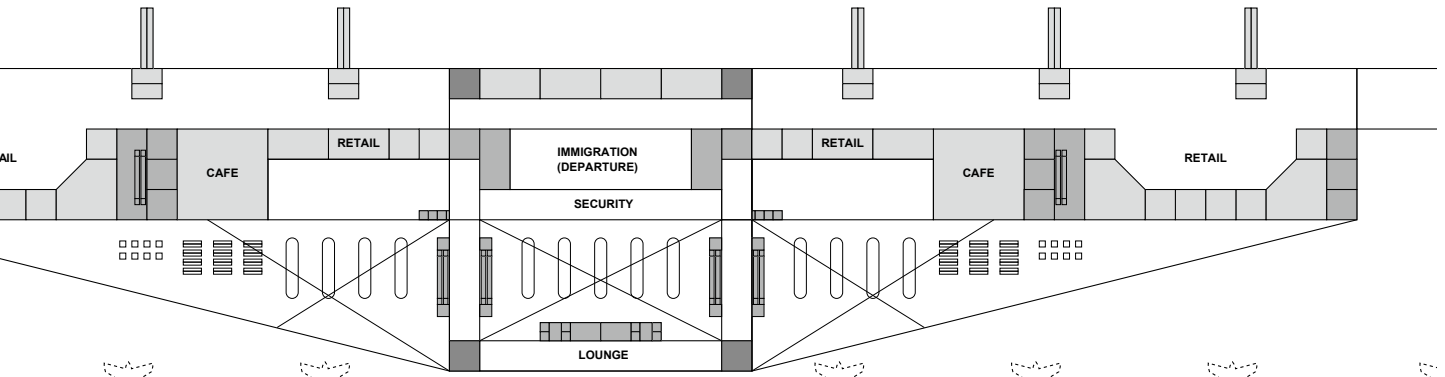
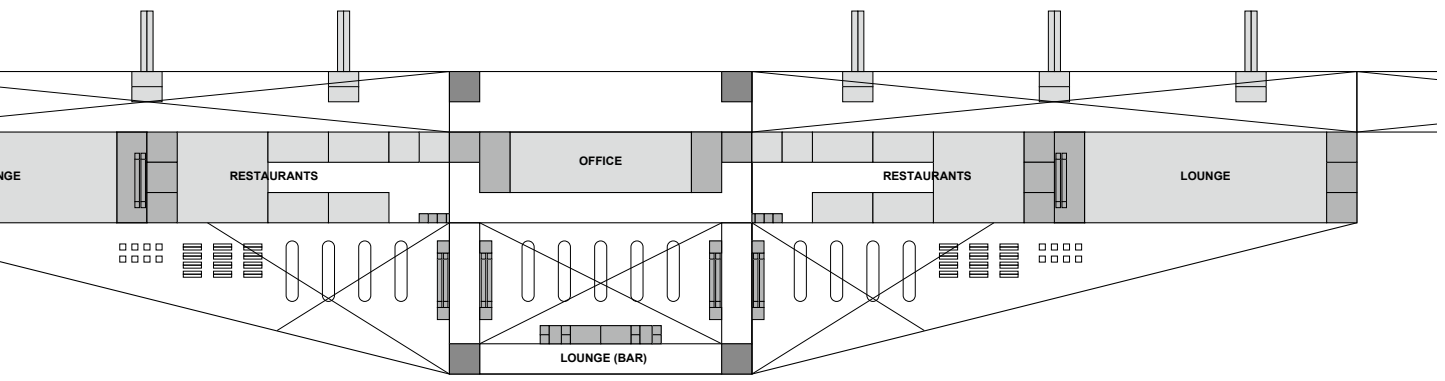


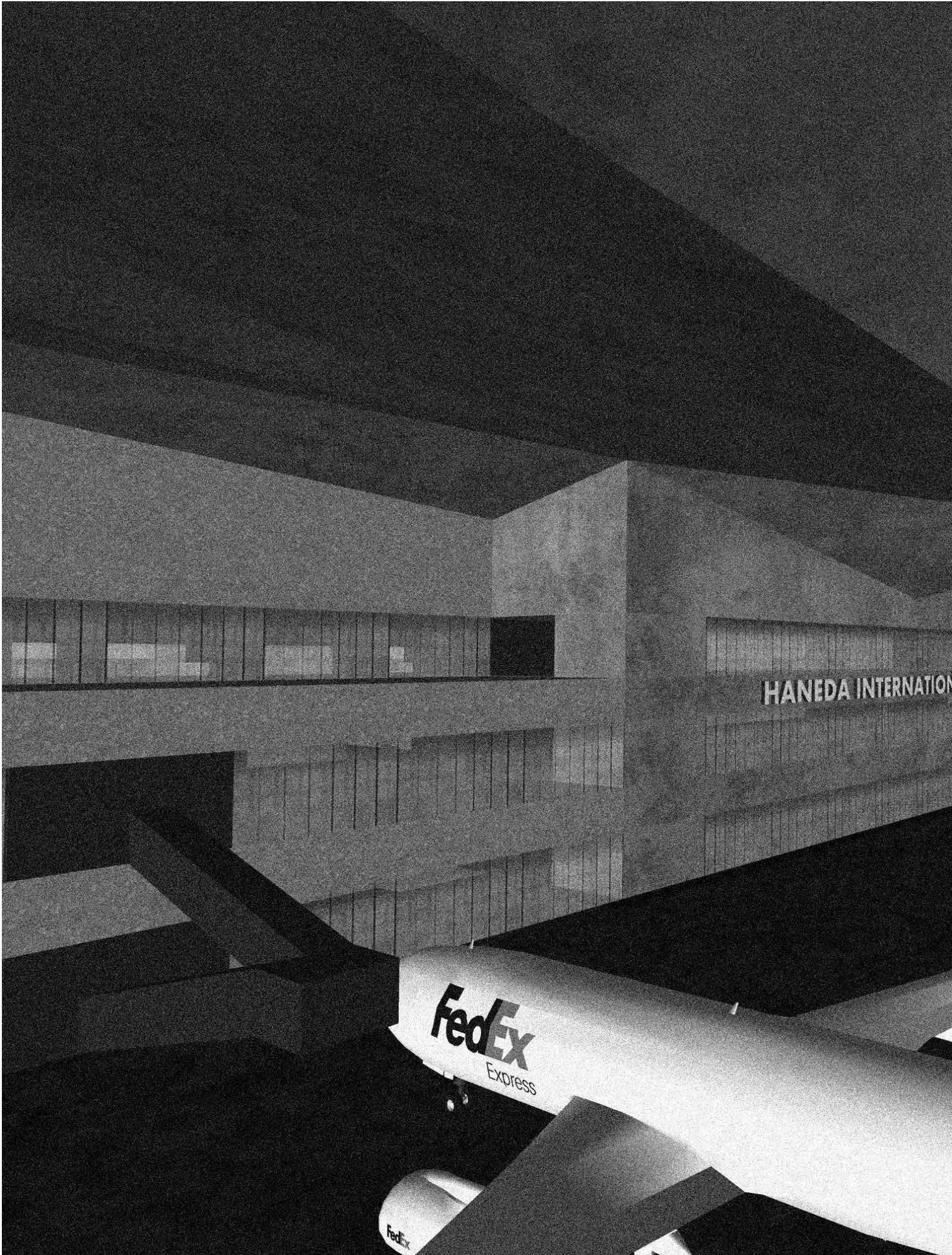




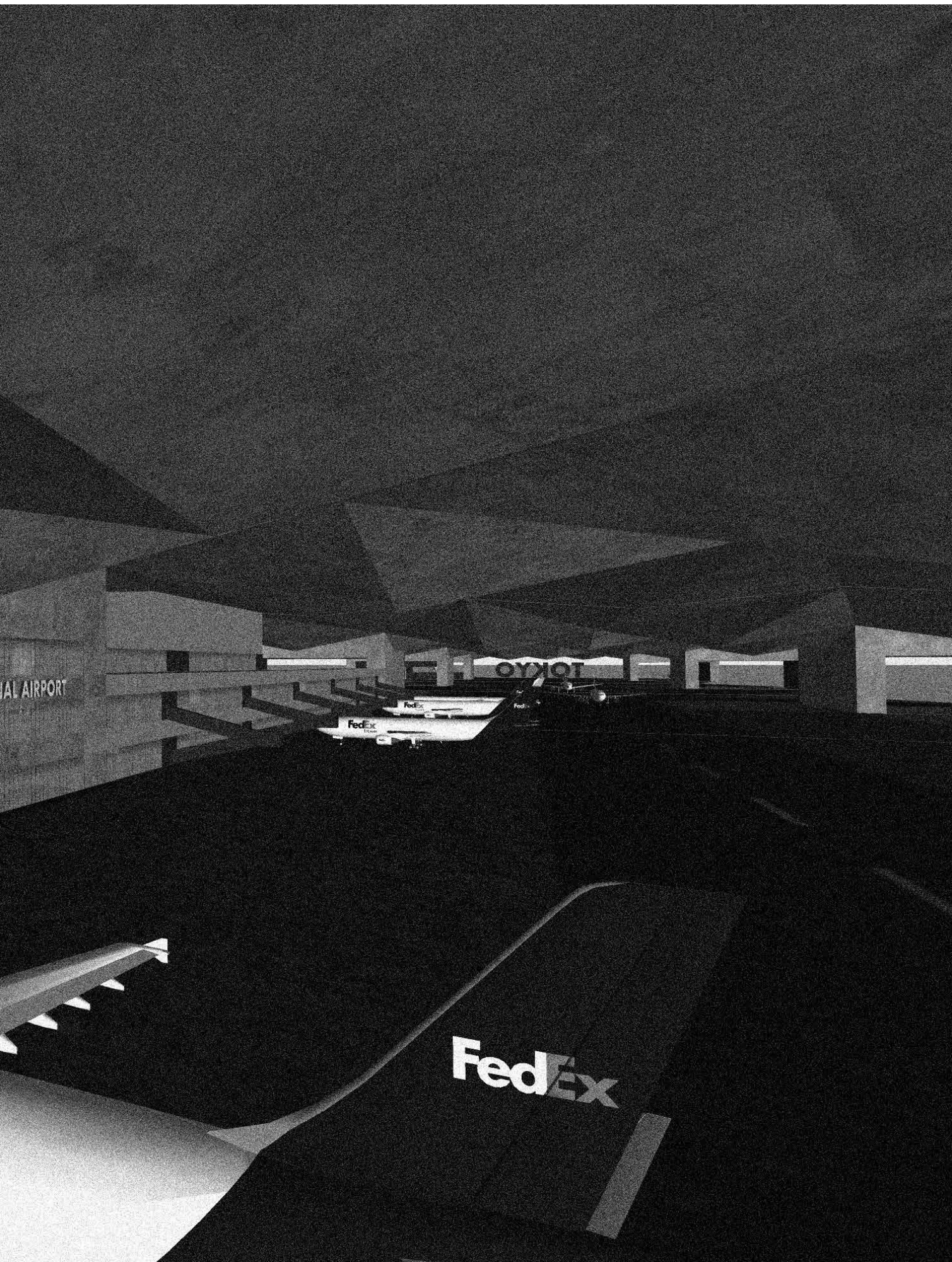


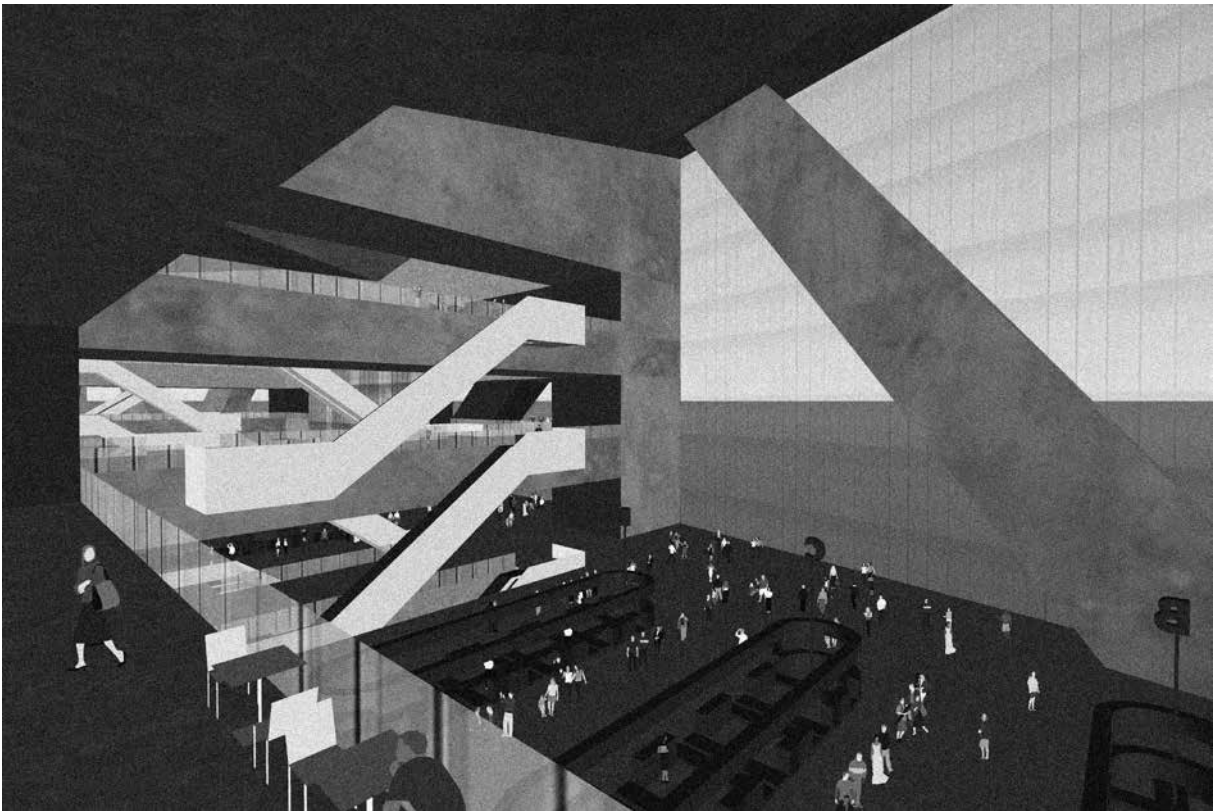
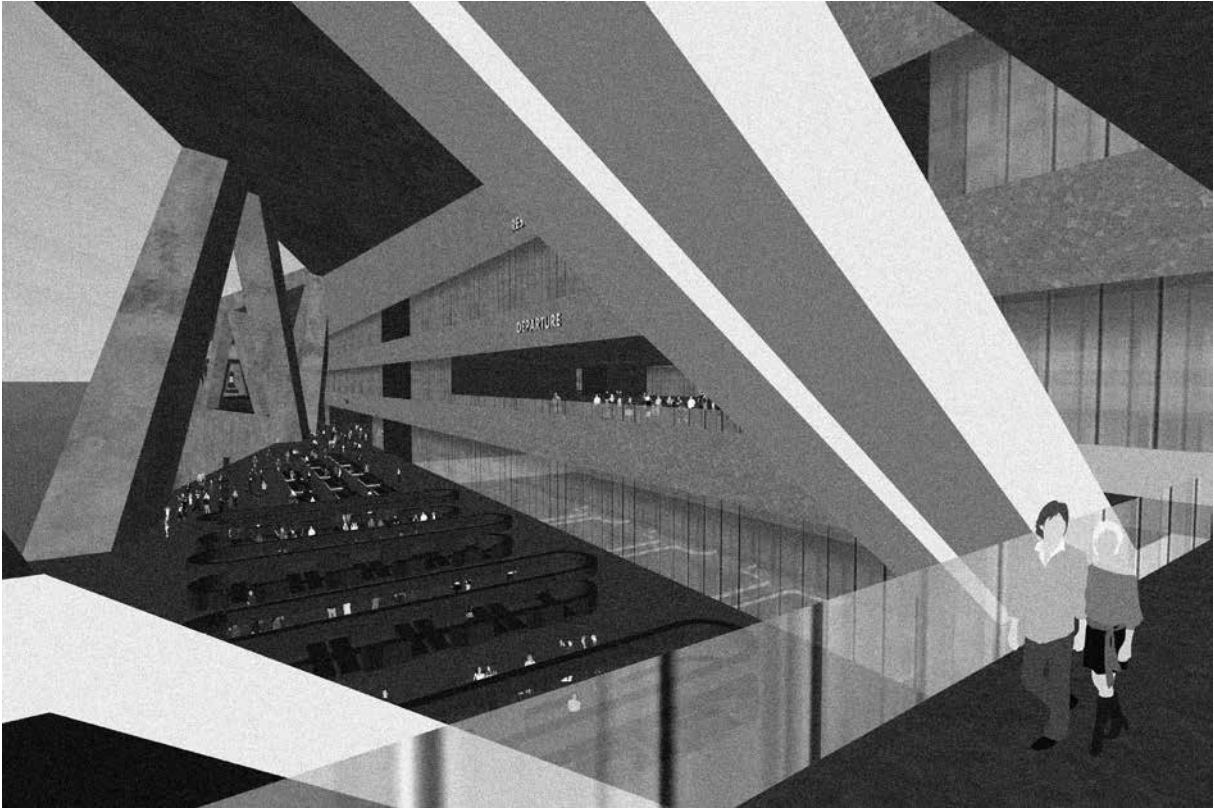


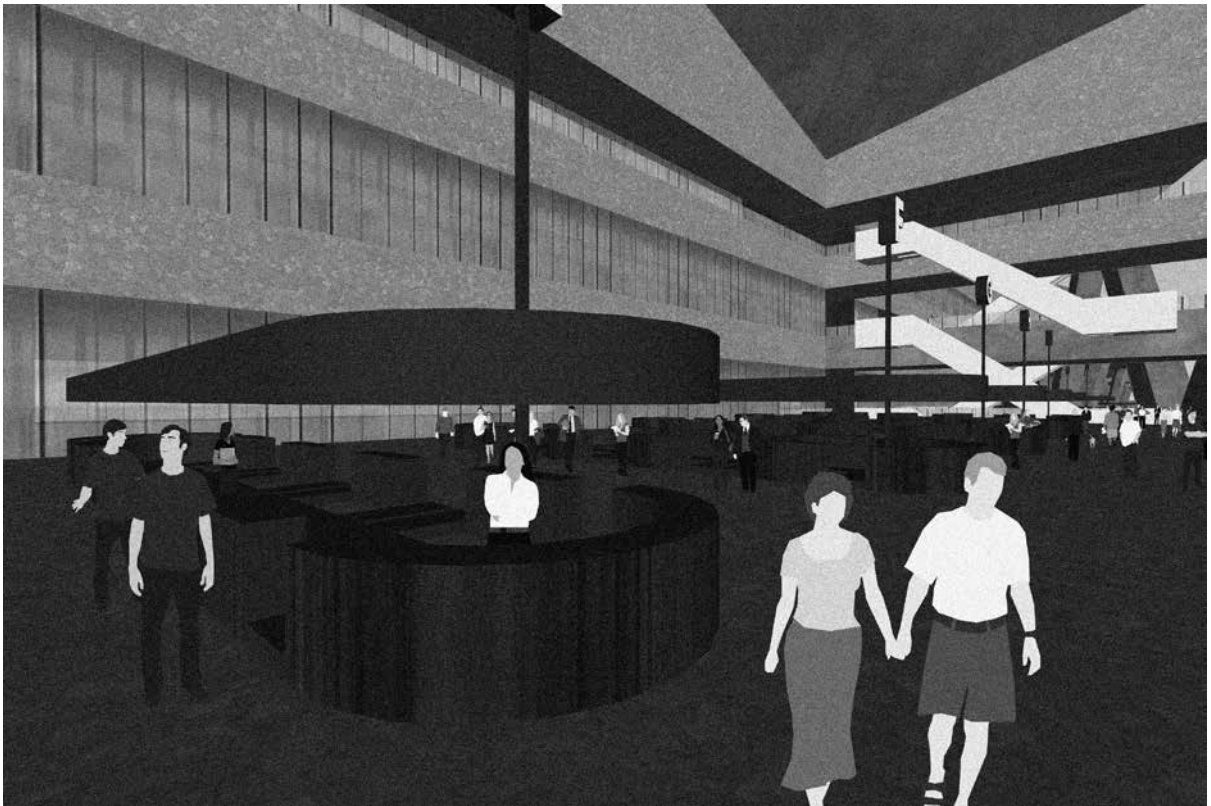












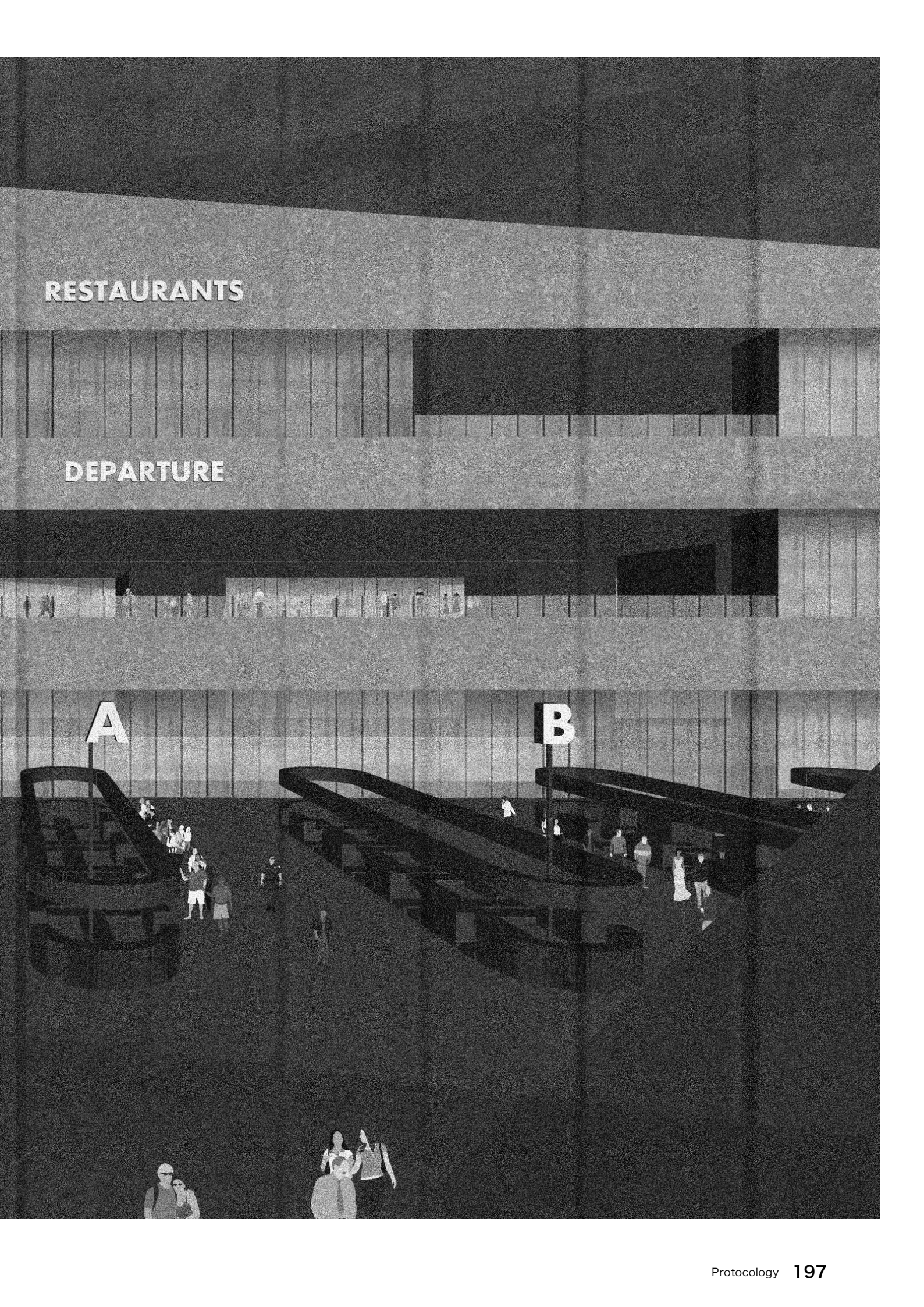


**RESTAURANTS**

**DEPARTURE**

**A**

**B**









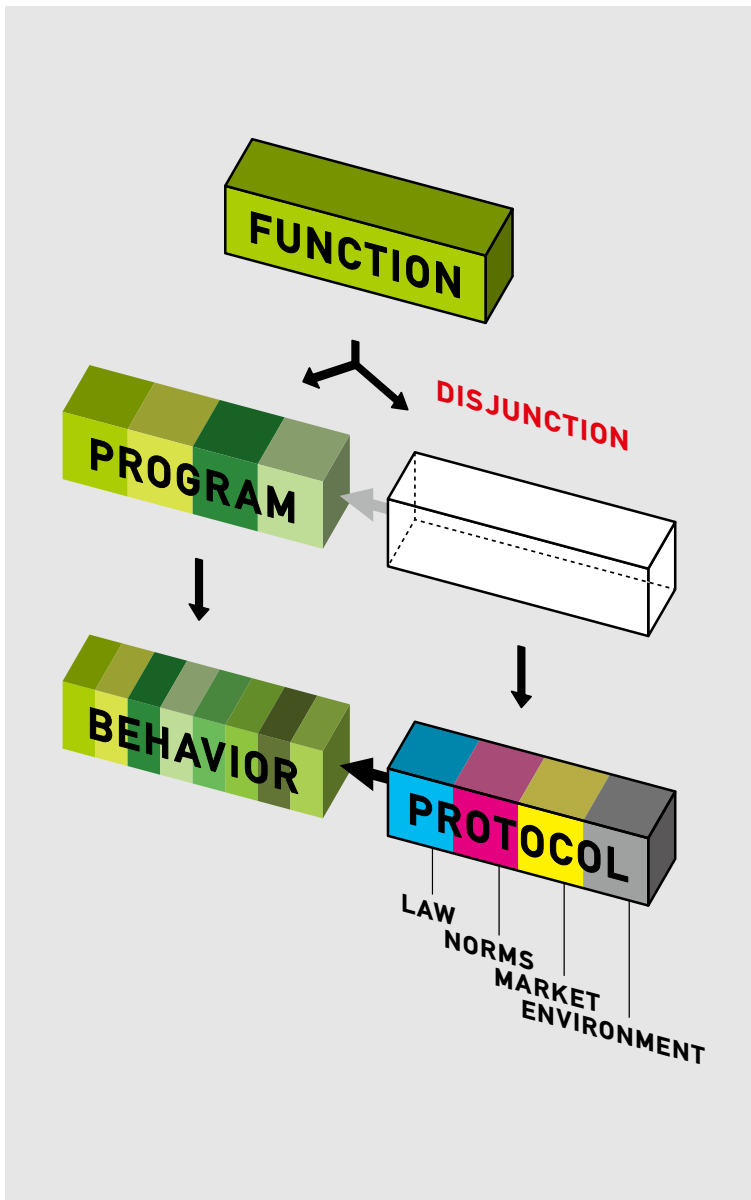


>>第五章

<まとめと展望>

<まとめ>

第一章で述べたプロトコルの定義と、プロトコルに至る背景を図式化すると概ね以下のように表現できるだろう (■1)。

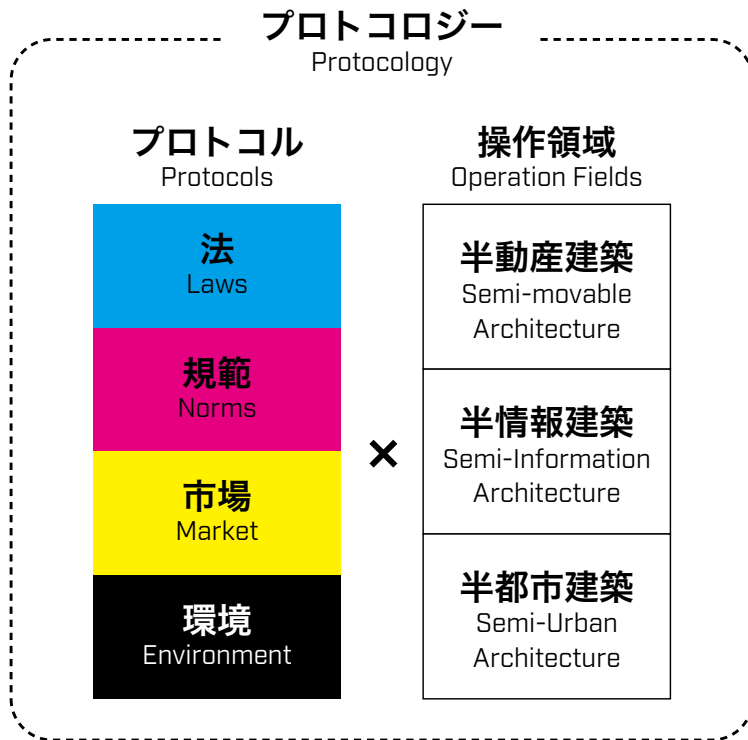


■1

プロトコルに至る背景



機能と形態が一对一对応をしていた機能主義の時代から、  
 チュミらのプログラム論による「断絶」を経て、プロトコル  
 (「法」、「規範」、「市場」、「環境」) が召喚され、他方で機能が  
 細分化を繰り返して辿り着いたビヘイヴィアを刺激するとい  
 うのが筆者の見立てである。また、第三章までの論述は、  
 以下のチャートのような階層構造に整理できる (■2)。

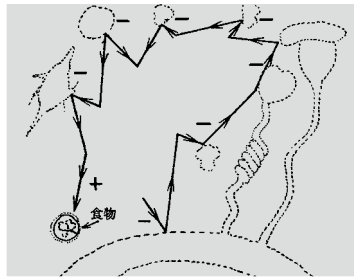
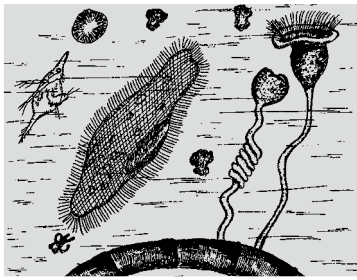


■2

プロトコルとプロトコロジー

設計する際には「法」、「規範」、「市場」、「環境」の4つの規制力のいずれかを他に対し卓越させるが、それら4つの規制力を統合する概念が「プロトコル」である。そしてそのプロトコルの効用を最大化する操作領域として「半動産建築」「半都市建築」「半情報建築」を挙げ、両者の掛け合わせがプロトコロジー (プロトコル学) であるとした。第四章で取り上げた「羽田E滑走路高層化計画」は、東京の人口密度と潜在的容積率という巨大なプロトコルと、半都市建築という操作領域を掛け合わせており、プロトコロジーを用いたデザインの一例である。





### ■ 3

ゾウリムシの環世界

『生物から見た世界』より

<プロトコル空間としての環世界>

ドイツの生物学者ヤーコプ・フォン・ユークスキュル (★1) は、「環世界 (Umwelt)」という概念を提唱した。あらゆる動物はその種特有の主観的な知覚世界を生きていると指摘して、客観的で普遍的な「環境 (Umgebun)」と区別したのだ (■3)。環世界には、異なる知覚世界を生きる他の生物への理解を深めるヒントがある。たとえば、マダニが「木の上で人間を待ち伏せて飛び降り血を吸う」という表現は人間の立場から勝手に擬人化したマダニ像であって、実際には、マダニには視覚が無く「臭いがしたので手を離し」「皮膚の温度を感じたので血を吸う」だけだ。プロトコルは、もともと異種間の交信を可能にする公式のことであるから、原義から言えば「環世界」より上位の概念、ユークスキュルの言う「環境」に近く、「環境」=プロトコル的、「環世界」=ビヘイヴィア的と考える人もいるかもしれない。実際、ユークスキュルの著作の紹介者である日高敏隆 (★2) は「木こりが木を見るのと、女の子が木を見るのでは、同じ木を見ても見え方が違う」という具合で環世界を個別別の「知識経験依存」、つまりビヘイヴィア側へと拡張している。しかしユークスキュル本人が言うように、我々人間もまた環世界のひとつを生きているに過ぎず、「環境」に辿り着くことはできないのであって、つまり我々が現実社会で扱うことのできるプロトコルもまた「環境」そのものではない。これまで見てきたように、選べるプロトコルの数だけ、異なる世界があり、その世界に適



した建築がある。環世界はプロトコル側へも拡張可能なのである。折り重なる「環世界」としての「建築」の集積こそが豊かな社会そのものだと信じ今後もプロトコロジーを用いた設計活動を積み重ねたい。

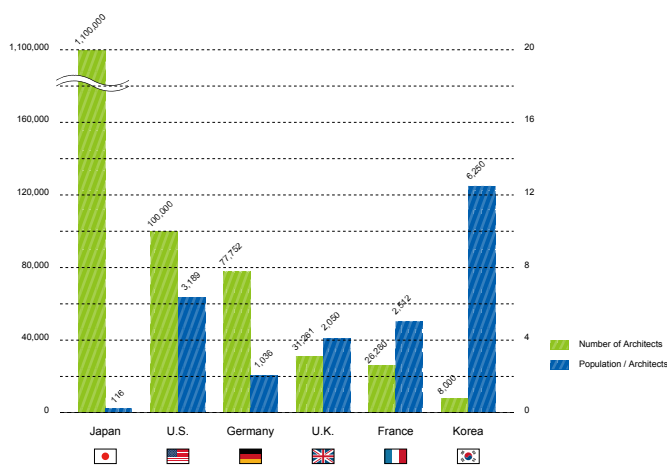
#### <建築の民主化の実験場としての日本>

最後に、私自身の設計活動の拠り所であることを越え、プロトコロジーを設計手法として活用することの意義について述べ、本論のまとめとしたい。最初に述べたように、私は、プロトコロジーを民主的な建築の実現のための手段と捉えている。規制力に過剰に反応することで、作品主義的で英雄的な建築とも、単なる街場の建物群とも異なる第三の道が見えてくるからである。日本は戦後、シャープ勧告（★3）による税制の転換などを経て、異様なまでのマイホーム幻想に塗られた「戸建て住宅の国」になった。当然のことながら、その設計を担う建築士の数も増え、今では合計110万人、約100人に一人、建築士を世界最高密度で抱える国になった。人口半分の先進国フランスでは、建築家の数は3万人にすぎず、およそ2000人に一人しかいないのであるから、その役割は本質的に異なると言っても良い。（■4）

#### ■4

各国の建築家の数の比較

筆者作成







この国の建築家は、専制的な政治の扇動者ではなく、富を集約する法人の付加価値を高める錬金術師でもなく、市井の人々の町医者になるよう制度設計されているのだ。このローカルな制度設計と、建築家という西洋由来の概念との軋轢が、プロトコロジーの駆動力になる。建築の民主化が実現すれば、それは日本の建築家によって成されるはずだと私は信じている。しかし一方で、現代社会の管理者は王のようなわかりやすい存在ではなくなっており、何に管理され、どんな自由を奪われており、どうやって民主化を達成すべきか、日に日に見えなくなっているのも事実である。より高度に潜在したビッグ・ブラザー（ジョージ・オーウェル『1984年』（★4））を白日の下に晒すことで、我々は自由の第一歩を踏み出すことが出来る。私はそれがプロトコロジーの使命であり、可能性だと考えている。

#### ★1

ヤーコプ・フォン・ユークスキュル (Jakob Johann Baron von Uexküll, 1864- 1944) はゲオルク・クリサート (Georg Kriszat) と共に『生物から見た世界 (1973)』を書き、「環世界」という概念を提唱した。哲学者トーマス・ネーゲルの『「コウモリであるとはどのようなことか」 (英: What is it like to be a bat?) (1974)』とともに、生物の主観的経験が科学的な客観性の中には還元することができないと問うた著述として広く知られる

#### ★2

日高敏隆 (Toshitaka Hidaka 1930-) は日本の動物行動学者。京都大学名誉教授。この分野の草分けとして知られ、自著のほか、コンラート・ローレンツの『動物行動学 (1977)』やリチャード・ドーキンスの『利己的な遺伝子 (1980)』など海外の著作を多く翻訳した

#### ★3

正式名称はシャープ使節団日本税制報告書 (英: Report on Japanese Taxation by the Shoup Mission)。GHQの要請によって1949年(昭和24年)に結成された、カール・シャープによる日本の租税に関する報告書である。富の集中を防ぎ財閥の形成を阻害するため贈与税、相続税の引き上げ、長者番付の導入などを勧告し、戦後の税制の基礎をつくったとされる。小さな家の乱立はこの税制によるところが大きい



い

★4

ジョージ・オーウェル『1984年』(1949) 全体主義国家によって分割統治された近未来世界の恐怖を描いている。作中の設定はどれも秀逸で、たとえば登場する架空の言語「ニュースピーク」は、英語をもとに、しかし思考を制限するために語彙を極端に減らした言語である。動詞や名詞の不規則な変化は禁止され、「bad」は「ungood」で代用される。略語が多用され語源を考える必要はなくなる。freeから「自由」という意味ははぎ取られ、「ない」という意味だけが残される。自由の必要性を訴えたいとき「自由」という言葉がなければそれを思考することさえできないようになるからだ

## 参考文献一覧

- 『色彩について』(1997) ルードウィヒ ウィトゲンシュタイン (著)、  
中村 昇 (訳)、瀬嶋 貞徳 (訳)
- 『CODE インターネットの合法・違法・プライバシー』(2001) ロー  
レンス・レッシング (著)、山形 浩生 (訳)、柏木 亮二 (訳)
- 『コモンズ』(2003) ローレンス・レッシング (著)、山形 浩生 (訳)
- 『Free Culture』(2004) ローレンス・レッシング (著)、山形 浩生 (訳)、  
守岡 桜 (訳)
- 『CODE Version 2』(2007) ローレンス・レッシング (著)、  
山形 浩生 (訳)
- 『REMIX ハイブリッド経済で栄える文化と商業のあり方』ローレンス・  
レッシング (著)、山形 浩生 (訳)
- 『著作権とは何か—文化と創造のゆくえ』(2005) 福井 健策 (著)
- 『「所有権」の誕生』(2001) 加藤 雅信
- 『生物から見た世界』(2005) ユクスキュル (著)、クリサート (著)、  
日高 敏隆 (訳)、羽田 節子 (訳)
- 『1984年』(2009、英:"1984"、1949) ジョージ・オーウェル (著)、  
高橋和久 (訳)
- 『建築と断絶』(1996) ベルナル チュミ (著)、Bernard Tschumi (原  
著)、山形 浩生 (翻訳)
- 『錯乱のニューヨーク』レム コールハース (著)、Rem Koolhaas (原著)、  
鈴木 圭介 (翻訳)
- 『S,M,L,XL+: 現代都市をめぐるエッセイ』(2015) レム コールハース  
(著)、Rem Koolhaas (原著)、太田 佳代子 (翻訳)、渡辺 佐智江 (翻訳)
- 『原っぱと遊園地—建築にとってその場の質とは何か』(2004) 青木淳
- 『原っぱと遊園地〈2〉見えの行き来から生まれるリアリティ』(2008)  
青木淳
- 『建築の多様性と対立性』R・ヴェンチャーリ (著)、伊藤 公文 (翻訳)
- 『環境としての建築: 建築デザインと環境技術』レイナー バンハム  
(著)、Reyner Banham (原著)、堀江 悟郎 (翻訳)
- 『空間・時間・建築』(新版2009) ジークフリード ギーディオン (著)、  
Sigfried Giedion (著)、太田 實 (翻訳)
- 『第一機械時代の理論とデザイン』(1976) レイナー・バンハム (著)、  
石原 達二 (翻訳)、増成 隆士 (翻訳)
- 『かくれた次元』(1970) エドワード・T・ホール (著)、日高 敏隆 (翻

訳)、佐藤 信行 (翻訳)

『プロトコル：脱中心化以後のコントロールはいかに作動するのか』

(2017) アレクサンダー・R. ギャロウェイ (著)、Alexander R.

Galloway (原著)、北野 圭介 (翻訳)

## 業績一覧

### 【1】著書

#### 単著

- ・「現代建築家コンセプトシリーズ 13 ビヘイヴィアとプロトコル」, 単著, LIXIL 出版, pp.1-144, 2012年9月
- ・「EX-CONTAINER」, 単著, グラフィック社, pp.1-128, 2008年10月
- ・「超合法建築図鑑」, 単著, 彰国社, pp.1-165, 2006年5月

#### 共著ほか

- ・「NA 建築家シリーズ 06 平田晃久+吉村靖孝」, 共著 (共著者: 吉村靖孝, 平田晃久, 編者: 日経アーキテクチュア), 日経 BP マーケティング, pp.1-280 (全ページ共同執筆), 2012年10月
- ・「建築家の読書術」, 共著 (共著者: 吉村靖孝, 平田晃久, 藤本壮介ほか2名), TOTO 出版, pp.178-222 (トレーニング, ミチクサ, ケンチク), pp.297-315 (座談会/新しい『私』性), 2010年10月
- ・「アーキテクチャとクラウド」, 共著 (共著者: 吉村靖孝, 原広司, 池上高志ほか6名), ミルグラフ, pp.24-39 (第2章: 吉村靖孝×塚本由晴), 2010年10月
- ・「オランダのデザイン 跳躍するコンセプチュアルな思考と手法 [建築・プロダクト編]」, 共著 (共著者: 吉村靖孝, 木戸昌史, 長坂常ほか5名), パイインターナショナル, pp.194-195 (ダイバーシティとデンシティのニュータウン), 2010年5月
- ・「卒業設計で考えたこと。そして今2」, 共著 (共著者: 吉村靖孝, 佐々木睦朗, 高松伸ほか6名, 編者: 五十嵐太郎), 彰国社, pp.163-181 (AC/DC), 2006年6月
- ・「現代住居コンセプト」, 共著 (共著者: 吉村靖孝, 南泰裕, 今村創平, 山本想太郎), INAX 出版, pp.26-27 (第一章 003: コード/制度/法規 その傾向と対策), 2005年10月
- ・「Tokyo from Vancouver」, 共著 (共著者: 吉村靖孝, George Wagner), University of British Columbia School of Architecture (カナダ), pp.164-179 (DE-CODE: TOKYO), 2005年1月
- ・「建築 MAP 東京・2」, 共著 (共著者: 吉村靖孝, 五十嵐太郎, 乾久美子ほか1名), TOTO 出版, pp.1-359 (全ページ共同執筆), 2003年8月
- ・「MVRDV 式: まつだい雪国農耕文化村センター」, 共著 (共著者: 吉村靖孝, MVRDV), 彰国社, pp.1-151 (全ページ共同執筆), 2003年8月

・「この先の建築」, 共著 (編者: 吉村靖孝, 小巻哲, ギャラリー・間), TOTO 出版, pp.10-63 (第一章: 原広司, 妹島和世, 塚本由晴, 吉村靖孝), 2003 年 7 月

## 【2】論文

- ・「Takeyama: Superurban」, 共著 (共著者: 吉村靖孝, 竹山実, 塚本由晴ほか1名), Domus・953号 (Domus Sp.A, イタリア), pp.40-47, 2011年12月 (英語)
- ・「被災地を非災地へ」, 単著, JA・82号 (新建築社), pp.52-53, 2011年6月
- ・「Nowhere but Sajima」, 査読付き, 単著, 建築雑誌「作品選集」・126巻・1616号 (日本建築学会), pp.32-33, 2011年3月
- ・「解説: グーグル・ユニクロ・ヤフオク時代の建築」, 単著, 新建築・2010年3月号 (新建築社), pp.129, 2010年3月
- ・「東京に住宅地はあるか?」, 単著, 住宅情報 都心に住む・2009年1月号 (SUUMO 不動産), pp.18-19, 2008年12月
- ・「『EX-CONTAINER』著者解題」, 単著, 10+1 website (INAX 出版), 2009年1月
- ・「Learn 型」から「Study 型」へ -N Project」, 単著, JA・71号 (新建築社), pp.68-75, 2008年9月
- ・「Fitting in -Small Sites in Urban Japan」, 共著 (共著者: Thomas, Daniell, 吉村靖孝ほか1名), After the Crash: Architecture in Post-Bubble Japan (Princeton Architectural Press, アメリカ), pp.162-169, 2008年9月 (英語)
- ・「うつろう事務所生活:MVRDV」, 単著, 建築雑誌・123巻・1575号 (日本建築学会), p.21, 2008年4月
- ・「Diversity through Mass-Production」, 共著 (共著者: 吉村靖孝, George Wagner), Tokyo from Vancouver 2 (University of British Columbia, カナダ), pp.132-143, 2008年3月 (英語)
- ・「超合法建築景 第14回『ハイブリッド』」, 単著, Tokion・No.66 (INFAS パブリケーションズ), p.135, 2007年12月
- ・「超合法建築景 第13回『店舗村』」, 単著, Tokion・No.65 (INFAS パブリケーションズ), p.114, 2007年11月
- ・「超合法建築景 第12回『長靴通り』」, 単著, Tokion・No.64 (INFAS パブリケーションズ), p.114, 2007年10月
- ・「超合法建築景 第11回『開放廊下』」, 単著, Tokion・No.63 (INFAS パブリケーションズ), p.134, 2007年9月, 2007年9月
- ・「超合法建築景 第10回『バブル・ウィンドウ』」, 単著, Tokion・No.62 (INFAS パブリケーションズ), p.120, 2007年8月
- ・「超合法建築景 第9回『入出窓』」, 単著, Tokion・No.61 (INFAS

- パブリケーションズ), p.118, 2007年5月, 2007年6月
- ・「超合法建築景 第8回『東京の水際環境』」, 単著, Tokion・No.60 (INFAS パブリケーションズ), p.126, 2007年5月
  - ・「超合法建築景 第7回『複眼バルコニー』」, 単著, Tokion・No.59 (INFAS パブリケーションズ), p.130, 2007年4月
  - ・「超合法建築景 第6回『避難スライダー』」, 単著, Tokion・No.58 (INFAS パブリケーションズ), p.99, 2007年3月
  - ・「超合法建築景 第5回『ロード・パーク』」, 単著, Tokion・No.57 (INFAS パブリケーションズ), p.107, 2007年2月
  - ・「超合法建築景 第4回『金字筒』」, 単著, Tokion・No.56 (INFAS パブリケーションズ), p.119, 2006年12月
  - ・「超合法建築景 第3回『窓看板』」, 単著, Tokion・No.55 (INFAS パブリケーションズ), p.98, 2006年11月
  - ・「超合法建築景 第2回『渋谷階段』」, 単著, Tokion・No.54 (INFAS パブリケーションズ), p.133, 2006年10月
  - ・「超合法建築景 第1回『発射台ホテル』」, 単著, Tokion・No.53 (INFAS パブリケーションズ), p.76, 2006年9月
  - ・「となりの超高層」, 単著, 10+1・No.43 (INAX 出版), pp.120-125, 2006年7月
  - ・「なつかしくもあたらしい敷地」, 単著, 10+1・No.46 (INAX 出版), pp.52-54, 2006年7月
  - ・「妹島和世《梅林の家》厚い壁」, 単著, 10+1・No.35 (INAX 出版), pp.88-91, 2004年6月
  - ・「現代オランダ建築のハードコア オランダ・その可能性の中心をめぐって」, 共著 (共著者: 吉村靖孝, 西沢立衛, 槻橋修), 建築文化・No.671 (彰国社), pp.110-115, 2004年4月
  - ・「コード」, 単著, 建築文化・No.669 (彰国社), pp.56-59, 2004年2月
  - ・「20世紀建築モデル・カタログ2 トライアングル・モデル」, 単著, 建築文化・No.668 (彰国社), p.40, 2003年12月
  - ・「動物化する建築」, 単著, 10+1・No.32 (INAX 出版), pp.150-153, 2003年9月
  - ・「ART HEAD QUARTERS ARCHITECTURE 妻有トリエンナーレに完成したMVRDVの建築」, 単著, 美術手帖・55巻・836号 (美術出版社), pp.186-189, 2003年7月
  - ・「日本・都市・農建築×MVRDV:ピンポイント・アーバニズムの実験場」, 単著, 建築雑誌・118巻・1506号 (日本建築学会), pp.31-33, 2003年6月
  - ・「特集:U-35のポテンシャル」, 単著, 建築文化・No.666号 (彰国社), pp.32-33, 2003年6月



- ・「東京デ・コード計画」, 共著 (共著者:吉村靖孝, 川邊真代, 吉村英孝), 10+1・No.30 (INAX 出版), pp.148-155, 2003年1月
- ・「古谷誠章論 by 吉村靖孝」, 単著, GA HOUSES・No.73 (エーディーエー・エディタ・トーキョー), pp.194-199, 2003年1月
- ・「ポジティブ・コラボレーション/MVRDVの方法論」, 単著, 建築文化・No.659 (彰国社), pp.45-46, 2002年4月
- ・「ハノーヴァー万博オランダ館」, 単著, 建築文化・No.649 (彰国社), pp.29-32, 2000年12月, 2000年12月
- ・「アトリエ・ファン・リースハウト『良い、悪い、醜い』」, 単著, 10+1・No.22 (INAX 出版), pp.94-95, 2000年12月
- ・「建築 2001 40 のナビゲーション 05 NL アーキテクト」, 単著, 10+1・No.22 (INAX 出版), pp.92-93, 2000年11月
- ・「記念碑の事情 モニュメントのモニュメントと擬モニュメント」, 単著, 10+1・No.16 (INAX 出版), pp.34-36, 1999年3月
- ・「『第三機械時代』のアルケミー 白・銀・透明をめぐるサブ・クロニクル」, 単著, 10+1・No.14 (INAX 出版), pp.242-248, 1998年8月
- ・「オープンパートナーシップという気分について」, 単著, 群居・45号 (群居刊行委員会), pp.75-81, 1998年5月

### 【3】 翻訳

- 「ファンクション・ミキサー」, 単訳 (著者:MVRDV), 10+1・No.25 (INAX 出版), pp.169-176
- 「ピッグ・シティ」, 単訳 (著者:MVRDV), 10+1・No.24 (INAX 出版), pp.185-192
- 「パイン・シティーオスロ・トリエンナーレ 2000」, 単訳 (著者:MVRDV), 10+1・No.23 (INAX 出版), pp.173-180
- 「フライト・フォーラム」, 単訳 (著者:Winy Maas) 10+1・No.22 (INAX 出版), pp.181-188
- 「ワン・アーキテクチャー」, 単訳 (著者:Dean Penelope) 10+1・No.22 (INAX 出版), pp.88-91
- 「ロッテルダムはもう一度ポートシティに戻れるだろうか?」, 単訳 (著者:Winy Maas) 10+1・No.21 (INAX 出版), pp.169-176
- 「BRABANT CITY 2050」, 単訳 (著者:MVRDV and Winy Maas) 10+1・No.20 (INAX 出版), pp.181-188
- 「KM3/3D city MVRDV&Ballast Nedam 1999」, 単訳 (著者:Winy Maas) 10+1・No.19 (INAX 出版), pp.173-180

### [3] 国際会議

- ・Japon, l'archipel de la maison 国際シンポジウム Cité de l'architecture et du patrimoine, パリ, 2015年6月 (招待講演)

・「LESS QUANTITY, MORE QUALITY」国際シンポジウム，ウィーン，  
2015年11月（招待講演）

・「Construction Excellence: Prefab, Precast & Modular Buildings」  
国際シンポジウム，シンガポール，2015年11月（招待講演）

・「Construction Excellence: Prefab, Precast & Modular Buildings」  
国際シンポジウム，クアラルンプール，2014年11月（招待講演）

#### 【4】 その他

・ソフトウェア「HouseMaker」iOS アプリ，2014年9月

#### 【5】 表彰，受賞

・日本建築設計学会賞大賞（作品「フクマスベース」に対して）2018  
年

・日本建築学会作品選奨（作品「フクマスベース」に対して）2018年

・水戸市民館設計者選定プロポーザル5選2016年

・豊田市駅前再開発事業設計者選定プロポーザル4選2016年

・WADA賞（作品「フクマスベース」に対して）2016年1月

・AP賞（作品「Window House」に対して）2015年1月

・日本建築学会作品選奨（作品「中川政七商店新社屋」に対して）  
2014年

・第25回日経ニューオフィス賞 ニューオフィス推進賞（作品「TBWA  
／HAKUHODO」に対して）2012年8月

・JCDデザインアワード2011大賞（作品「レッドライト・ヨコハマ」  
に対して）2011年11月

・グッドデザイン賞（作品「EDV?01」に対して）2011年10月

・日本建築士会連合会賞奨励賞（作品「ベイサイドマリーナホテル横浜」  
に対して）2011年10月

・日本建築学会作品選奨（作品「Nowhere but Sajima」に対して）  
2011年4月

・アジアデザイン賞 メリット賞（作品「中川政七商店新社屋」に対して）  
2010年12月

・アジアデザイン賞 銅賞（作品「Nowhere but Sajima」に対して）  
2010年12月

・アジアデザイン賞 銅賞（作品「ベイサイドマリーナホテル横浜」に  
対して）2010年12月

・JCDデザインアワード2010銀賞（作品「ベイサイドマリーナホテ  
ル横浜」に対して）2010年11月

・JCDデザインアワード2010銀賞（作品「中川政七商店新社屋」に  
対して）2010年11月

・神奈川建築コンクール 優秀賞（作品「Nowhere but Sajima」に対して）  
2010年10月

- ・グッドデザイン賞 特別賞 (作品「中川政七商店新社屋」に対して)  
2010年10月
- ・第23回日経ニューオフィス賞 近畿ニューオフィス推進賞 (作品「中川政七商店新社屋」に対して) 2010年8月
- ・平成22年度日事連建築賞 優秀賞 (作品「軒の家」に対して) 2010年8月
- ・平成22年住宅建築賞 金賞 (作品「Nowhere but Sajima」に対して)  
2010年5月
- ・香港『Perspective』誌 40 under 40 選出, 2010年3月
- ・アジアデザイン賞 金賞 (作品「Nowhere but Hayama」に対して)  
2009年12月
- ・神奈川建築コンクール 優秀賞 (作品「軒の家」に対して) 2009年9月
- ・稲門建築会特別功労賞, 2007年5月
- ・第22回吉岡賞 (作品「ドリフト」に対して) 2006年4月
- ・JCD デザインアワード 2005 新人賞 (作品「亀や龍宮殿」に対して)  
2005年12月
- ・グッドデザイン賞 (作品「フィズ」に対して) 2005年10月
- ・建築知識創刊40周年記念・バリアフリー住宅設計コンペティション  
1999入賞 1999年3月
- ・佐藤武夫賞 (早稲田大学大学院修士設計最優秀賞) 1997年3月

#### 【6】マスコミによる報道等

- 「世界一受けたい授業」(日本テレビ系、2008年9月)
- 「タモリ倶楽部」(テレビ朝日系、2010年8月)
- 「違法コンテナ倉庫」についてのコメント掲載(毎日新聞、2017年7月)

#### 【7】展覧会

- ・「日本、家の列島」展(東京)に出展(2017年5月)
- ・「MAKE ALTERNATIVE SPACE」展(東京)に出展(2016年5月)
- ・「Japon, l'archipel de la maison」(パリ)に出展(2016年5月)
- ・「建築の新しい楽しさ」展(2016年1月)
- ・「ラーニング・アーキテクチャー」展(東京)に出展(2015年11月)
- ・東京ガス(2015年11月)
- ・「紙のかたち、まるめる、かさねる、ひっぱる」展(東京)に出展(2015年9月)
- ・「MAKE HOUSE」展(東京)に出展(2014年9月)
- ・KENCHIKU | ARCHITECTURE 展(フランス)出展・講演(2013年10～11月)
- ・第13回ヴェネチア国際建築ビエンナーレ(イタリア)公式イベント

- 「Traces of Centuries & Future Steps」に出展 (2012年8～11月)
- ・Renaissance du Japon apr?s le 11 Mars(フランス)に出展 (2012年6月～7月)
  - ・「3.11後の建築・都市 建築家たちは地域をどう再生しようとしているのか？」(フランス)に出展 (2012年3月～5月)
  - ・3.11東日本大震災の直後、建築家はどうか対応したか(フランス, 韓国, アルメニア, イタリアなど)に出展 (2012年3月～)
  - ・KENCHIKU | ARCHITECTURE 展(フランス)出展・講演 (2011年10～11月)
  - ・Container Architektur 展(ドイツ)出展 (2011年5月)
  - ・Little Tokyo Design Week 展(アメリカ)に出展 (2011年5月)
  - ・RESET - 11.03.11#New Paradigms(イタリア)に出展(2012年3月)
  - ・こころのなかの建築展(東京)に出展 (2012年8月)
  - ・小さな素材から世界を刻む展(東京)に出展 (2012年8月)
  - ・国際見本市インテリアライフスタイル 石巻工房ブースにて展示 (2012年6月)
  - ・東京シェアシティ展・復興へのビジョンに出展 (2011年9月)
  - ・JIA 主催リトアニア日本建築展 EAST-EAST IIIに出展 (2011年9月)
  - ・小さな建築のスタディ展(東京)に出展 (2011年8月)
  - ・Emerging Project 2011 展(東京)に出展 (2011年4月)
  - ・CCハウス展(東京)主催 (2010年11月)
  - ・City 2.0 展(東京)に出展 (2010年9月)
  - ・Architects from Hyper Village 展(東京)に出展 (2010年8月)
  - ・建築家の読書術展(ギャラリー・間)に出展 (2010年1月)
  - ・Architecture After 1995 展(大阪)に出展 (2009年10月)
  - ・Architect Tokyo 2009「生成の世代」展(東京)に出展(2009年8月)
  - ・"カラー版"超合法建築図鑑展(東京)主催 (2008年10月)
  - ・Archlab 展(フランス)に出展 (2006年10月)
  - ・東京デザイナーズウィーク 2005 展(東京)に出展 (2005年11月)
  - ・京都デザイナーズウィーク展(京都)に出展 (2005年10月)
  - ・東京デザイナーズウィーク 2004 展(東京)に出展 (2004年10月)
  - ・の先の建築展(ギャラリー・間)に出展 (2002年9月)
  - ・30×100『マテリアルの使い方』展に出展 (2001年9月)

#### 【8】雑誌掲載、ウェブマガジン掲載

##### 【サイエンナガヤ】

掲載誌① 日本経済新聞, 2016年2月24日(日本経済新聞社), pp.35,

掲載誌② 建築ジャーナル, 2016年5月号(建築ジャーナル), pp.35

掲載誌③ 新建築, 2017年8月号(新建築社), pp.144-149

掲載ウェブサイト① architecturephoto.net

【フクマス・ベース】

受賞① WADA 賞 2016 (Wonders in Annual Development and Architecture Award)

掲載誌① 日刊木材新聞, 2015年11月13日号(日刊木材新聞社), pp.12

掲載誌② GA JAPAN, 140号, 2016年5-6月号(ADA エディタトールキョー), pp.38-57

掲載誌③ 新建築, 2016年5月号(新建築社), pp.62-71

掲載誌④ 日経アーキテクチュア, 2016年5月12日号(日経BP), pp.56-63

掲載ウェブサイト① asahiglassplaza.net

掲載ウェブサイト② japanarchitects.com

掲載ウェブサイト③ archdaily.com

掲載ウェブサイト④ designboom.com

掲載ウェブサイト⑤ disup.com

掲載ウェブサイト⑥ archello.com

掲載ウェブサイト⑦ aeccafe.com

掲載ウェブサイト⑧ architizer.com

掲載ウェブサイト⑨ ILikeArchitecture.net

掲載ウェブサイト⑩ dezeen.com

掲載ウェブサイト⑪ thispaper.com

掲載ウェブサイト⑫ tectonicablog.com

掲載ウェブサイト⑬ goood.hk

掲載ウェブサイト⑭ architectonic.com

掲載ウェブサイト⑮ divisare.com

掲載ウェブサイト⑯ japandesign.ne.jp

【ラチスの家】

掲載誌① 住宅特集, 363号, 2016年7月号(新建築社), pp.12-20,

掲載ウェブサイト① architecturephoto.net

【窓の家】

受賞① 第一回 AP 賞 (ArchitecturePhoto Award), 2014

掲載誌① 新建築, 341号, 2014年9月号(新建築社), pp.38-4,

掲載誌② デイテール, 2014年夏季号(彰国社), pp.76-77, 2014年7月

掲載誌③ d+a,(domus, イスラエル) 2014年

掲載誌④ L'ARCHIPEL DE LA MAISON 家の列島, pp.352-365

掲載ウェブサイト① archllo.com

掲載ウェブサイト② baunetz.de

掲載ウェブサイト③ competitionline.com

掲載ウェブサイト④ goood.hk  
掲載ウェブサイト⑤ energieleben.at  
掲載ウェブサイト⑥ archilenta.ru  
掲載ウェブサイト⑦ architecturephoto.net  
掲載ウェブサイト⑧ arhinovosti.ru  
掲載ウェブサイト⑨ designboom.com  
掲載ウェブサイト⑩ dezeen.com  
掲載ウェブサイト⑪ triptod.com  
掲載ウェブサイト⑫ archdaily.com  
掲載ウェブサイト⑬ archilovers.com  
掲載ウェブサイト⑭ ilikearchitecture.net  
掲載ウェブサイト⑮ roomie.jp  
掲載ウェブサイト⑯ aeccafe.com  
掲載ウェブサイト⑰ penseimovis.com.br  
掲載ウェブサイト⑱ floornature.com  
掲載ウェブサイト⑲ architonic.com  
掲載ウェブサイト⑳ thispaper.com、…ほか多数

【中川政七商店旧社屋増築工事】

掲載誌①日経アーキテクチャ, 2012年1月25日号(日経BP), pp.48-49, 2012年1月

【TBWA / HAKUHODO】

受賞①第25回日経ニューオフィス賞 ニューオフィス推進賞(一般社団法人ニューオフィス推進協会), 2012年8月

掲載誌①新建築, 87巻・8号(新建築社), pp.144-150, 2012年6月

【ベイサイドマリーナホテル横浜】

受賞①日本建築士会連合会賞奨励賞(公益社団法人日本建築士会連合会), 2011年10月

受賞②アジアデザイン賞 銅賞(香港デザインセンター), 2010年12月

受賞③JCD デザインアワード 2010 銀賞(社団法人日本商環境設計家協会), 2010年11月

掲載誌①Arketipo・2011年9月号(Il Sole 24 Ore, イタリア), pp.96-107, 2011年10月

掲載誌②Mini Hotels (Instituto Monsa de Ediciones, スペイン), pp.62-73, 2011年9月

掲載誌③HOTEL RESORT(建築世界社, 韓国), pp.300-313, 2011年9月

掲載誌④DFUN(創藝傳媒股份有限公司, 台湾), pp.86-87, 2011年6月

掲載誌⑤建築世界・192号（建築世界社，韓国），pp.40-51，2011年5月

掲載誌⑥ Archicree・No.350（Societe d'Edition et de Presse・フランス），p.50，2011年2月

掲載誌⑦芸術収蔵+設計・3月号（芸術収蔵+設計，台湾），pp.178-181，2011年3月

掲載誌⑧ MARK・No.30（Mark Publishers，オランダ），pp.94-95，2011年3月

掲載誌⑨新建築・85巻・5号（新建築社），pp.129-136，2010年3月、…ほか7件

【エクسコンテナ・プロジェクト】

掲載誌①建築雑誌・2012年7月号（日本建築学会），pp.10-15，2012年7月、…ほか11件

【HOURAI】

掲載誌① Casa BRUTUS・146号（マガジンハウス），pp.160-163，2012年4月、…ほか2件

【EDV01】

受賞①グッドデザイン賞（公益財団法人日本デザイン振興会），2011年10月

掲載誌①日経アーキテクチュア，2011年1月25日号（日経BP社），p.14，2011年1月、…ほか1件

【レッドライト・ヨコハマ】

受賞①JCD デザインアワード 2011 大賞（社団法人日本商環境設計家協会），2011年11月

掲載誌①毎日新聞，2011年7月28日付・夕刊，2011年7月

掲載誌② MARK・No.30（Mark Publishers，オランダ），p.92，2011年11月

掲載誌③ Frame・No.78（Frame Publishers，オランダ），p.32，2011年11月、…ほか3件

【中川政七商店新社屋】

受賞①アジアデザイン賞 メリット賞（香港デザインセンター），2010年12月

受賞②JCD デザインアワード 2010 銀賞（社団法人日本商環境設計家協会），2010年11月

受賞③グッドデザイン賞 特別賞（公益財団法人日本デザイン振興会），2010年10月

受賞④第23回日経ニューオフィス賞 近畿ニューオフィス推進賞（社団法人ニューオフィス推進協会），2010年8月

掲載誌① ArchiWorld・No.189（Archiworld，韓国），pp.78-85，2011年3月

掲載誌② MARK・No.30 (Mark Publishers, オランダ), p.95,  
2011年3月

掲載誌③新建築・85巻・7号 (新建築社), pp.144-151, 2010年5月、  
…ほか8件

【Nowhere but Sajima】

受賞①日本建築学会作品選奨 (日本建築学会), 2011年4月

受賞②アジアデザイン賞 銀賞 (香港デザインセンター), 2010年12  
月

受賞③JCD デザインアワード 2010 銀賞 (社団法人日本商環境設計家  
協会), 2010年11月

受賞④神奈川県建築コンクール 優秀賞 (神奈川県ほか12市), 2010年  
11月

受賞⑤平成22年住宅建築賞 金賞 (社団法人東京建築士会), 2010年  
5月

掲載誌① Mark Cleary (Images Publishing Dist Ac, オーストラリア),  
pp.116-119, 2012年6月

掲載誌② Sublime (Gestalten・ドイツ), pp.51-53, 2011年11月

掲載誌③建築雑誌・126巻・1621号 (日本建築学会), p.103, 2011  
年8月

掲載誌④ MARU・No.114 (CA PRESS Publishing, 韓国), p.155,  
2012年9月

掲載誌⑤ cenTras・No.3 (Interjeras.LT, リトアニア), pp.20-23,  
2011年8月

掲載誌⑥ Be One Magazine・Vol45・No.4 (O.S. Printing House ,  
タイ), pp.132-135, 2011年6月

掲載誌⑦ Architektur・4-5月号 (Laser Verlag GmbH, オーストリア),  
pp.50-53, 2011年5月

掲載誌⑧ Arkitekten・113号 (Arkitektens Forlag, デンマーク), p.33,  
2011年5月

掲載誌⑨ Neo2・No.102 (Ipsium Planet, スペイン), p.72, 2011  
年4月

掲載誌⑩建築雑誌「作品選集」・126巻・1616号, (日本建築学会),  
pp.32-33, 2011年3月

掲載誌⑪ Design Today・Mar-12 (Living Media India, インド),  
pp.62-70, 2011年3月

掲載誌⑫ JA・76号 (新建築社), p48-49, 2010年12月

掲載誌⑬ D CASA・No.689 (La Repubblica, イタリア), pp.114-  
119, 2010年4月

掲載誌⑭ Mark・No.22 (Mark Publishers, オランダ), pp.46-47,  
2009年9月



掲載誌⑤新建築・84巻・11号（新建築社），pp.142-149，2009年10月、  
…ほか13件

【Nowhere but Hayama】

受賞①アジアデザイン賞 金賞（香港デザインセンター），2009年12月

掲載誌①Interiors+・2011年10月号（Perspective，香港），pp.40-45，2009年12月

掲載誌②新建築・84巻・5号（新建築社），pp.94-101，2009年4月、  
…ほか8件

【軒の家】

受賞①平成22年度日事連建築賞 優秀賞（社団法人日本建築士事務所協会連合会），2010年8月

受賞②神奈川建築コンクール優秀賞（神奈川県ほか12市），2009年9月

掲載誌①MARK・No.30（Mark Publishers，オランダ），pp.96-97，  
2011年3月

掲載誌②新建築・84巻・11号（新建築社），pp.150-155，2009年10月、  
…ほか1件

【Nowhere but Zushi808】

掲載誌①Neo2・No.102（Ipsum Planet，スペイン），p.74，2011年4月、  
…ほか1件

【ペーパーバッグのイグルー】

掲載誌①Out of the Box!（Gestalten Verlag，ドイツ），pp.80-81，  
2012年2月

【重窓】

掲載誌①ディテール・191号（彰国社），pp.46-49，2011年11月、  
…ほか1件

【西光寺本堂】

掲載誌①Neo2・No.102（Ipsum Planet，スペイン），p.73，2011年4月

掲載誌②MARK・No.30（Mark Publishers，オランダ），pp.98-99，  
2011年3月

掲載誌③新建築・81巻・12号（新建築社），pp.124-131，2006年11月

【ミラー・エラー】

掲載誌①Arquitectura Viva・No.140（Arquitectura Viva SL，スペイン），pp.48-49，2010年6月

掲載誌②Container Atlas（Gestalten，ドイツ），p.90，2010年4月

【メザニン】

掲載誌①Neo2・No.102（Ipsum Planet，スペイン），pp.74-75，

2011年4月、…ほか1件

【ドリフト】

受賞①第22回吉岡賞（財団法人吉岡文庫育英会），2006年4月

掲載誌①Neo2・No.102（Ipsium Planet，スペイン），p.73，2011年4月

掲載誌②ARCHLAB JAPAN 2006（HYX，フランス），pp.270-273，2006年1月、…ほか5件

【ソレイユプロジェクト】

掲載誌①住宅特集・249号（新建築社），p.130，2006年12月

掲載誌②ARCHLAB JAPAN 2006（HYX，フランス），pp.274-275，2006年1月、…ほか1件

【亀や龍宮殿】

受賞①JCDデザインアワード2005新人賞（社団法人日本商環境設計家協会），2005年12月

掲載誌①新建築・2005年4月号（新建築社）pp.185-198，2005年4月、…ほか3件

【フィズ】

受賞①グッドデザイン賞（公益財団法人日本デザイン振興会），2005年10月

掲載誌①新建築・2005年2月号（新建築社），p.150，2005年2月、…ほか1件

【まつだい農舞台】

掲載誌①新建築・78巻・8号（新建築社），pp.77-85，2003年8月、…ほか1件

【ツートン】

掲載誌①くうかん（ニューハウス出版），p.191，pp.194-195，2004年6月

【ダブル・テンポ】

掲載誌①新建築・2000年1月号（新建築社），p.160，2000年1月





.....

>>謝辞

.....

本論文は、博士課程の学生であった1997年から今日までつづく20年間の私の設計活動が下敷きとなっている。その間、様々なかたちで支えていただいたすべての方々に感謝申し上げます。特に、主査をお願いした古谷誠章先生には、卒論生として古谷研究室に所属して以来、長きに渡り多くのご指導を賜り、建築家としての指針を与えていただいた。また副査をお願いした後藤先生には、第四章の計画について粘り強くご指導いただいた。同じく副査をお願いした田辺新一先生には、語尾の修正に至るまで熱心にご指導いただいた。ここに先生方のお名前を挙げ、あらためて感謝の意を評し、本論の結びとしたい。

ありがとうございました。